



\* 0050063000 \*

0050063-000

特238-188

中学国文教科書教授備考

光風館編輯所・編

光風館書店

卷6

昭和14

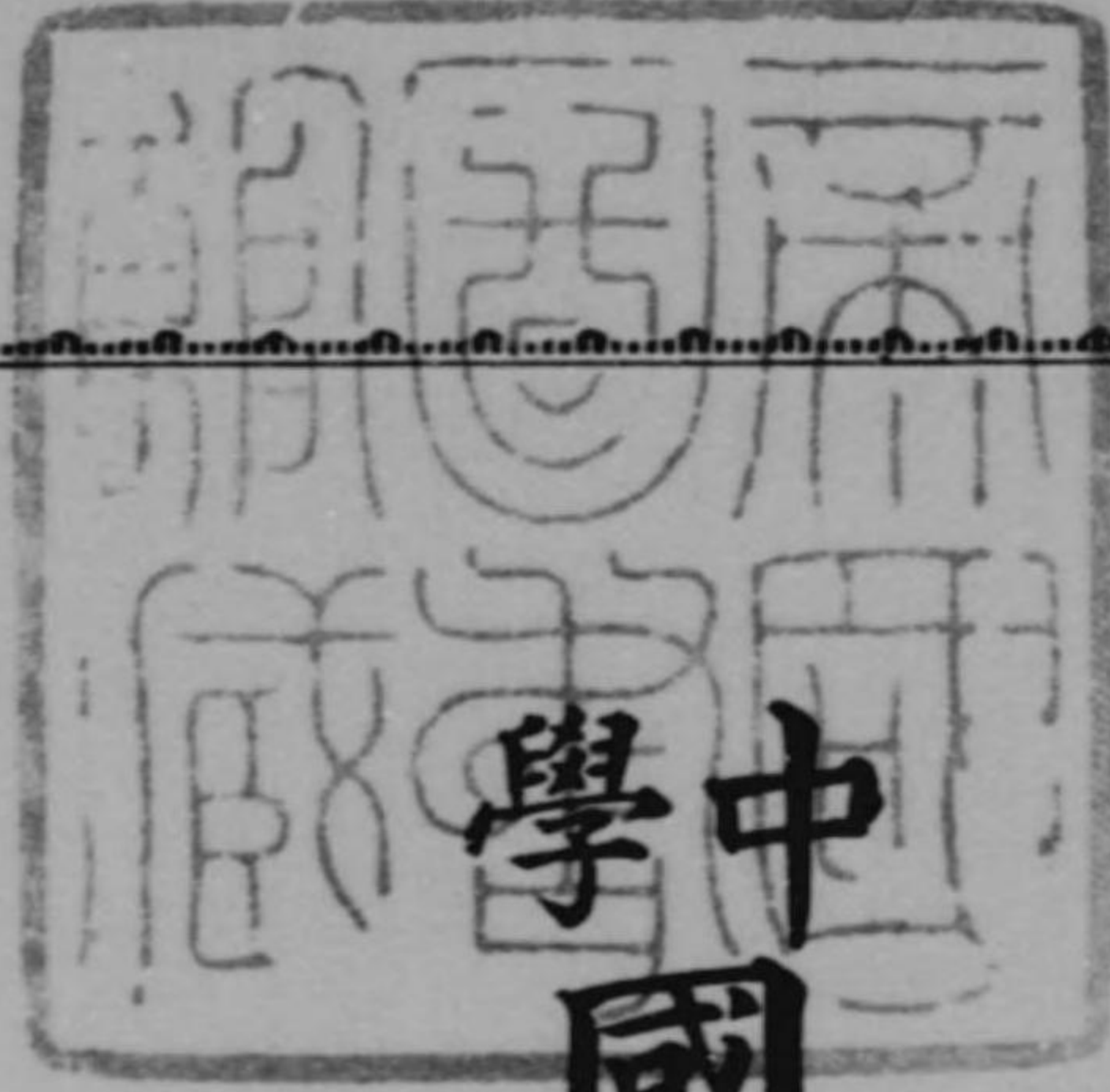
AHJ







特238  
188



中國  
國文教科書教授備考

卷六



非  
賣  
品

東京  
光風館藏版



## 例言

本書は、吉田彌平先生編石井庄司先生補訂<sup>註</sup>國文教科書修正再版の教授にあたられる諸氏の参考に供するために編纂したものであります。

本書編纂の根本方針は、左の諸項に示す通りであります。

- 一 教授の實際に役立つものでなくてはならぬこと。随つて教授に際して取扱はるべき諸種の問題や各般の事項は、つとめてこれを網羅し、能ふ限りの用意を以てこれが解説を試みました。
- 一 平易簡明と思はれる事項をもなるべく取上げて一考を拂ふこと。これは現在の教授者諸氏の教授訓練乃至學校學級經營等に關する事務的負荷の誠に多大な實狀に鑑み、その勞力と時間との節約を慮り、以て教授の能率を増進し、且つ教授の効果を一層多大ならしめようと期する老婆心からであります。
- 一 特殊な意見や専門に過ぎる學說等で、實際教授上に關係の少いものには觸れないこと。總じて無駄はつとめてこれを排すこと。
- 一 新奇に趨らず、所好に偏せず、中正安當、正鵠を期すこと。



以上の方針に従つて記述の内容體裁を次のやうにいたしました。

**解題**

その課の名義由來出典原文との關係等について、簡単な解説をあげました。

**作者**

作者の小傳を記し、更に文壇學界等に於ける位置、作風學說、及び主なる著述等について略述し、殊に教材と關係ある事項の紹介に意を用ひました。

**編纂の用意**

その教材が讀本組織體系に於てこの位置に据ゑられた所以を明かにしました。

**要旨**

その一篇の生命とし、眼目とし、ねらひどころと考へられる點、または一篇の大意について述べました。

**概説**

一篇の構造、各節の要領を略記しました。こゝに節といふのは構想上の一段落をさしたものであつて、必ずしも行の改るところが節の改るところであるといふわけではありません。又節と段との區別も殊更に立てませんでした。

**取扱上の注意**

この項に於ては、一篇の特色や鑑賞批評にわたる事柄、又教授上留意すべき點等を記しましたが、何れもほんの思ひつきの程度で、固より秩序も整はず、説いて精しきを得る所まで到つてゐません。殊に語句の一々を通しての吟味や教授上の留意事項は煩しくなつて、洩れなく書くことは到底出来ませんので、唯その大體の手法を記したものに過ぎません。それで鑑賞の點については要旨の項をも常に参照せられたいのであります。

**設問**

およそ教授の際の設問は、極めて大切なことであつて、或は教授の豫備的に、或は教授の進行中に、又はその終了後になど、種々適宜に施さるべきものであります。が、この項では主として教授の後に試みらるべき種類の問を二三例示したのみであります。(時に豫備的質問も擧げてありますが、それはむしろ例外であります)もしそれ、内容形式の兩方面にわたり、教授の手續段階に應じて、更に鑑賞的に、批評的に、應用的に、試験的に施さるべき問題の一々に至つては、親しく教授にあたられる諸氏の考慮に待つべきもので、唯その際、この設問の項が多少の参考となるなら



ば幸であります。

釋義

語句の解釋、並に文法、修辭についての吟味を試みました。語句の解題については、**イ**先づ語の本義を簡明に記しました。蓋し本義を明かにすることは、解釋上極めて重要なことと考へられるからであります。次になるべくその課その場合に適切な意味をあげるやうにと力を用ひました。またやゝ詳細にわたり、或は參考的に理解して置くべき事項等は、一字下げとして項末に補記しました。

**ロ**平易に過ぎると思はれるやうな語句でも一應解説いたしました。これは教授の正確徹底を期するためであります。平易な事項と雖も事前に教授者の一顧が向けられますならば、教授は一層質の向上を來たすものであると信ずる故であります。

**ハ**語の註釋のみに止まらず、句及び文にわたつた解釋をも施すことに留意しました。

文法、修辭の吟味は、餘り深入りはしないで、その箇所を生徒に十分會得させ、味はせるのに必要と思はれる程度に止めました。

通釋

擬古文上中古文韻文等のうち必要あるものについては、原文を現代文に通釋したものを掲げて、解釋の効果を十分にしようとして試みました。

挿圖

教科書本文中に挿入した繪畫、地圖等、並に教授備考中に挿入した各種の圖版について簡明な解説を加へました。

參考

その他、以上の各項で述べべきことながら、やゝ微細に互ること、或は比較的直接緊要ならぬこと等で、教授者の參考となるべき事項を豊富に補記しました。

右十一項は便宜上項目を立てたに過ぎません。各項の間には常に有機的に密接なる關係が存するものでありますから、教授者諸氏はよろしく視野を擴大して、彼此参照しつゝ利用せられたいのであります。

以上が本備考の方針様式の大要であります。併しながら、教授備考は、畢竟教授の資料を提供し、教授上の示唆に任ずるものに過ぎませんので、勿論これが直ちに教授細案になるものでもなく、又これのみによつて教授の完璧が期待出来るものでもあり



ません。殊に國語科の教授は、教授者諸氏の教材に對する徹底した理解と、熱烈な國語愛の精神と、旺盛な教育力とによつてはじめて見事な成果が結ばれるものと信じます。もし本書の利用によつて、その成果を一層充實せしめて戴くことが出来ますならば、ひとり編者の幸のみではないと存じます。

昭和十四年四月

## 中國文教科書 卷六

### 編纂の概観

一

卷六は卷五と相俟つて第三學年用の教程を完全にするものであるから、編纂の方針は既に述べた卷五のそれと全然同一であるので、こゝに繰返へすことを略す。例によつて教材の分類を試みると次の如くである。

#### (イ) 教材の時代の色分け

##### 現代口語文

- 一 聖徳太子
- 二 ちとせの宿
- 七 偉人
- 八 自他一如
- 一一 日本の庭園



- 一二 作文趣味
- 一六 長柄堤の訣別
- 一九 戯作三昧
- 二五 富士の靈
- 二六 文化と健康

現代文語文

- 五 箱根路
- 一三 鹽原
- 二三 物の初

近世の文

- 一八 誠 (梅園叢書)
- 二〇 芳流閣 (里見八犬傳)

近古の文

- 三 空行く雁 (曾我物語)
- 四 夜討曾我 (謡曲)

- 九 神無月の頃 (徒然草)
  - 一五 鼓の瀧口 (平家物語)
  - 二七 大楠小楠 (太平記)
  - 二三 浮島が原 (義經記)
  - 二四 鴨越 (源平盛衰記)
  - (ロ) 和歌教材としては
    - 一四 水菫
- を置いた。現代和歌の中、正岡子規の系統を引く歌人の一派の作から採つたものである。
- (ハ) その他の韻文教材としては
    - 六 朝 (新體詩)
    - 一〇 案山子 (川柳)
- を置き、
- (ニ) 劇文學としては
    - 四 夜討曾我 (謡曲)



- 一六 長柄堤の訣別 (新劇)
- (ホ) 書翰文體の

- 二一 弟を戒む

を採る等、時代的に、種類の上に、多方面にわたつて居るのである。

二

次に新教授要目が規定した國語講讀材料の項目を基準として本卷の教材を分類してみると左の通りである。

(イ) 國體の精華を敍したるもの

- 一 聖德太子

(ロ) 國土の醇美、國民の美風等を敍したるもの

- 一 空行く雁

- 四 夜討會我

- 一一 日本の庭園

- 一五 競の瀧口

- 二〇 芳流閣

- 二三 浮島が原

- 二四 鴨越

- 二五 富士の靈

(ハ) 偉人の言行等を敍したるもの

- 二 ちとせの宿

- 一七 大楠小楠

等であつて、これらはいづれも國體明徴、日本精神の高揚に關するところのある教材である。

(ニ) 文學趣味に富むもの

- 五 箱根路

- 六 朝

- 九 神無月の頃

- 一〇 案山子

- 一二 作文趣味

- 一三 鹽原



- 一四 水 莖
  - 一六 長柄堤の訣別
  - 一九 戯作三昧
  - 二〇 芳流閣
  - 二二 物の初
- 等である。

又

- 七 偉 人
- 八 自他一如
- 一八 誠
- 二二 弟を戒む
- 二六 文化と健康

等、思索的或は教訓的教材をも相當に加へて、生徒の思想の陶冶、思索力の鍛鍊を試みることを期した。

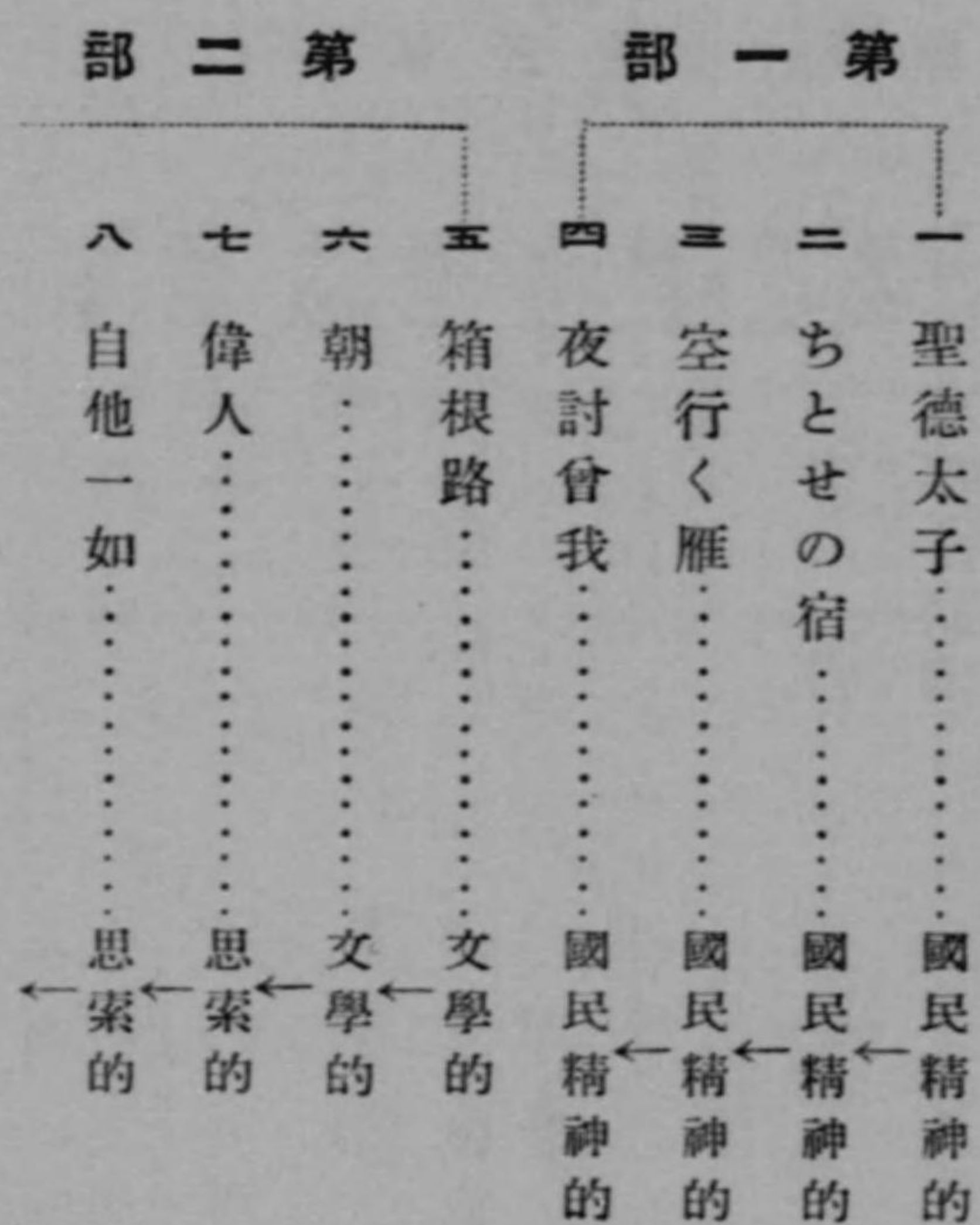
その他國文學の特殊の形式たる

- 謡 曲 (四 夜討會我)
- 新體詩 (六 朝)
- 川 柳 (二〇 案山子)
- 劇 (二六 長柄堤の訣別)

等をも編入して教材の性質を多方面に擴大することにつとめた。

三

以上の教材を排列して得たる讀本體系は左の如くである。





部 三 第	部 四 第	部 五 第
九 神無月の頃…………… 思索的(文學的)		
一〇 案山子…………… 文學的		
一一 日本の庭園…………… 國民精神的		
一二 作文趣味…………… 國民精神的(文學的)		
一三 鹽原…………… 文學的		
一四 水莖…………… 文學的		
一五 鏡の瀧口…………… 國民精神的		
一六 長柄堤の訣別…………… 國民精神的(文學的)		
一七 大楠小楠…………… 國民精神的		
一八 誠…………… 思索的		
一九 戲作三昧…………… 文學的		
二〇 芳流閣…………… 文學的		
二一 弟を戒む…………… 思索的		
二二 物の初…………… 思索的		
二三 浮島が原…………… 國民精神的		

中國文教科書卷六に據る

教授細目案

部 六 第

二四 鴨越…………… 國民精神的
二五 富士の靈…………… 國民精神的
二六 文化と健康…………… 國民精神的

月	十 月	一 十 月	週	時數	教 材	摘 要
	十二 第二	十三 第二	十四 第二	十五 第二		
	2	1	2	1	聖德太子	聖德太子の日本精神を仰がしむ。
		ちとせの宿				
		空行く雁(次週(跨ル))				
		夜討會 我(次週(跨ル))				
					箱根路	文學趣味を涵養す。



月		十月					月	
十三	十二	十一	十	九	八	七	十六	第二
2	2 1	2	1 1	1	2	2	2 1	朝
長柄堤の訣別(次週(跨ル))	水の瀧口(次週(跨ル)) 莖	鹽原	日本の庭園 作文趣味	案山子	神無月の頃(次週(跨ル))	自他一如(次週(跨ル))	偉人(次週(跨ル))	朝
文學趣味の養成。	現代短歌讀解の練習。 近古文の讀解練習。	文語文の讀解練習。	同上	川柳の一斑を知らしむ。	近古文の讀解練習。	同上	文學趣味の養成。 思索的文章の讀解練習。	

月		二月					月	
十一	十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	第三
1 1	2	2	1	2	2 1	1	2	大楠小楠(次週(跨ル))
富士の靈 文化と健康	鶴越	浮島が原	物の初	弟を戒む(次週(跨ル))	戯作三昧 芳流閣(次週(跨ル))	誠		
日本的なるものの認識。 修養上に資せしむ。	同上。	近古文讀解の練習。	文語文讀解の習練。	候文體の習熟と、思索的文章の習熟。	文學的趣味の涵養。 近世文に習熟せしむ。	思索的文章の讀解の練習。		近古文の讀解練習。



備考 毎週の教授時間数を二時間として立案せり

# 中國文教科書教授備考 卷六

## 目次

一	聖徳太子	花山信勝	一
二	ちとせの宿	芳賀矢一	一七
三	空行く雁	〔曾我物語〕	二七
四	夜討曾我	〔觀世流謠曲〕	三九
五	箱根路	正岡子規	五九
六	朝	島崎藤村	七
七	偉人	嘉納治五郎	五
八	自他一如	橋田邦彦	二三
九	神無月の頃	兼好法師	二九



一〇 案山子……………一四五

一一 日本の庭園……………龍居松之助 一五五

一二 作文趣味……………高橋箒庵 一六三

一三 鹽原……………尾崎紅葉 一八一

一四 水莖……………一九九

一五 競の瀧口……………〔平家物語〕 二二三

一六 長柄堤の訣別……………坪内逍遙 二二七

一七 大楠小楠……………〔太平記〕 二六五

一八 誠……………三浦梅園 三三三

一九 戲作三昧……………芥川龍之介 三三三

二〇 芳流閣……………瀧澤馬琴 三四七

二一 弟を戒む……………高山樗牛 三七五

二二 物の初……………幸田露伴 三六五

二三 浮島が原……………〔義經記〕 三九五

二四 鴨越……………〔源平盛衰記〕 四一五

二五 富士の靈……………野口米次郎 四三九

二六 文化と健康……………渡邊錠太郎 四五一



目次終

中國文教科書教授備考 卷六

一 聖德太子

花山信勝

1 解題

花山信勝著「聖德太子と日本文化」中より節録したものである。この書は文部省に於て編纂した日本精神叢書中の一著であつて、聖德太子の御事績を解説的に敘したものである。昭和十年、日本文化協會出版。

2 作者

花山信勝 ハナヤマ シンシャウ。明治三十一年（二五五八）石川縣に生れた。東京帝國大學印度哲學科を卒業した。佛教史、佛教思想史等の研究家である。現に東京帝國大學、東京文理科大学等に佛教史を講じてゐる。

3 編纂の用意

巻頭に於て、日本文化史、日本精神史上に於ける一大巨

4 要旨

星にまします聖德太子の御事績、特にその自主獨往、我が國威を保ち、我が國を本として對外的に折衝し給うた偉大なる御志を奉じ、以て國民精神の作興と、我が國體の精華の認識に資せしめたいと思ふ。

聖德太子は實に我が歴史上に於ける大偉人にまします。その鴻業は將に驚嘆に價するものである。その御事績は我が文化史上燦として光を放つものである。と同時に、かゝる興隆の過程に於けるにも拘らず、その國家的御自覺を以て大國隋と對等の國交を修し給うたことは、我が國民精神史上の最大光彩である。これらをよく吟味せし



めて、生徒の精神修養に資せしめたい。

### 5 概説

第一節(一頁—一頁一〇行)

聖徳太子は政治家として、大宗師として、大學者として偉大なる存在であらせられたこと。

第二節(一頁二行—四頁七行)

聖徳太子御一代の盛徳偉業の概略を説述した。

第三節(四頁八行—八頁三行)

特に太子の自主的御偉業として、隋と對等の國交を修し給うた事績を述べた。

第四節(八頁四行—終)

隋と對等の國交を修するについて、國內の整備に意を用ひ給ひ、又佛教の説を輸入する場合にも必ず嚴密なる批判を行ひ、決してこれを盲信し給はざりしこと。

### 6 取扱上の用意

【聖徳太子が我が國史上の最も傑出したる人の一人であらせられたこと、その御一代の御事績の驚嘆に價するほどのものであることは、今更の事ではないのであるが、

殊に近年日本文化に對する検討が盛となり、日本精神の研究が盛となるやうになつてから、太子の御事績は一層明らかに國民の認識に上り、人々争つてこれを再吟味し

認識を深めてゐる状態である。さういふ時勢であるから、本課によつて、生徒の理解を出來得る限り豊富なものにしてやりたい。さうして、その對外的御態度、外來文物に對する御取扱といふやうなものについて、そこに儼乎たる日本精神の輝きを發見せしめて、各自の修養の一助とせしめたい。

【聖徳太子御一代の事績は本文にも略説してあるが、國史で學んだ處その他から、その御事業の全貌を生徒各自をして蒐集し系列づけしめること等を課してやることによからう。

【當時、すべての文明文化を仰いだ大國隋に對して對等の國交を遊ばされた點を、爾後の各時代の對外態度、例へば足利義滿、江戸時代の儒學者、明治維新後の爲政者の或者、その後の西洋心醉者等の態度と比較して考へしめ、太子がいかに日本人としての偉大な御精神を有し給

うたかを敬し奉りたい。

### 7 設問

1 我が國の歴史上の人物で、

一代の政治家として

百世の宗師として

千載に大著述を遺した學者として

數へ上ぐべき人を考へて見よ。

2 聖徳太子の精神界に於ける御偉業は。

3 聖徳太子の物質界に於ける御偉業は。

4 聖徳太子の憲法と今日の政治上の憲法との差違は如何。

### 8 釋義

【聖徳太子】 シャウトクタイシ。用明天皇第一皇子。御母は穴穗部間人皇后。御名厩戸豐聰耳皇子また厩戸皇子・八耳皇子・上宮太子とも奉稱、後世御徳を稱へて聖徳太子と呼び奉る。推古天皇元年、皇太子・攝政となり、十二年憲法十七條を制定せらる。釋教を好み、博く典故に通

じ、國記を撰し、學術・工藝を奨め給ひ、また大いに佛法を興隆し給ふ。二十九年(一に三十年といふ)斑鳩宮に薨す。御年四十九歳。

【上下三千年】 シャウカサンゼンネン。昔から今に至るまで三千年。二千五百餘年を大體にかう言つたものである。

【國家經綸】 コクカケイリン。國家をととのへ治めるところ。國家を經營すること。

中庸に「經綸天下之大經、立天下之大本。」  
【手腕】 シュワン。(一)腕。(二)うでまへ。技倆。こゝは(二)の意味である。

晋書の淳于知傳に「智乃以朱書手腕。」  
【百世の宗師】 ヒャクセイノソウシ。百代の後までも師と仰がれる。宗教上の偉人。

【渴仰】 カツガウ。渴しては水を思ひ、山に向つては高きを仰ぐが如き意で、深く信仰すること。深く歸依すること。

法華經の壽量品に「心懷戀慕、渴仰於佛。」とある。  
【千載】 センサイ。千年。



【著述】 チョジュツ。文書をのべあらはすこと。

論語の述而篇「述而不作」の疏に「此章記仲尼著述三謙也。」

【遺し】 ノコシ。

【貢献】 コウケン。みつぎものをたてまつる。轉じて世の爲につくすこと。

左傳昭公十三年に「貢獻無極」

【さりながら】 接續詞である。しかありながら。然しなごらの意である。

源氏物語に「さりながらも物に心得給ひて、なげかしき心のうちも」

【兼備へた】 カネツナへた。二つ以上の物事が同時に備はつてゐること。

【精神界】 セイシンカイ。精神上の現象の範圍。精神の世界。精神の語は莊子の刻意篇等にも、

「精神四達並無流所不極。上際干天、下蟠于地。」

とある如く、こゝろ。心のはたらきの意味である。

【物質界】 ブツシツカイ。精神界の對で、物質に關する範圍をいふ。物質とは物體の義で、即ち形體又は質量を有

するものをいふ。

【裨益】 ヒエキ。助けとなり。利益となること。補益すること。

詩經抑風の北門の詩に「王事適我。政事一裨益我」

【肇國】 テウコク。はじめて國を建てること。國を開きはじめること。開國。建國。

書經に「乃稷考文王。肇國在西土。」

【闡明】 センメイ。隠れた道理又は意義をあらはし明かにすること。

【海外】 カイグワイ。外國。

【國威】 コクキ。國の威勢。國のいきほひ。

管子に「同一人心、二國威。」

【發揚】 ハツヤウ。(一)ふるひおこすこと。振作。

禮記の樂記に、

「發揚蹈厲之已蚤。何也。對曰、及時事也。」

(二)あげあらはすこと。引きあげること。

後漢書の樊準傳に「發揚巖穴、龍進儒雅。」

とある。こゝは(二)の意味である。

【大陸文化】 タイリクブンクワ。日本でいふときは支那文化及び印度文化等をいふ。大陸とはアジア大陸を指す。

【文運】 ブンウン。(一)學問上の氣運。世の中の學問の形勢。文藝の趨勢。先哲叢談の佐藤一齋序に、

「文運之盛衰、關乎世道之汗隆、徵諸文運之盛衰。」

とある。(二)文明の氣運。こゝは(一)の意味である。

【興隆】 コウリキウ。興り榮えること。隆盛なこと。諸葛孔明の出師表に「親賢臣遠小人、此先漢之所興隆也。」

【建設】 ケンセツ。たてまうけること。新たにおこし造ること。

禮記の祭義に「建設朝事。」

【不世出】 フセイシュツ。めつたに世に出て來ないこと。希有。

史記の淮陰侯傳に「功無二於天下、而略不世出者也。」

【偉人】 キジン。えらい人。すぐれた力量をもつた人。

魏志の鐘繇傳に「此三公者、乃一代之偉人也。後世殆難繼矣。」

【御治世】 ゴヂセイ。天皇のお治めになる時代。

【神祇】 シンギ。天神と地祇と。天の神と國の神と。かみがみたちをいふ。

論語の述而篇に「禱爾于上下神祇。」

【崇拜】 スウハイ。たふとびをがむ。尊敬する。

南齊書、百官志に「左僕射領殿中、主客二曹事臨軒崇拜。」

【天皇中心思想】 テンワウチュウシンシサウ。我が國の天皇は、日本帝國といふ一大家族の中心即ち、宗家であら

せられる。臣民はその分家であり、子孫であるから、一家で親を中心集るやうに、天皇を中心として仰ぎ奉ることである。國家と天皇とは身體と頭腦の關係である。

【確立】 カクリツ。しかと定まり立てること。しつかりとして動かぬこと。

【畏し】 カシコシ。おそれおほい。

【任那日本府】 ミマナニホンフ。朝鮮南部の任那即ち大加

羅國に置き半島内にあつた内宮家を統轄した役所。我が垂仁天皇の朝大加羅國が入朝して保護を乞ふや、鹽乘津



彦を遣はして宰として鎮撫せしめられた。これが任那日本府の初である。その位置は慶尙南道咸安郡の内といはれてゐる。爾後在任の我が使臣の施設經營その宜しきを得ず、遂に欽明二十三年に至りて日本府は滅亡した。

【大隨國】 ダイズキコク。楊堅が後周の禪位を受けて建てた王朝。三世三十七年（西紀五八一——六一七）にして唐に讓る。

【對等外交】 タイトウグアイカウ。外國との國交を對等の關係に於いて行ふこと。大國に對しても屈從するやうな態度をとらぬ外交。

【文明】 ブンメイ。文化。

【三寶】 サンボウ。(一)佛寶(佛即ち佛陀)・法寶(佛の説いた教法)・僧寶(その教法に隨つて修業する者)の併稱。觀無量壽經に「恭敬三寶奉事師長。」

【冠位】 クワンキ。冠で上下を表章した位階。推古天皇に始まり、位階の制が行はれるに及んで廢した。

推古紀の十一年十二月に、「始行冠位、大德・小德・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智并十二

階、並以當色絶縫之。」とある。之を冠位十二階といふ。

【制定】 セイテイ。つくりさだめる。

後漢書の曹褒傳に「肅宗欲制定禮樂。」とある。

【憲法】 ケンパウ。のり、おきて。こゝは憲法十七條をいふ。推古天皇十二年四月に定められた。その要點を示せば次の如くである。

一曰、以和爲貴。

二曰、篤敬三寶。

三曰、承詔必謹。

四曰、以禮爲本。

五曰、明辨訴訟。

六曰、懲惡勸善。

七曰、人各有任。掌宜不濫。

八曰、群卿百寮。早朝晏退。

九曰、信是義本。

十曰、絶忿棄瞋。

十一曰、明察功過。

十二曰、國司國造、勿斂百姓、率土兆民、以王爲主。

十三日、諸任官者、同知職掌。

十四日、無有嫉妬。

十五日、背私向公、是臣之道矣。

十六日、使民以時。

十七日、大事不可獨斷。必與衆宜論。

【學藝】 ガクゲイ。(一)道德藝術を學ぶ。德行及び六藝を學ぶ。(二)學問と六藝。

風俗通義の十反に「則其學藝則家法、治覽、誨人不倦矣。」(三)學問と藝術と。こゝは(二)或は(三)の意味である。

【殖産職業】 産業を振興し生産物を増加せしめ、事業を興すこと。

唐書の李愷傳に「愷通左氏春秋、頗殖産伊川、占膏腴。」とあり、又、

史記の太史公自序に「孔氏述文、弟子興業、咸爲師傅、崇仁厲義。」

【獎勵】 シヤウレイ。すゝめ勵ますこと。

後漢書の魏朗傳に「到官獎勵吏兵、討破群賊。」

【編修】 ヘンシウ。書物を編みとゝのへること。又その人

をいふことがある。

【御足跡】 ゴソクセキ。おあしあと。御經過なされたあと。

【御在世】 ゴザイセイ。御存命。この世に生きて居られた時。

【當時】 タウジ。(一)その時。

蘇洵の上田樞密書に「曩者見執事於益州、當時之文、淺狹可笑。」(二)たゞいま。現在。こゝは(一)の意である。

【法主大王】 ホツスダイワウ。佛教を主として統領なさる大王の意味。

【聖王】 セイワウ。聖德のある天子。聖德太子の御名もここから出でるか。

禮記の禮運に「故人情者、聖王之田也。」

【尊稱】 ソンケイ。尊びて呼ぶ名稱。敬稱と同じ。

左傳の宣公元年に「遂以夫人婦妾、至自齊。」の杜注に「遂不言公子、替其尊稱。」

【尊敬】 ソンケイ。たふとびうやまふ。

禮記の曲禮上に「侍坐於所、尊敬毋餘席。」



【薨去】 コウキ。親王及び三位以上の人の死にいふ。

【曾て】 カツて。かねて。昔から。

【師友】 シイウ。師と仰ぐべき友。漢書に、「爲師友」とある。

【慧慈】 エジ。高麗の僧。推古天皇の三年（一二五五）の五月來朝す。翌年、元興寺成り慧聰と共に聘せられて之に居る。天皇の二十三年十一月高麗に去るに當り、太子の法華經疏を携へて其の國に傳へた。三十年二月五日、高麗で寂したといふ。

【齋】 サイ。法會を修するとき供へる食事をいふ。

【追懷】 ツキクワイ。過去の事柄、又は人などをなつかしく思ふこと。

【讚歎】 サンタン。深く感動してほめること。

【鴻恩】 コウオン。大なるめぐみ。

吳越春秋に「蒙大王鴻恩」

【百姓】 ヒヤクセイ。一般人民。庶民。

孟子の梁惠王章句上に「梁惠王曰、誠有百姓者。」

【亡へる】 ウシナへる。

【日本書紀】 ニホンシキ。歴史書。三十卷。舍人親王、太安麻呂等編。養老四年成。寛文九年刊。別稱、日本紀。

六國史の第一。神代より持統天皇に至る編年體の正史。古代史・上代史研究に不可缺のものである。

【非凡】 ヒボン。平凡でないこと。なみ勝れたこと。又そのもの。

三國志の蜀志の先主傳に「舍東南角、上有桑樹生、高五丈餘。往來者皆怪此樹非凡。」

【わたらせられた】 「わたらせ」は敬讓動詞で、「居る」の意。「られ」は敬讓の助動詞。である。

【確乎】 カクコ。たしかに。しつかりと。

易經乾の卦の文言傳に「確乎、其不可拔」

【礎石】 ソセキ。基礎となる石のこと。いしづゑ。

【變遷】 ヘンセン。うつりかはり。推移。

建武の初夏偶書の詩に「江潭四月懸梅天、頃刻陰晴遷變遷。」

【復活】 フククツツ。生きかへること。よみがへること。蘇生。

晋書の顔含傳に「我壽命未死。…今當復活、慎毋葬也。」

【永遠】 エイエソ。永くとほく。久しく。いつまでも。

書經の君爽に「我亦不敢寧于上帝命、弗永遠念天威。」

【基調】 キテウ。楽曲の全體を通して基礎となる調子。即ち一つの楽曲の最初と終りをなす調子。こゝでは基礎の意味で用ひてゐる。

【赫々たる】 カクカクたる。(一)威光又は功績の盛んなさま。(二)乾燥して熱いさま。早魃の形容。

詩經小雅の出耳篇に「赫々南仲、羸狁于襄」

とある。(二)乾燥して熱いさま。早魃の形容。

詩經大雅の雲漢篇に「赫々炎炎、云我無所。」

こゝは(一)の意味である、

【光彩】 クワウサイ。きら／＼しくかゞやくこと。美しいかゞやき。ひかりのあや。光輝。

北齊書の魏收傳に「朝有魏收、便是國之光彩。」

【歴史の流】 レキシのナガレ。歴史を水流に譬へていふ。水の流れて已まざる如く、歴史も移り變はり、永久にとどまらぬ意味である。

【國學者】 コクガクシャ。中世以來、漢學に對して我が國

書を研究する學問を國學と稱するやうになつた。之を研究する人を國學者と云ふ。和學者、皇學者ともいふ。賀茂眞淵・木居宣長・荷田春滿その他をいふ。

【誤解者】 ゴカイシャ。あやまり解する者、主として悪く解する者にいふ。

【御徳業】 ゴトクゲフ。御徳と御事業の意。

後漢書の楊修傳に「自震至彪、四世大尉、徳業相繼、與袁氏俱爲東京名族。」

【累す】 ワヅラハす。とがめる。つみする。

【正當】 セイタウ。(一)まさしく道理に當ること。理の當然なること。(二)丁度相當すること。(三)正直でまめなこと。こゝは(一)の意味である。

易經の履卦の象傳に「夫履貞勳、位正當也。」

【太宗】 タイソウ。支那で太祖につきその王朝又は公室に功の有つた有力な祖先に附する廟號。大なる祖先の義。

【異論を挾む】 イロンをサシハサむ。異なる意見をいふ。容喙すること。



【盛徳偉業】 セイトクキゲフ。盛んな御徳とすぐれた御事業と。

【枚擧】 マイキョ。かぞへあげること。

【違ない】 イマトない。ひまがない。

【自主的御精神】 ジシユテキゴセイシン。他の力を俟たず自己に關する一切のことを自己の力で處理して行かうとなさる御精神。

【推古天皇第十五五年】 スイコテンワウダイジフゴネン。紀元一二六七年に當る。

【秋七月】 アキシチグツツ。秋は七月、八月、九月である。舊曆である。

【外交使節】 グァイカウシセツ。國家間の公の交通を圓滑にし談判の便宜を計るため、並にその他の國際事務を處理するために、一國が臨時若しくは常駐的に他國に派遣する元首又は政府の代表者。今日の外交使節は大使、全權公使、辨理公使及び代理公使である。

【大禮小野臣妹子】 タイレイオノオミイモコ。大禮は聖徳太子の定められた十二の冠位の一つ。推古天皇の十五

年初めて隋に使し、翌年隋使裴世清を伴ひ歸國、途に隋の國書を失ひ、勅赦を受けて再び隋に赴いた。

【派遣】 ハケン。手分けして送り遣ること。また命じて出張せしめること。差遣。

【鞍作福利】 クラツクリノフクリ。推古朝の廷臣。小野妹子の隋に使用する時、通事として隨ふ。

【隨行】 ズキカウ。後に隨つて行くこと。ともをすること。

禮記の王制に「父之齒、隨行。」

【國書】 コクシヨ。一國の元首がその國の名を以つて發する外交文書。(二)一國の記録。又我國の記録。(三)我國でつくられた書籍。こゝは(一)の意味である。

【恙】 ツ、ガ。やまひ、わづらひ。災難。宇津保物語、藏開卷下に、「大將、いさゝかの足手の恙もあらば、あそんのすると思はん。」とある。

【隋書】 ズキシヨ。隋代の歴史。八十五卷唐の太宗の貞觀三年。魏徵等の編に係る勅撰の書。もと五代志と言ふ。帝紀、列傳、並に禮儀、音樂、律歷、天文、五行、食貨、

刑法、百官、地理、經籍の十志上り成る。

【楊帝】 ヤウダイ。隋の第二代の主。姓は楊、名は廣、一名英。小字は阿摩。高祖文帝の第二子。即位するや文帝の後を繼ぎ、諸制を整備したが、土木を窮極し奢侈度なし。天下は騷然として盜寇蜂起す。在位十二年。字文化に殺された。

【鴻臚卿】 コウロケイ。支那の官名。鴻臚寺の長官。唐六典一八の鴻臚寺に、

「鴻臚卿之職、掌賓客及凶儀之事。」

【蠻夷】 バンイ。えびす。夷狄。

書經の舜典に「夷蠻率服。」

【聞す】 ブンス。奏聞する。

【嚴命】 ゲンメイ。きびしく命令すること。又その命令。史記の趙世家に「進受嚴命。」

【中華】 チュウクワ。四方の外國に對して、中央に位し、文華の開けた國の義である。中國も同意である。

三國志の蜀志の諸葛亮傳の註に「若使遊步中華……。」

【蠻夷視】 バンイシ。蠻夷の如くにとり扱ふ。

【彼我】 ヒガ。支那と日本との。

【著しい】 イチジルしい。甚しい。はつきりめだつ。

【旭日昇天】 キョクジツシウテン。旭が天に昇る時のやうに勢の盛んなさま。

【歸朝】 キテウ。(一)遠き地方から朝廷に歸ること。

舊唐書の張茂昭傳に「張茂昭、立功河朔、擧族歸朝。」

とある。(二)轉じて、すべて外國へ行つた人が自國に歸ること。

【掌客】 シャウキヤク。王朝時代臨時の職名。外國の使節在留中の雜事を掌る。

【裴世清】 ヒセイセイ。北史倭傳に文林郎裴世清とある。

【下客】 シモベ。日本書紀通釋に直ちに「シモベ」と訓じてあるのに從つた。從者である。

【しつらへ】 設ける。とゝのへる。

【難波】 ナニハ。大阪邊をいふ古の國名。

【江口】 エグチ。平安朝時代、神崎・三島と共に攝津の三遊所の一。今大阪市東淀川區東北端の町名。古は瀬戸内海の海船と淀川の川船との乗替へのため船泊り多く非常



に繁昌したが、後農村となつた。

【飛鳥京】 アスカノキヤウ。奈良縣高市郡飛鳥村及び高市村附近の地。推古天皇から持統天皇まで約百餘年間皇居を置かれた所。

【飾騎】 ショクキ。飾りをつけた馬。

【海石榴市】 ツバイチ。又椿市とも書く。昔、大和磯城郡三輪町にあつた市。推古天皇の御代、唐使裴世清をこの地に迎へ、また龍宮を造營する等のがあつた。長谷の山で観音參詣の通路に當るので、古は榮へたが今は全く荒廢した。

【衢】チマタ。道股の義である。(一)道の分岐するところ。(二)街の中の路。町どほり。(三)ところ。場所。こゝは(二)の意である。

【歡待】 クァンタイ。よろこんでもてなす。

【髻革】 ウズ。古昔、冠の上にかざした飾をいふ。

古事記に「くまがしが葉を髻華にさせその子」

【錦紫織】 キンシシウシク。紫色の錦とぬひとりのある織物。

【綾羅】 リウラ。あやぎぬとらすぎぬ。

【莊嚴】 サウゴン。おごそかでいかめしいこと。

【拜謁】 ハイエツ。目上の人に面會するの用に用ひる敬語。

史記の孝文本紀に「代王馳至渭橋、群臣拜謁稱臣。」

【難波吉士雄成】 ナニハノキシヲナリ。推古天皇の御代の朝臣。難波吉士は、難波地方に居住したもので、氏人に難波吉士日香蚊といふのがあり、雄略朝大草香部吉士の姓を賜ひ、のち連姓、忌寸姓を賜はつた。

【敬みて】 ツツシみて。

【白す】 マヲス。申すと同じ。

【久憶】 キウオク。長い間思つてゐたこと。

【方に】 マサに。丁度今。

【季秋】 キシウ。秋の末をいふ。

【尊候】 ソンコウ。敬語。貴方をいふに同じ。

【清念】 オダヤカ。念は音「ト」。楽しむさまをいふ。

【大禮蘇因高】 タイレイソイコ。蘇因高は妹子に對して唐國が贈つた號である。小妹子を字音に換へたものであらう。

【大禮乎那利】 タイレイオナリ。大禮難波吉士雄成。雄成を字音にて記したもの。

【謹白不具】 ギンバクフグ。謹んで申す。不具は手紙の終に附し、意の盡きない意である。

【正々堂々】 セイセイダウダウ。態度の公明で勢の盛んなさま。手段の正しいさまにいふ語。

孫子の軍争に「無選正正之旗、無擊堂堂之陣。」

【國際關係】 コクサイクァンタイ。國家間に於ける國交上の關係。

【儼然】 ゲンゼン。きつぱりといかめしいこと。論語より出た語である。

【一躍】 イチヤク。一足とびにとび上ること。

【君子國】 クンシコク。徳義を重んじ、風俗善良なること君子の如き國。

山海經に「君子國、衣冠帶劍、其人好讓不爭。」

【開關】 カイピヤク。天開け地開ける。世界の初め。開國と同じ。

【一新紀元】 イチシンキゲン。epoch-makingの譯語であ

る。新しい時代の初まること。

【制度】 セイド。おきて。政治上のさだめ。

左傳の襄公二十八年の條に「爲之制度、使無遷焉。」

【文物】 ブンブツ。一國の文化に関するもの。法律、禮樂、典章などをいふ。

左傳の桓公二年に「文物以紀之……。」

李白の詩に「朝野盛文物、衣冠何翕然。」

【政治機構】 セイジキコウ。政治機關の構成。政治をなす機關の組立て方。

【向上】 カウジャウ。(一)上に向つて進むこと。進歩。

莊子の人間世篇の註に、「無以進者、言更無向上者也。」

(二)より上。以上。(三)最高。こゝは(一)の意味である。

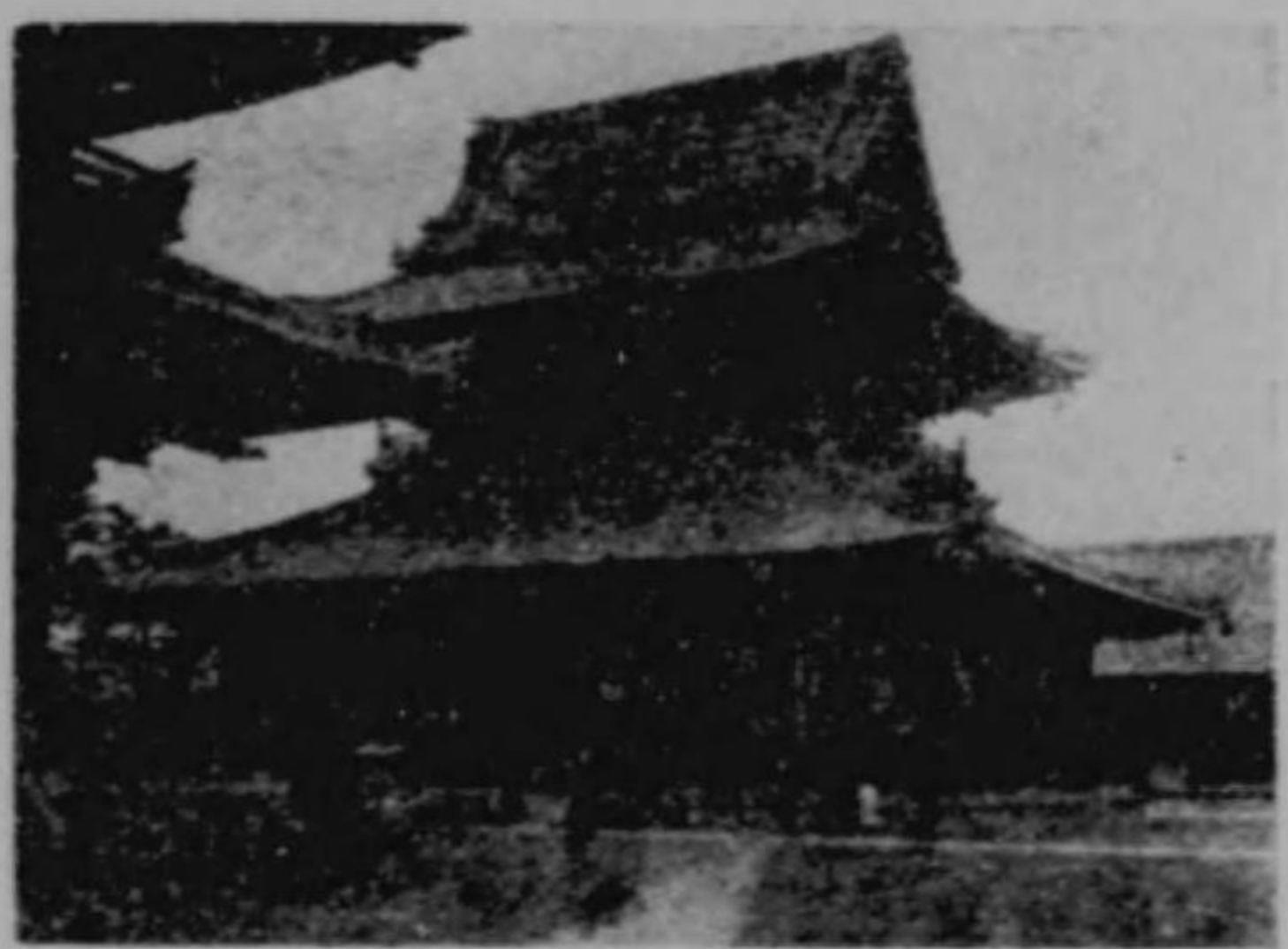
【興隆】 コウリウ。おこりさかなること。隆盛。

【優越】 イウエツ。すぐれまざること。秀ですぐれること。

【拜察】 ハイサツ。推察の敬語

【關門】 クァンモン。關所の門。こゝは單に出入口の意である。





寺院のこと。

【四天王寺】 シテンワウジ。大阪市南区天王寺元所。別稱荒陵寺。天台宗の寺である。用明天皇二年、(一)二四七建立。推古元年に現地に移す。織田信長の兵火等に逢ひ文化九年に再興した。

【大伽藍】 ダイガラン。大

魏書の釋老志に「梵境幽玄義歸三清曠、迦藍淨土理絕、鷲摩、」

【建立】 コンリフ。(一)建てること。建設すること。(二)(佛)

一、たてること。法門をたてて願をたて、寺塔像をたてる等。二、建は初起のこと。立は終成のこと。こゝは(二)の一、の意味である。

【趣旨】 シュシ。むね。おもむき。趣意。

【指南】 シナン。(一)道しるべ。てびき。(二)教へ導くこと。

鬼谷子の謀に「故鄭人之取玉也。載司南之車、爲其不惑也。」

【三經の義疏】 サンキヤウのギソ。無量義經、法華經觀音堅經の三を三經といふ。義疏とは經書の意義を解釋したものの意味である。なほ敎宗の差で、三經は異なる。こゝは法華の三部經である。

【學匠】 ガクシヤウ。佛道を學習てゐる者をいふ。學侶・學徒ともいふ。

【須ひず】 モチひず。

【批判】 ヒハン。(一)批評判斷すること。(二)臣下から上る奏狀に宰相が意見を加へるのをいふ。(三)雙方の主張・申し立て、こゝは(一)の意味。

【所以】 ユエン。わけ。理由。

### 9 挿圖

#### 聖徳太子勝鬘經講圖

太子が群臣僧侶を集めて、親しく勝鬘經を講じ給うたことが書紀等に見えてゐる。それによつて畫いたもの。

## 二 ちとせの宿

芳賀 矢一

### 1 解題

「芳賀矢一文集」の中の「本居翁遺跡」の一、四、五、六の章を節録したもので、明治四十四年十一月、雑誌「學生」に登載したものであつて、文末に「十月十一日奈良の宿にて」と記してある。

「芳賀矢一文集」は、文學博士芳賀矢一のエッセイ・隨筆・詩歌・日記・書翰等を集録したもので、嗣子芳賀禮の編にかゝる。

昭和十二年、東京、富山房發行。

### 2 作者

芳賀矢一 ハガ ヤイチ。

舊福井藩士芳賀眞咲の長男。慶應三年福井に生れた。明治二十五年東京大學文科を卒業し、二十八年第一高等學校教授兼高等師範學校教授となり、三十一年東京帝國大學文科大學助教授、ついで教授に進み、高等師範學校教授を兼ねた。三十三年文學史攻究法研究のため獨逸に留學を命ぜられて、柏林大學に學び、それより英、佛を巡遊し、三十五年歸朝した。爾後、東京帝國大學にあつて専ら國文學を講じ、傍ら文部省の國定讀本編纂委員として小學

### 3 編纂の用意

國語讀本の起稿に盡力した。後、國學院大學長に就任した。昭和二年歿、年六十一。

前課に於て偉大なる日本文化の開拓者、日本精神の尊奉者としての聖徳太子を仰ぎ奉つたのであるが、こゝには江戸時代に於て國學を通じて、日本古代文化を闡明し、日本固有の大精神を明徴ならしめた大先覺本居宣長翁を偲ばしめようとするのである。國體を知り、我が國文化の認識を深めしめるに寄與すべき教材である。

### 4 要旨

本居宣長翁の國文學、國體等の研究上に於ける没すべからざる大功績を顧み、その墓所、舊宅、その祭られたる神社等を訪れた譯である。しかも筆者は明治國文學界の耆宿、明治時代に於ける國民精神の高唱者芳賀博士であ



つて、一層意義深いものがある。

### 5 概説

第一節（九頁—一〇頁一〇行）

本居宣長の職業と學問との立場を説明した。

第二節（一〇頁一一行—一一頁）

本居翁の學問の根本精神を明かにした。

第三節（一一頁末行—一四頁八行）

本居翁の墓所參詣の記で、その奥津城のさまと、參詣した所感とを記した。

第四節（一四頁九行—一五頁三行）

本居翁の墓所の地形。

第五節（一五頁五行—一七頁五行）

本居翁の舊宅のさまと、訪問した所感。

第六節（一七頁七行—終）

本居翁を祀つた山室山神社に參拜した記。

### 6 取扱上の注意

【芳賀博士の文には他の及ばない一つの趣がある。所謂ルーズ・センテンスで、てきばきとした行文ではないが、

文全體が非常に懐かしい暖かみを包蔵してゐる文である。かうした文の趣が誰にでも書けるものではなく、況んや少年時代の生徒にこれを望むことは無理であらうけれども、かうした文の趣を味はせて、文が單に意味の傳達といふことの外に人に迫り、人に訴へるところの要素を具備してゐるものであることを思はしむべきである。

【先づ本居翁の生活態度と、その學問に於ける大主義とを説述してある。このところは生徒をしてよく讀みとらせて以て自己の修養に資せしめたいものである。

【「著書の卓絶な學術上の價値と偉大な感化力とは未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業ほど絶大なものはない。」といつてあるところをよく味はしめたい。芳賀博士は、この學者の事業の偉大さといふものを常に念じ、かつ唱へてゐた人であつた。上田松井兩博士の大著たる「大日本國語辭典」の卷頭にもこのことを強調した有名な序文を寄せられてある。そして博士自身、實に身を以てこれを實行された方である點にも思ひ到らしめたい。

### 7 設問

1 「醫よりももう一層廣い仁術を行ふ」とはどういふことか。

2 「漢學に倣する輩を筆伐する」とはどんなことか。

3 「歿後の門人」とは何を意味するか。

4 「この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つた」といふことを説明せよ。

5 「さすがに本居翁の郷土ゆゑ、櫻は一年中咲くのだらう。」といつた意味は。

### 8 釋義

#### 山室山

【山室山】 ヤママロヤマ。三重縣飯南郡花岡町大字山にある山。山頂に本居宣長の墓がある。

【國學】 コクガク。我が國書を研究する學問。中世以來漢學に對して起つた名稱。「くにまなび」「みくにまなび」「みくにのがく」「皇學」等といふ。

【大家】 タイカ。こゝでは學藝にすぐれてゐる人といふ意

#### 味、例へば

莊子の、秋水に「吾永見笑<sup>レ</sup>天下<sup>ノ</sup>之子<sup>ニ</sup>。」

その他に、卿大夫のことや、資産の多い家、富貴の家といふ意味もある。

【徳川時代】 トクガハジダイ。江戸時代ともいふ。徳川家康征夷大將軍となりし慶長八年（二二六三）より十五代慶喜大政奉還の慶應三年（二五二七）迄徳川幕府の續いた時代をいふ。

【大成】 タイセイ。全體のなりとりのふこと。大規模に出來上ることといふ。

【本居宣長】 モトヲリ ノリナガ。幼名は富之助。通稱は健藏・春庵・中衛等といつた。號は鈴の屋。

享保十五年五月、伊勢國松阪に生まれた。寶曆元年入洛して儒學を堀景山に學び、四年、また武川幸順に就いて小兒科の醫術を學んだが、七年歸國して醫を業とした。寶曆十一年始めて賀茂真淵の門に入つて、國學に志した。徒を集めて教授するに及び、門下生五百餘人に及んだ。寛政六年紀伊侯徳川治寶の召に應じて紀州に赴き、



古書を進講した。初め奥醫師の列に加へられて十人扶持を受けたが、のち、祿三百石を食んだ。晩年京師に上つて講筵を開くや、縉紳争うてその席に列した。

古事記の研究に畢生の心力を傾注し、その名著古事記傳は三十五歳にして稿を起し、六十九歳にして漸く脱稿した。その他直毘靈・神



本居宣長 望月春江筆

代正語・鉗狂人・馭戎 慨言・歷朝詔詞解・玉の小櫛・言葉の玉緒・玉勝間・玉匣・臣道・國號考・王銚百首等五十餘種の著がある。享和元年九月歿、年七十

【口過ぎのため】 クチスギのため。生計を立てるため。

俚談集覽に「口すぎ、世渡りをいふ。食ひて過るをいふ。」

【家計】 カケイ。一家のくらし。

【維持】 キジ。たもつこと

【仁術】 ジンジュツ。仁（人に情をかける）をなす方法。

孟子の梁惠王上に「無傷也、是乃仁術也」

特に病人を治療するに仁惠の術、即ち醫術にいふ。こゝもその意味に用ひられてゐる。

【眇たる】 ビャウたる。小さいといふ意味。

漢書の昭帝紀に「朕以眇身護保宗廟」

【庸醫】 ヨウイ。平凡な醫者。やぶいしや。

陸游の詩に「庸醫司性命、俗子議文章」

【皇學】 クウウガク。前に述べた國學に同じ。

【千古】 センコ。とこしへ。永遠の世。無限の時。萬古。

蘇頌の夷齊四皓優劣論に「激情一時、流譽千古」

【著述】 チョジュツ。文書をのべあらはすこと。

論語の述而に「述而不作」

【徹頭徹尾】 テットウテツビ。初から終りまで。どこまでも。あくまでも。始終。

程子の中庸解に「誠者、物之終始、猶俗言徹頭徹尾」

【漢意】 カラゴコロ。漢籍ばかり學んでその心は、漢國に傾き、その國を尊び、その風を慕ひて何事につけても支

那風に是非善惡を論ずること。大和心に對す。

【僻する】 ヘキする。偏して正しくないこと。かたよること。

管子に「有レ度不レ直、則治僻、治僻、則國亂」

【積弊】 セキヘイ。つもり重なつた弊害。

李谿の六代論に「及ニ承レ微積ニ弊王室遂ニ卑」

【日本固有】 ニッポンコイウ。日本にもとからある。日本のみが特に有してゐる。特有に同じ。

【大人】 ウシ。師。又は學者の尊稱。大人ともいふ。

その他に、領主、土地を宰する人をいひ、又人の尊稱に使ふ。

【敷島の和心】 「敷島の」は枕詞。崇神・欽明天皇が大和國磯城島に都せられた關係から「大和」にかゝる。

萬葉集に「式島の和心の國に人二人……」

大和の稱呼が日本全國の稱呼となり、日本にかゝる。

「大和心」は、大和魂に同じ。

【本領】 ホンリヤウ。根本。主要の點。特質

【佞する】 ネイする。おもねる。へつらふ。巧みに人意に

迎合する。

史記の佞幸傳に「嫪善騎射、善佞」

【筆伐】 ヒツバツ。筆によつて文章著述を成し相手の悪いことを攻撃すること。

【尊王攘夷論】 ソンノウジヤウイロン。天皇を尊奉して國體の尊いことを説くのが尊王論で、外國を排斥するのが攘夷論。本居宣長の他に、山崎闇齋などもこの説をとなへた。

【明治維新】 メイヂキシン。明治初年に徳川幕府が改まつて天皇御親政になつたこと。維新といふのは、百般の事物が變改して新しくなること。

【大業】 タイゲフ。大きい仕事。

【甘んずる】 アマンずる。満足すること。

【車を捨てて】 車を下りてといふ意味。

【爪先上りの坂道】 ツマサキアガリのサカミチ。ゆるやかな上りの坂道といふ意味。

【溪流】 ケイリュウ。「溪」は「谷川」といふ意で、谷川の流れといふ意味。



【小暗い】 ヲグライ。うすぐらい。

【浄土宗】 ジャウドシユウ。日本佛教十三宗の一。法然房源空を開祖とする。阿彌陀佛の建立した西方極樂浄土に往生するを以て目的とする宗旨。

【九十九折】 ツヅラヲリ。まがりまがつてゐることによ。

【喘ぐ】 アへぐ。せはしく呼吸すること。息づかのの荒くなること。

【石磴】 セキトウ。石の坂路。又は、石の階段。

梁の昭明太子の詩に「索羅下石磴攀桂陟松梁」

【土盛】 ツチモリ。土を高く盛つてある所。

【奥墓】 オクツキ。奥は地下。墓は屍ををさめる所。墓所のこと。「おくつきどころ」等ともいふ。

【平田篤胤】 ヒラタアツタネ。江戸時代の國學者。大和田祚胤の第四子で、安永五年秋田に生れた。二十歳にして江戸に出て具さに辛苦を嘗めた。板倉侯の家士平田篤穩の知遇を受け、遂に養子となつた。享和元年宣長の著書を読み古學を修めんとし、名簿を松阪に送つてその門人

となつたが、まもなく宣長が歿したので、親しく教を受

けることは出来なかつた。初め板倉侯に仕へたが、後、秋田藩士となつて祿百石を給せられた。晩年旗本近臣となつたが、天保十三年(二五〇二)歿した。年六十八。

【なきからはいづくの土になりぬとも魂はおきなのもとに行かなむ】 自分の屍はどここの土になつても自分の心はきつと翁の側へ行きたいものだ、といふ意。

【なむ】は助動詞で願望を表す。「行か」(未然形)につく場合は願望で「行き」(連用形)の時には未來を表はす。

【鏝る】 エる。刻む。ほりつける。

【歿後】 ボツゴ。なくなつた後。

【侍つて】 ハべつて。側についてゐる。

【持地面】 モチヂメン。所有地といふ意味。

【懇請】 コンセイ。ねんごろにねがふこと。切にねがふこと。

宋史の交趾傳に「臣檢本酋、將吏耆壽乃屬于臣、懇請懇堅」

【占定】 センテイ。占ひ定めること。

【住僧】 ジュウサウ。一つの寺院を預つてゐる僧をさして

シヤ。住持。

【珍藏】 チンザウ。大切に保存して置くこと。

【山室の山に千年の宿しめて風に知られぬ花をこそ見ぬ】

「千年の宿」は、自分が永久に住む所。即ち墓所をさす。

「風に知られぬ花」風のためにあはたゞくし吹き散らされない櫻の花。一首の意は、この山室山に永遠にかはらぬ住家を構へてゐて、これからは春毎に、風のために散らされないでどかに咲いてゐる櫻の花を自分だけ眺めようといふのである。この歌は宣長の歿する一年前、妙樂寺に墓所を定め、標名を立てた時に詠じたものである。鈴屋集に「山室山の上に墓どころをさだめてかねてしるしをたておく」と詞書があつて山むろにちとせの春の宿しめて風に知られぬ花をこそ見ぬ

今よりははかなき身とはなげかじよ千代のすみかをもとめえつれば

の二首が見えてゐる

【後進】 コウシン。あとから進み行く者。後輩。

論語の先進に「後進於禮樂君子也」

【一書生】 イチシヨセイ。一人の研究者。こゝで後進の一

書生といつたのは芳賀博士自身をさす。

【感慨】 カンガイ。感激に同じ。心に深く感ずること。

【無量】 ムリヤウ。はかり知れないこと。

【百年の世は隔つれど教へ子に數まへませとをがみ額づく】 長年の年月は隔ててゐるけれども、先生の教へ子の數の中に入れて下さいと自分は今をがみ額づいてゐます。

【歿後の門人】 その人の死んだ後の弟子の意で、その人の著述によつて教へられ、感化を受け、指導を受けてゐる人を言つたものである。

【卓絶】 タクゼツ。他にすぐれてぬきんでたること。

後漢書の孔光傳に「非有卓絶之能、不相踰越」

【感化力】 カンクワリョク。人を感じしめてその方に引きこむといふ力。

【永劫】 エイゴウ。極めて長い年月。「劫」は長時間の義。

佛教の語で、非常に長い時間である。佛説では、人の定命八萬歳の時から、百年毎に一歳を減じて十歳に至り、



復び百年に一歳を増して八萬歳に達する間の年数を一小劫といふ(この間の年数は一六〇七八〇〇〇年)。一小劫の二十倍を一中劫といふ。世界の成立から破壊までを成住・壞・空の四劫に分ち。これを通じて一大劫といふ。

【絶大】 ゼツダイ。極めて大きい。

【眺望】 テウバウ。ながめのぞむこと。遠く見渡すこと。

又ながめ見渡したおもむき。

禮記、月令の仲夏に「可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>居<sub>ニ</sub>高明<sub>ニ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>遠<sub>ニ</sub>眺望<sub>ス</sub>」

【志摩】 シマ。三重縣志摩國。明治二十九年志摩國の答志、英虞の二郡を合併して志摩郡として一國一郡とする。

【ホテルの主人】 松阪の山川ホテルの主人で芳賀博士は前夜こゝに宿泊し山室山に参詣したいといふと、ホテルの主人は私は「久しく参詣せぬから同行したい」と言つて一緒に來たのである。

【奥城】 オクツキ。お墓。奥墓。奥津城等とも書く。

【一憩】 イツケイ。ひとやすみ。

【書幅】 ショフク。文字の書いてある掛物。書軸。

鈴屋

【鈴屋】 スズノヤ。本居宣長の家の名。宣長が三十六の鈴

を懸けて置きこれを時々鳴らして氣を引立てたことから起る。



本居宣長遺愛の鈴

【城跡】 シロアト。松阪城。松阪市西部の丘上にあり。もと四五森城(宍森城)といひ元龜元年北畠氏の將潮田長助の築く所。天正十六年蒲生氏郷松ヶ島城より移り大いに城郭を擴張し、松阪城と稱す。天正十八年氏郷會津に轉じて後は服部一忠・古田重勝相次いで此の地に來たが、元和五年紀州領となりて徳川頼宣に屬し、城代を置き以て明治維新に到る。

【鈴屋遺蹟保存會】 スズノヤキセキホゾンクタイ。遺蹟として鈴屋を永く保存する爲に出來た會。

【倉庫】 サウコ。貨物を入れておく建物。くら。

【自筆】 ジヒツ。自ら筆を取つて書いたもの。代書でない

もの。

【草稿】 サウカウ。文章の下書。草案。

漢書の孔光傳に「削<sub>レ</sub>草稿<sub>ニ</sub>」

【遺愛】 キアイ。故人が生前に愛した遺物。

北史の薛聰傳に「吏人追思、留<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>坐<sub>ニ</sub>榻<sub>ニ</sub>以<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>遺愛<sub>ニ</sub>」

【陳列】 チンレツ。ならべつらねること。

易經繫辭上に「卑高以陳、貴賤位<sub>ニ</sub>矣<sub>」の疏に「卑高既<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>陳列、則<sub>レ</sub>物<sub>ニ</sub>之<sub>レ</sub>貴賤、得<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>位<sub>ニ</sub>矣<sub>」</sub></sub>

【稿本】 カウホン。したがき。草稿に同じ。

【勤勉篤學】 キンベントクガク。「勤勉」はつとめはげむこと。「篤學」は學問にあついこと。學問を熱心に勵むこと。

【襟を正さしむ】 エリをタダさしむ。嚴肅な氣持になつて、自然に襟を正すやうな氣持になること。

【一角】 イツカク。ひとすみ。

【舊態】 キウタイ。古い昔の様子。

【本居清造】 モトリセイザウ。本居宣長の五世の孫。宮内省に勤務してゐた。

【表札】 ヘウサツ。門の所にかけてある名札。

【竈】 カマド。土または石にて築き、土に釜を載せ、下より火をたいて物を煮る所。かま。へつつひ。くど。

【下が引出になつてゐる梯子段】 ハシゴダン。梯子段の下を利用して、各段毎に側面に向つて引出しをつけて箆筒の代用に供した構へのもの。

【書齋】 ショサイ。勉強部屋。「齋」は學問する部屋、又は燕居(安閑として休息すること)する部屋の義である。

【三十六の鈴】 鈴屋集に「鈴の屋とは、三十六の小鈴を赤き緒にぬきたれて柱などにかけおきて物むつかしき折々引きなしてそれが音を聞けばこゝちもすが／＼しくおもほゆ。その鈴の歌は

とこのべにわがかけてあさよひにいにしへしぬぶ鈴が音のさやさや

かくてこの屋の名におふせつかし」とある。

【家居】 イヘキ。家を作りて住むこと。住處。

【ワイマール】 Weimar。ドイツのザクセン・ワイマール大公國の首都で、イルム河の左岸に位し、ライプチヒを南



西に距る二十里、人口約三萬。書籍出版業が盛である。

この地は十八世紀の末より十九世紀の初に互り、ゲーテ



シルレル・ヘルデル等の名士が、カール・アウグスト大公の保護の下に住んだので、獨逸文學の中心地となり、「ドイツのアテネ」と稱へられた。ゲーテが多年住居した邸宅は今一つの展覽會場として保存せられ、當

時の文工の記念物及び美術家の繪畫彫刻等を蒐集してある。またシルレルの故宅は一八四七年市有に歸し、ゲーテの舊宅と共に此の地に遊ぶ者の必ず參觀する舊跡の一である。その他此の地にはゲーテの監督の下に營造した大公の宮殿、劇場、圖書館等がある。

【ゲーテ】 Johann Wolfgang von Goethe. ドイツ第一流の大詩人。フランクフルト、アム、マインに生れた。父はカスバルといひ、法律を業とした。ゲーテは父の希

望によつてライプチヒ及びストラスブルグに法律學を修めたが、傍ら化學・解剖學・文學等を學び、遂に文學者として立つた。ザクセン、ワイマール公の知遇に接し、一七七五年ワイマールに赴き、文學、科學、歴史を研究し、同七九年同公國の顧問に任ぜられた。のち瑞西、イタリーに出遊し、また公に隨つて從軍したこともある。一七九四年初めてシルレルと交を結び、爾來専ら文筆に従つた。「ファウスト」を初め不朽の名作が甚だ多い。今はゲーテ全集中に收められてある。

【シルラー】 Johann Christoph Friedrich von Schiller. ゲーテと並び稱せられる獨逸の大劇詩人。ウエルテンベルヒのマールバハに生れた。初め法律を修め次いで醫學に轉じ、一七八〇年卒業して聯隊附軍醫となつた。常に心を文學に寄せ、盛に文筆を以て立ち、續々雄篇傑作を出した。一七八九年エナ大學歴史教授に任ぜられた。同九四年ゲーテと親交を結び、ワイマール公の知遇を受けて、その地に移り住んだ。一八〇二年貴族に列せられ、同四年伯林に赴き、永住の計を立てんとしたが、翌年病

革まり、歿した。享年四十六。「ウイルヘルム、テル」を初め傑作が甚だ多い。シルレル全集に收めてある。

【質朴】 シツボク。律儀にして飾のないこと。

荀悦の馮唐論に「周勃質樸 忠誠、高祖以爲、安劉氏者、必勃也」

【情態】 ジャウタイ。ありさま。情形。

蕭子良の上書言表に「情態即異」

【對比】 タイヒ。比較すること。くらべること。

【悦ばしい】 ヨロコばしい。嬉しい。

【四望豁然】 シバウクツツゼン。四方のながめがひろくとしてゐる。

陶潜の桃花源記に「初極狹、纒通人、履行數十步、豁然開朗」

【パノラマ】 panorama. 展望臺より眺める如き景觀を繪畫、入形等にて現出する装置。觀者に實景を見る如き感を與へるもの。

【絶景】 ゼツケイ。秀れたるながめ。よい景色。

【崇高】 スウカウ。たふとく高いこと。けだかいこと。

易經、繫辭傳上に「縣象著明、莫大乎日月、崇高莫大乎富貴」

【威嚴】 キゲン。いかめしいこと

禮記、曲禮に「非禮威嚴不行」

【大手門】 オホテモン。城郭の正面にある門。搦手の對。

【瑞籬】 ミツガキ。瑞々しい垣といふ意。神社、皇居等の周圍に設けたる垣をいふ。

【神宮風】 ジングウフウ。伊勢皇太神宮にまねて作つてあるといふ意味。

【様式】 ヨウシキ。作り方。

【一入】 ヒトシホ。ひときは。一層。一段。

古今集春上に「ときはなる松の緑も春くれば今ひとしほの色まさりける。」

【小春日和】 コハルビヨリ。小春の訓讀。陰曆十月の異稱。氣候和暖で春に似たるよりいふ。俳諧季題では冬。

「古家のゆがみを直す小春かな 蕪村」

その頃のよい氣候を小春日和といふ。

【返り咲き】 カヘリギキ。草木の花の咲く時ならずこと。



小春の候などに咲く。二度咲きのこと。

【さくら木にゑりし百千の巻々ぞ風に知られぬ花にはありける】

「ゑりし」ほりつけた。即ち版木に彫つたことをいふ。

「巻々」 書物の巻々。

一首の意は、櫻の版木に彫りつけられた百千といふ宣長翁の著書こそは風にも吹き散らされないで永久に残る花であるよ、といふのである。

8 挿 圖

芳賀矢一

芳賀博士晩年の像である。右の胸の勳章は上が勳二等旭日重光章下が勳二等瑞寶章。襟の前部中央にあるのは勳二等の副章として用ひられた勳三等旭日中綬章である。

左胸に見えてゐるのは 各種記念章徽章。

平田篤胤

平田篤胤の肖像。

鈴屋

松阪公園にある 鈴屋の前景。

三 空行く雁

1 解 題

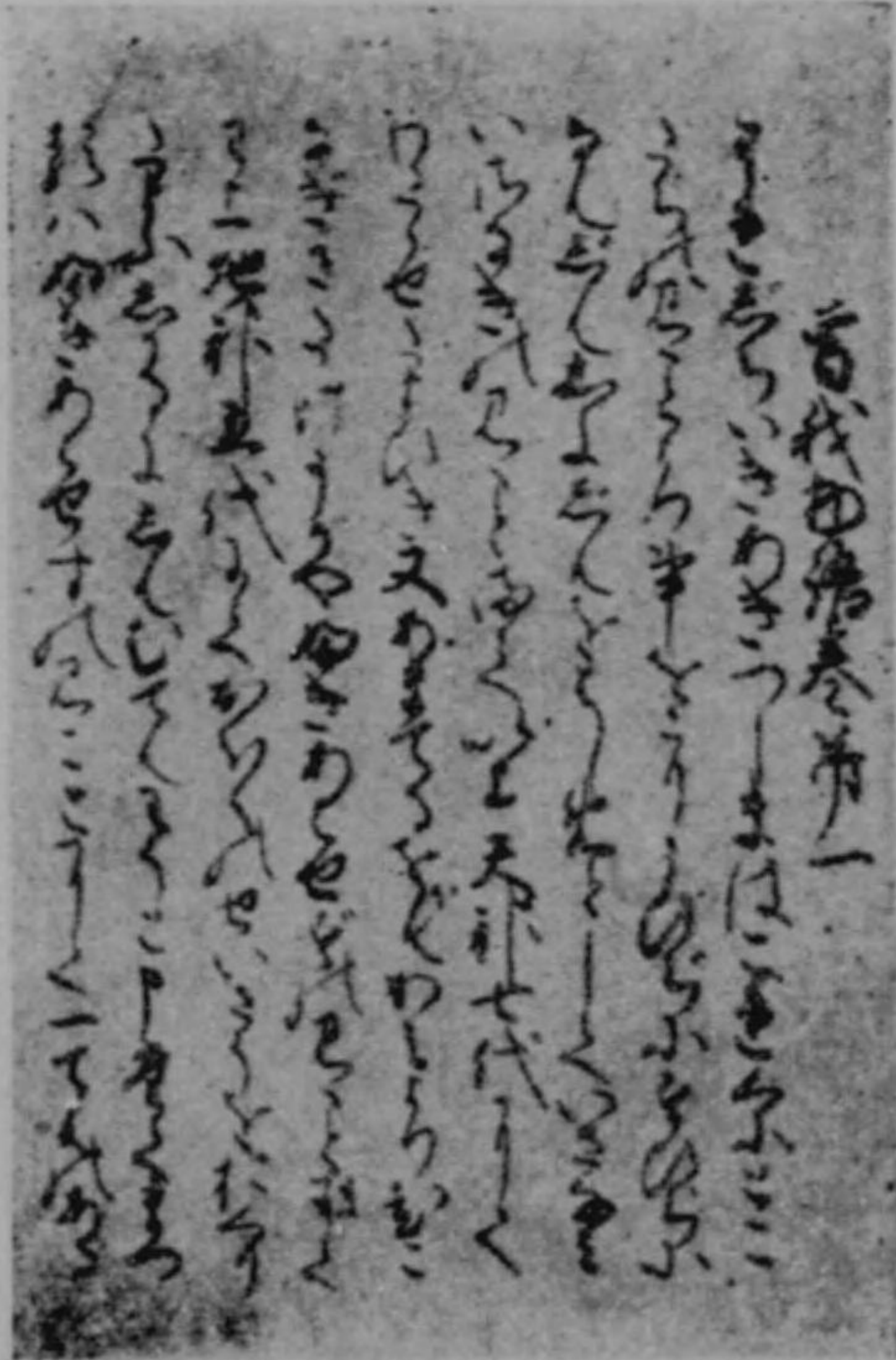
「曾我物語」から採つた。

「空行く雁」のつらさを眺めつゝ、幼い曾我兄弟が亡父を戀ひ歎き、成人の後はその敵を討たうといふ恐ろしい語らひをする次第を敘したものである。曾我物語(十二巻本)には、巻三に「九月十三夜、名ある月に一萬箱王庭に出て父の事を歎きし事」として出てゐるが、異本によつて、原文はいろいろ相違してゐる。

「曾我物語」は十巻、若しくは十二巻。作者未詳。

坂東の將士が相會して、伊豆赤澤山で遊獵する際相撲を催し、その解散後の歸途に、河津三郎祐泰が、工藤一蔵祐經の意を受けた近江小藤太・八幡三郎に射殺されたことから、曾我祐成・時政の兄弟が、建久四年癸丑(一八五三)源頼朝の富士野の狩で父の仇祐經を討ち殺し、いはゆる七番切の武勇をあらはしたことの始末を詳記したものである。附會妄誕の事が多くて、史

料としての價値は少ない。眞字本(富士本門寺古寫本)以下、流布本(元祿版繪入假名本)富士大石寺藏本(本門寺本の改譯)、和州忍辱山本等、異本が頗る多い。



凡そ我が國復讐の事蹟少なからずと雖も、この兄弟が事あつて以來、これのみ専ら言ひはやされ、今に至りて猶止まざるは如何なる故か。(中略)これ他なし、兄弟が幼少の時より相誓つて復讐の一念を盛にし、形影の如く相伴なひ、百折不撓の精神を以



て萬難を排し、遂にその志を達せしといふにあるのみ。(中略) 室町時代に謡曲出来て、曾我が事数書先づ成り、徳川時代の初期に曾我物語成りて、その始終を詳かに語り、水戸の大日本史には、兄弟を孝子傳に入れてこれを激賞し、その他近松の曾我會稽山、馬場の曾我勳功記等續々出でて、講談に、演劇に、孝子の手本として、以下おしなべて人の子たるものの模範とするに至りたり。(池邊義象——曾我物語について——國文叢書)

### 2 編纂の用意

時は最早九月十三夜に近く、いはゆる秋閑なる候である。地方などでは、旅雁の空を渡る景の見られる處もあらう。この時この際、曾我兄弟が過雁をながめやつて、わが身の上を語りあひ、他日父のかたき祐經を討取らうとちぎりあふ可憐の物語を読ませることは、この年頃の生徒に取つて興趣の特に深いものであらねばならぬ。その文傳ふべく、その事蹟また最も傳ふべし。蓋し本課の如きは、國文の讀解力を修得せしめ、且國民的情操を涵養する上から見て、好個の資料と稱すべきである。本課を採録した所以は、實にこの點に存する。

### 3 要旨

父戀しさの涙にくれる幼い兄弟の衷情、又、その衷情に對して、陳じやるすべもなく、慰め賺すかたもなく、咽び泣く母の斷腸の思ひ、さうした親と子とのかなしい、やるせない心持に同情させると共に、兄弟がその純な涙のうちに、互に父の復讐を誓ふといふ、孝子としての至情を十分に味識させたい。その痛ましいほどの悲哀のうち一種の凜然たる心の芽を人知れず我れの内部に育てて行く兄弟は、實に恐しいまでに、父に對する至純至誠の愛の持主である。その點を特に考へさせたい。

### 4 概説

本文は三箇の節から成つてゐるが、特に概説するほどの要を見ない。以下、段落について略註するに止める。

第一節 (一八頁—一九頁九行) 箱王、母に父の事を問ひ、且つ語る。

第二節 (二〇頁一〇行—二二頁七行) 九月の十三夜に於ける兄弟の語らひ、乳母の驚き。

第三節 (二二頁八行—二二頁) その後の兄弟の行動、心組み。

### 5 取扱上の注意

本課は文章としては時代の距離があるが、主人公の年齢といひ、話の筋といひ、生徒の興味を十分に惹くことと思ふ。即ち、この文は初めてであつても、曾我兄弟についての事柄は、すでに大抵の生徒が學んでゐる筈である。それゆゑに、かういふ課では、もとより内容上の主眼を没却してはならぬが、むしろ辭句の上から精確に讀ませることを努むべきである。辭句の吟味に力を注いでも、取扱ひ方にさへ注意すれば、決して生徒はこの爲に興味を損ぜられることはあるまい。そこでかういふ課でこそ、古典(本文はいはゆる古典ではあるまいが)といふものの趣味とか價值とかの一端なりとも味ははせ、知らせるやうにしたい。

文法上、助詞の「ぞ」「こそ」の係に對する結びの例が屢出てゐる。これらは、文法の演習として、利用せらるべきである。

文章としては、第一節と第二節との發端が、よく敘事と敘景と抒情とをかねてゐて、ともに朗々誦すべきもの

ある。これらの點は特に朗讀の法にも注意して扱ひたいものである。

### 6 設問

1 「人皇」とは、何故に言つたのであらうか。

2 この文の全體には、どういふ情味・精神が流れてゐるであらうか。

3 「未だ十歳にも満たざるに、あはれは深く思ひ知りけり」とある、その「あはれ」とは、どういふものか。

4 次の語は、本課に用ひられた意味の外に、常には如何に用ひられるか。  
陳す。翼。人倫。女房。

5 「ぞ」及び「こそ」の係に、如何なる結が來てゐるかを悉くあげて表示して見よ。

6 次の語の意義を問ふ。  
遠侍。いざさせたまへ。拜み奉らばや。鎌倉殿の切りもの。秋も闌く。

### 7 釋義



【人皇】 ニンワウ。「ニンノウ」と發音する。神代と區別して神武天皇以後の天皇を稱し奉る語。

太平記、一、後醍醐天皇御治世の條に「本朝人皇のはじめ神武天皇より九十五代の帝後醍醐天皇の御宇」

【安徳天皇】 アントクテンワウ。第八十一代。御名言仁

(ヒトキ)。高倉天皇の皇子。御生母は建禮門院徳子の方で、

平清盛の女。平氏に擁せられて西國に幸し、壽永四年(一八四五)長門の壇浦に入水して崩御。在位五年。寶算八。

【養和元年】 ヤウワグッソネン。皇紀一八四一年。

【あらたまの】 「年」の枕詞。轉じて、月日・來經・春などの枕詞ともなる。

あらたまの年ふるまでに(萬葉集、卷二)  
あらたまの月日もきへぬ(萬葉集、卷十五)  
あらたまの來經ゆく年の限り知らず(萬葉集、卷五)  
あらたまの春とも知らず(忠見集)

【一萬】 イチマン。曾我十郎祐成の幼字。次課「夜討曾我」参照。

【箱王】 ハコワウ。曾我五郎時致の幼字。祐成の弟。次課「夜討曾我」参照。

一萬が五歳、箱王が三歳の時、父の河津三郎祐泰は工藤一萬祐經に殺された。後その母は二子を携へて曾我祐信に再嫁した。よつて兄弟共に曾我氏を冒すに至つた。兄弟は深く祐經を恨み、密かに復讐を圖つた。時に祐經は頼朝の寵遇を受けて大勢力があつたのみならず、頼朝も嘗て事を以て一萬等の祖父伊東祐親を恨んでゐたから、一萬等を捕へてこれを殺さうとした。畠山重忠・和田義盛等がこれを憐み、救済これ力めたので、纒かに死を免れた。既にして一萬は元服して祐成と稱し、箱王は箱根の山僧行實の弟子にされた。然るに箱王は僧となるのを厭ひ、北條時政によつて衷情を訴へ、元服して時致と稱した。これより二人は相共に大磯・黄瀬川・三浦の邊を歴遊し、屢祐經を謁つたが、祐經は外出毎に徒卒を従へて警戒したので、手を下す機會を得なかつた。建久四年(一八五三)頼朝が富士の裾野に獵したとき、祐經は隨行した。祐經は大いに喜び、五月二十八日の夜、時致と相携へて祐經の營に祈り入つた。時に祐經は大醉して熟睡してゐた。二人は席を踏んで大聲をあげ、「祐成・時致の兩名、父の讐を報ずるため推参した。」と呼ばはつた。祐經は驚き覺め、將に刀を執つて起たうとした。このとき二人は刀を揮つて交、これを斬り下し、遂にこれを寸断にした。會、雷雨があつて四顧闇黒、加ふるに事の不意に起つた爲、營中は上を下へとさわぎ立つた。平子野右馬允・愛甲三郎等はあわてふためいて出で闘つた。兄弟は敵數人を殺傷したが、衆寡敵せず、やがて祐成は仁田忠常

に殺された。時致は更に進んで頼朝の營を犯したが、遂に小倉人五郎丸に捕へられ、尋いで斬られた。時に祐成は二十二歳、時致は二十歳であつた。祐經が祐泰を害した原因については諸説あるが、要するに、當時の習たる勢力争であつたらしい。又曾我兄弟の背後に北條時政があつてこれを利用し、自家の勢力を張らうとした形迹があるとは、近時史家のいふところである。



曾我物語では、家次を工藤大夫助澄に、祐次を助繼に、祐家を祐親に、祐泰を助通にしてある。

【いかに母御前】 なんと、おつかさま。

「いかに」は、なにと。なんと。疑うて問ふときにいふ語。「母御前」(ハ、ゴゼ)はおつかさま。母上。御前」は主として婦人の稱呼に添へて呼ぶ尊稱。「尼御前」「姫御前」

なども亦その例である。

【父】 河津三郎祐泰。伊東祐親の子。伊豆・相模の間、相撲にかけては及ぶものがなかつた。遂に當時大力の名ある俣野五郎景久と角觥して勝を得た。後、赤澤山の獵に、所領の事に關して従祖父工藤祐經と争ひ、遂にその配下のものに殺された。

【その佛は何國にましますぞや】 前の問に對して、母は「父上は佛になられた」とでも答へたとして、「その佛は……」と語をついだのである。「何國にましますぞや」と書いた作者の頭には、極樂といふ西方十萬億土の國を思ひ浮べたに相違ない。

【行きて拜み奉らばや】 行つてお拜み申したうございますといふ意。

「ばや」は、希望の意を示す助詞。

【させたまへ】 「させ」は俗語の「さあ」に同じで、促す語。「させたまへ」の「さす」は、他人の動作をあがめていふ語。こゝでは母の語るのを促して、「さあどうぞお話しして下さいませ。」といふほどの意。



【遙かに忘れたる空】 その昔、父の横死した當時。

「空」はその事の差す方をいふ。こゝでは父の横死の當時をさす。

和泉式部集、三に「思ひ立つ空こそなれ道もなく霧わたるなる天の橋立」

【曾我殿】 曾我太郎祐信。相模國中郡酒匂の北なる曾我といふ地に住んでゐたので、氏とした。

異本曾我物語卷二、伊東入道祐親が、嫁女河津祐泰の寡婦に向つて再嫁をすゝめる語に「相模國の住人曾我太郎祐信と申すは入道が爲にも姉の子なれば、甥なり。狩野前大介殿の御孫なれば、御身の爲にもまた従弟なり。折節女房に後れ候へば、この宿所に入れまゐらせんと存するなり。御嘆きをも慰め、幼きものどもそだて給へ。かの祐信は御身にも一家といひ、よもや幼きものどもに疎略は候まじ」といつた。嫁女はこれを拒み、自害しようとしたが、人々に止められ、すかされて、餘儀なく曾我へ送られた。その後子供も多く出来た。

【己等】 オノレラ。こゝは「汝等」といふ意味の對稱代名詞。

【心強く】 こゝは、情にほだされないので、つれないこと。竹取物語に「心づよく、うけたまはらずなりにしこと」

源氏物語、末摘花の巻に「つれなう心づよきは、たとしへなう情おくるまめやかさなど」

【陳じやる方ぞなかりける】 ことのわけを言ひきかせてやりやうもなかつた。

「陳ず」は、述べること。陳述。

【狩場より歸りたまふ道にて】 「狩場」(カリバ)は狩をする場所。かりには、かりくら。獵場。こゝは伊豆國賀茂郡赤澤山。これより先、頼朝がまだ伊東祐親の家にゐた頃、祐親等は諸豪族と共に頼朝を迎へて赤澤山で狩をした。その歸途、祐泰は工藤祐經の家僕二人に射殺されたのである。

【工藤一蕨とやらに射られて】 工藤一蕨とやらいふものに射られて。

「工藤一蕨」(クドウイチラフ)、名は祐經。幼名は金石。後、一蕨と稱した。伊東祐次の子。祐親の従父兄弟である。少くして入洛し、平重盛に謁して左衛門尉となつた。事を以て祐親を恨み、その子祐泰を伊豆に殺した。後、頼朝に仕へて頗る寵遇された。常に祐泰の二孤祐成・時致がおのれに報復せんことを恐れ、頼朝に勸めてこれを除かうとしたが、果さな

かつた。建久四年(一八五三)頼朝に従つて富士野に獵し、遂に營中で祐成兄弟に殺された。

「二蕨」は一蕨の藏人、一蕨の老僧などの如く、年功によつて長たる人をいふ。曾我物語に、十五歳より武者所に侍ひて、禮儀正しくして、男柄尋常なりければ、田舎侍ともなく、心にくしとて、二十一歳にして武者所の一蕨を経て、工藤一蕨とぞ召されける。」と見えてゐる。次の「和一蕨」参看。

【鎌倉殿】 カマクラドノ。源頼朝。鎌倉幕府第一代の將軍。義朝の第三子。平治の亂の時年十三、父兄に従つて頗る軍功をあらはした。軍遂に敗れて平宗清に捕へられたが、池禪尼の救解によつて死を免れ、伊豆の蛭ヶ島に流された。蛭居二十餘年、治承四年(一八四〇)以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、伊豆を略したが、不幸にも石橋山に破れて安房に逃れた。やがて再び勢を得て間もなく關東を略し、居を鎌倉に構へた。後、弟範頼・義經を遣はして木曾義仲を誅し、尋いで平氏を一の谷、屋島に攻め、遂にこれを壇の浦に滅した。幾ばくもなく弟義經と隙を生じた。乃ちこれを機として諸國に守護・地頭を置き、文治五年(一八四九)奥州に藤原泰衡を討滅して天下を一統した。建久元年(一八五〇)入京して權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねたが、間もなく職を辭して鎌

倉に歸つた。翌年前右大將家として諸役所を置き、幕府の職制を整へた。同三年征夷大將軍に任ぜられ、兵馬の權を掌握した。正治元年(一八五九)正月薨。年五十三。世に鎌倉殿又は鎌倉右大將といふ。その墓は鎌倉町法華堂址の背後にあつて、史蹟に指定されてゐる。

【切りもの】 又、「切りびと」ともいふ。恩寵を得た權臣の義。

平家物語、一に「院中のきりものに西光法師といふ者あり。」  
【鎌倉】 神奈川県鎌倉郡鎌倉町。三浦半島の基部、相模灣の支灣たる由比ヶ濱に面してゐる。鐵道横須賀線の一驛。文治元年(一八四五)源頼朝が始めて幕府を開いた所。爾來百五十年、鎌倉文化の中心をなした。室町時代には、その初期に關東管領がこゝにゐて東國を治めたが、兩上杉氏の擾亂後、頗る荒廢し、徳川時代を通じて頗る振はなかつた。明治に至つて、東京人士の遊覽・避暑・避寒地、又好海水浴場として繁榮を來した。鶴岡八幡宮・鎌倉宮・源頼朝墓・長谷寺・長谷大佛・建長寺・圓覺寺等、名所古蹟が町の内外に散在して、轉、往年の規模を



偲ばしめる。

【伊豆】 イヅ。東海道の一國。修して豆州といふ。本州中部の南東隅にある半島國で、北方は駿河・相模に接してゐる。火山が多くて、温泉に富む。中でも熱海・伊東・修善寺等は世に聞えてゐる。半島部は静岡縣に、伊豆七島は東京府に屬する。

伊豆は祐經の故郷である。それゆゑ、祐經は鎌倉から屢・伊豆へ往復したのである。

【この里】 曾我。今の神奈川縣(相模國)足柄上郡曾我村。

【大人しく語れば】 おとならしい態度で物語れば。

【大人し(オトナシ)は、おとならしいさま。おとなびてゐるさま。

源氏物語、潘標の卷に「十一になりたまへど、程より大きに、おとなしう清らにて」

【女房】 ニ・ウバウ。古くは(一)禁中の官女の、房即ち部屋を賜はつて局住ひするもの、(御匣殿・尙侍以下、命婦・女藏人など)の總稱。(二)又、貴族の家で使ふ女どもの稱。こゝは(二)の意。今は一般人の妻の稱に用ひる。

【袖をぞ絞りける】 涙にぬれそぼつた袖をしぼつたとの意。涙をながして泣き悲しんだことを形容していふ。

【秋も闌け】 秋もたけなはになつて。秋も末になつて。

【闌く(タク)とは、さかりを過ぎること。たけなはになること。末になること。

夫木抄、卷四に「春たけてきの川白く流るめり吉野の奥に花や散るらむ」

【九月十三夜】 陰曆九月十三日の夜。八月十五夜に次ぐ觀月の佳節。古來酒宴などを催してこれを賞する。

俳諧歳事記、九月に「十三夜、後の月、二夜の月、豆名月、粟名月、七十五代崇徳院保延元年九月十三日、今宵雲清く月明らかなり。これ昔寛平法皇(字多法皇)明月無雙のよし仰せ出さる。依りて我が朝九月十三夜を以て明月の夜とす。」

【隈もなかりけるに】 月が照らさぬ隈もないほど明るくかがやいてゐるをりに。

【隈(クマ)は、こゝでは、曇り、くらがり、かけ、などの意。

源氏物語、神の卷に「月の少しくまあるたてじとみのもとにたてりけると知らで」

金葉集、秋に「くまもなき鏡と見ゆる月かけに心うつらぬ人はあらしな」

【五つ連れたるかりがね】 五羽つれだつた雁。

【かりがね】は、もと「雁が音」の義。轉じて、雁のことをいふ。

【雁】はカリともガンともいふ。遊禽類中の扁鵲類に屬する鳥。體の長さ二尺ばかり。嘴はほど頭の長さに等しく、末端のみ硬い。背は褐色、翼は帯青色。秋來り、春去る。

萬葉集、卷十五に「いもをおもひの寝らえぬにあかとき朝霧こもりかりがねぞ鳴く」

【空に飛ぶ翼】 こゝの「翼」は、翼あるものの義で、鳥をいふ。

【翼(ツバサ)は「翅」とも書く。鳥の左右の肢。羽毛が生じて飛行の用をなすもの。はね。

萬葉集、卷十に「天飛ぶや雁のつばさのおほひ羽のいづくもりてか霜の降りけむ」

【人倫】 ジンリン。人のたぐひ。人類。禽獸に對していふ。

十訓抄、上に「六畜は主といふことをわきまへねども、あはれを知りてむつる。いはんや心ある人倫をや」

源平盛衰記、三十二、福原管絃講の條に「如何に況や、人倫の身として」

人の履行すべき道義、即ち五倫の道をも人倫といふが、こゝはそれとは意味がちがふ。

【和殿】 ワドノ。人代名詞の對稱。同輩又は目下のものを親しみ指すときに用ひる。「和」は「吾」のあて字。

古今著聞集、十二に「和殿を頼み申して同宿したるは」

【鞍】 クラ。馬具の一種。馬の背において人が乗り、又は荷物を駄するためのもの。その骨幹をなす部分を「くらぼね(鞍瓦・鞍橋)ともいひ、その前後の高まつた所のうち、前なるを前輪、後なるを後輪(シヅワ)といひ、その中間の横木を居木(キギ)といふ。中古公家の飾馬には唐鞍・移鞍・倭鞍・水干鞍等があり、武家用の鞍には、その意匠によつて鏡鞍・金覆鞍・銀覆鞍・沃懸地鞍・貝鞍・金貝鞍・螺蚶鞍・梨子地鞍・黒漆鞍等があった。現時は専ら西洋鞍を用ひる。

【さめくと】 涙を流して泣くさまにいふ語。清々。潸然。



宇治拾遺物語、一に「このちこのさめぐと泣きけるを見  
て」

平家物語、一、妓王に「袖を顔におしあててさめぐとかき  
くどきければ」

【小賢しく】 コザかしく。利口ぶつて。「小」は接頭語。

十訓抄、下に「主の對面の座席にて、従者のこさかしくさし過  
ぎたるは、いと見ぐるしき事」

【乳母】 メノト。ウバ。母に代つて小兒に乳をのませ、か  
しづき育てる女。ちおも。ちも。ちのひと。にゆうば。

和名抄、二に「乳母、女乃度」

枕草子、二に「ちこのめのとのたよあからさまとていぬるを」

【あなあさまし】 驚いて發する語。「これはめつさうな」

といふほどの意。うつかり復讐の事など口走つて、祐經  
の耳にでも入つたら、災が忽ち二人の身に及ぶことを恐  
れたのである。

【いかに】 「どうしてまあ」といふほどの意。

【和上藤】 ワジヤウラフ。「和」は「和殿」の「和」と同じ  
く、「吾」の字の假借。「藤」は臘と同じ。元來僧臘・戒  
臘などの語から出てゐる。佛語の解釋に、出家して受戒

し、一夏(夏期三ヶ月の行)を経るを一の臘とし、二夏  
を経るを二の臘とする。よつて僧の年を數へるに、生年  
をいふときは世壽といひ、出家後の年をいふときは法臘  
といふ。又僧中の座次は必ずこの臘の多少によつて高下  
する定まりであるから、これを臘次といふ。さてこの僧  
中の名が朝廷に移つて、上藤・中藤・極藤などいふ名を用  
ひるに至つたのであらう。

こゝは曾我兄弟を尊敬していふ語で、今の「おぼっちゃ  
んたち」などいふほどの意。

【我が身の程】 わが身の上。  
「身の程」は、身分。分際。身の上。

枕草子、一に「家のほど身のほどにあはせて侍るなり。」

【竹の小弓】 竹又は篠を曲げて作つた小弓、子供の遊びに  
用ひる。

【薄矧の小矢】 ス、キハギのコヤ。薄の莖で作つた矢。子  
供の遊びに用ひる。

「矧々」とは、羽を矢竹につけて矢を作ること。  
萬葉集、卷七に「近江のややはしの小竹を矢はがすてまこと

といと易しとうなづきをり」

【年ばへには】 まだ十歳にも満たぬ子供にしては。  
「年ばへ」は、年のほど。年ごろ。ねんばい。

最明寺殿百人上臈、女勢揃に「母おきえといふは、年ばへも  
磯部のうとう安方の子を後見て……」

ありえむやこひしきものを」

【遠侍】 トホサブラヒ。トホザムラヒ。古へ武士の家で、  
主殿より遠く離れ、中門の際などに設けた建物。當番の  
侍の詰めてゐたところ。

平治物語、義朝討たる條に「とほさぶらひにて、若者ども  
の中にとりこめ、引き張りて刺殺し」

浦島年代記、卷二に「敷臺・寢殿・遠ざむらひ」

【明障子】 アカリシヤウジ。今の障子のこと。ふるくは襖  
及び衝立をも障子といつた。

【ともかくもなりなん】 どうにでもなりませう。死して悔  
なき意をほめかしたのである。

【男の一の能】 ヲトコのイチのノウ。男子に取つて一番大  
事な藝能であるといふ意。

【打領きけり】 首肯した。

「打」は接頭語。

【領く】(ウナヅク)とは、承諾の意を表して、首を前に  
動かすこと。

竹取物語に「さだかに造らせたる物と聞きつれば、返さんこ

8 挿圖

空行く雁

曾我兄弟が、九月十三夜、庭に出て遊んでゐた折柄、五つ連  
れたる雁の空を渡るさまを見て、互にその身の上を語りあひ  
つゝ、今は世になき父を偲んでゐるところ。

丹祿本曾我物語の挿繪から轉載した。丹祿本曾我物語は、曾  
我物語の異本の一つ。本挿圖の原據としたものは上野圖書館  
の所蔵にかゝる。

曾我兄弟弓を習ふ 北尾重政筆

曾我兄弟が、竹の小弓、薄矧の小矢を携へ持つて遠侍に出  
て、或は腰刀を抜いてそこなる明障子に切りつけ、或は矢を  
弓につがへて、明障子をあなたこなたに射通しなどしつゝ、  
熱心に仇討つすべを習つてゐるところ。うしろなる襖をそつ  
とあけて、その有様に見入つてゐるのは、二人の母である。



筆者北尾重政は浮世繪師。本姓は北島。初名は太郎吉。後、久五郎、又佐助と改めた。號は紅翠齋、又花藍。鳥居清倍に學んだともいひ、奥村政信に學んだともいひ、又常從の師なく、書畫共に版本で學んだともいふ。畫風温雅にして沈着、勝川春章と共に當時の最も著名の畫師であつた。明和・安永から寛政・文化の頃にわたつて、今様美人・武者繪等の一枚繪、赤本・黄表紙等の挿畫をえがき、よく時流に投じた。又書をよくし、この版下の文字の如きは當時都下に並ぶものが無かつたといふ。文政三年（二四八〇）歿。年八十三。

### 四 夜討曾我

#### 1 解題

觀世流謡曲から「夜討曾我」を採つて教材とした。

「夜討曾我」は「打入曾我」ともいふ。その梗概を左に。

曾我兄弟は、頼朝が關東八箇國の諸侍を集めて富士の裾野で卷狩をしたのを幸に、諸侍の中に紛れて父の仇工藤祐經を討たうと、團三郎・鬼王の兄弟を従へて富士の裾野に出かけたが、亡きあとの母の歎きを思ひやつて、團三郎兄弟に形見の品を持たせて故郷にかへすこととした。團三郎兄弟は主の最期の御ともをしたいと望んで、曾我へ歸ることを拒んだが、遂に説きふせられてしまった。十郎は細々と文を書きしたため、五郎は肌守を取り出して母への形見に送つた。團三郎兄弟は泣く／＼曾我へ歸つていつた。（中入）

既にして兄弟は仇討の本望を達し、兄十郎は仁田四郎に討たれたらしい。五郎は多勢の軍兵を相手に奮闘して、剛勇智謀の古屋五郎をも斬り殺したが、御所五郎丸が薄衣を被つてゐたのを奥の女と見誤つて通り過ぎさせた爲に、後から捉へられ、終に多勢の者に繩をかけられて將軍の前に引立てられた。

（能柄） 四番目 二段 劇能

人物 前ツレ 曾我十郎、前シテ 曾我五郎

前ツレ 團三郎、同 鬼王

後ツレ 古屋五郎、同御所五郎丸、同（立案）  
軍兵（二人） 後シテ 曾我五郎

所 駿河國富士の裾野

時 御鳥羽天皇の建久四年（一八五三）五月

作者 未詳。藤涼軒日録に後花園天皇の寛正六年（二二二五）九月廿七日、春日祭禮の能に「打入曾我」を演じた由見えてゐる。

觀世流謡曲 クンゼリウエウキ。ク。

天保本の内外百七十二番を寫眞で雕刻したもの。

明治四十一年東京市京橋吉川弘文館發行。

謡曲参考書のおもなものは左の諸書である。

謡曲評釋 八冊 大和田建樹編 博文館

能のしをり 六冊 同 同

謡曲の研究 一冊 瀬尾竹次郎著 金櫻堂

古今謡曲解題 一冊 丸山桂著 觀世流改訂本發行所

謡曲大觀 七冊 佐成謙太郎編 明治書院

謡曲全集 十卷 野上豊一郎編 中央公論堂



なほ「謡曲の一般的概念」については、教授備考卷八、二、「鉢木」の「参考」を参照せられたい。

### 2 編纂の用意

前課「空行く雁」に聯關せしめて、曾我兄弟が多年の宿望を達し、遂に父の仇工藤祐経を富士の裾野の夜襲に討取る前後の状況を知らしめ、併せて謡曲文學の一翫を味ははしめたい。

### 3 要旨

不敵な仇討を實行しようと思ひ定めてゐる兄弟ではあるが、老母の歎を想ひやつて形見の品を送る。その時の孝情のあらはれ、その形見の使をする團三郎兄弟の主思ひの心根、いよ／＼故郷に歸らうとする時の主従兄弟の思ひせまつた情景などを味ははせるのが中入前の主眼である。後段に於ては、「十郎殿、十郎殿」と呼び求めつゝ、對松片手に白刃を提げて出て来る五郎の言動には既に本望を達した歡喜はあるものの、「死なば共に」と思つてゐた兄を先立たせることから来る無念の情が極めて強く出

てゐる。一人残つた五郎の活動も勇ましいが、遂に五郎丸に謀られて捕へられるのは、悲壯の極である。

### 4 概説

第一節（二三頁一行—八行）曾我兄弟は、頼朝が富士の裾野に卷狩を催すのを機として、親の仇を報すべく、その目的地に出で立つ。

第二節（二三頁九行—二五頁九行）兄弟は、亡き後の母の歎を思ひやつて、伴なつて来た團三郎・鬼王に形見の品を持たせて故郷に還さうと考へる。

第三節（二五頁一〇行—二八頁）團三郎兄弟は、主の最期の件をしようと望んで、形見の使をすることを拒むが、遂に説き伏せられて、涙の裡に歸還を承諾する。

第四節（三九頁—三〇頁六行）十郎は特に文を細々と書いて形見とし、五郎は肌守を出して形見として、團三郎兄弟に託する。主従の兄弟は、泣く／＼見送り見送られる。（中入）

第五節（三〇頁七行—三二頁）場面は變つて、兄の十郎は既に仇討の本望を遂げ、しかも新田四郎に討たれた

らしい。五郎は兄を求めつゝもなほ戦ひ、古屋五郎を討ち取るが、遂に女装してゐた五郎丸に搦められて、頼朝の前に引かれて行く。

### 5 取扱上の注意

■佐藤謙太郎氏の「謡曲大観」に、本曲を概評して曰く、本曲は「小袖會我」の後を承けて、曾我傳説の結局を取扱つたものであるが、その主眼である兄弟討入の場面を外して、その前後を題材にしたのは、思ひ切つたそして巧みな構想である。

と。更に續けて曰く、第一段（中入前）の形見送りは、物語にもあはれに描かれてゐるが、本曲の方が、兄弟の性格を描く點に於ても、團三郎兄弟の衷情を描く點に於ても、遙かに物語よりは鮮かである。第二段（中入後）に於て、十郎を舞臺に出場せしめないで陰にまはし、五郎をして「十郎殿、十郎殿」と兄を索めしめるのも、あはれであるが、十番斬の代表として、古屋五郎といふ剛勇無雙の士を假作したのも巧妙な手段である。云々

と。以上のやうな着眼は、教材として本曲を扱ふ上にも好い参考とならうと思ふ。

■實際、「親の仇を討つ」といふ、古來日本の國民精神に根ざした一つの事實を、最もよく代表してゐるのはこの曾我兄弟の話であるが、この話は文藝の材料としていろいろに用ひ盡くされてゐるやうにも思ふ。就中謡曲の如きは、古典藝術として、一つの型にはめられたものであり、隨つて、その味はひどくは、すでに「仇討」といふ内容事實の情景そのものに止つてはゐないが、本曲を國語教材として取扱ふ上には、勿論前課と聯絡を取りつつ、能の實演とは異なつて、やはり内容そのものを味讀させることを主とすべきであらうと思ふ。

### 6 設問

1 この課に盛られてゐる人情には、どういふ種類があると言へようか。



2 又、義理とか、徳目とかの上からは、どういふ種類のものが数へられるか。

3 次の語句の意味を説明せよ。

イ、今日出でていつ歸るべき故郷と思へば。

ロ、さて彼のあらましは候。

ハ、夜討がけに彼の者を討たうするにて候。

ニ、なか／＼の事、尤にて候。

ホ、さらば形見を賜はらん。

ヘ、飛葉落葉のことわり。

ト、御前に入れたてかなはじものを。

4 次の語句の内容は、今日から考へて如何に批評すべきであらうか。

いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。

7 釋義

【シテ】 仕手。又、太夫ともいふ。役者の最高級で、一曲中の主人公である。されば十分にその品位を保ち、位相應の資格にたがはぬやう慎重にうたはねばならぬ。

【ツレ】 連。第三位の役者。これにシテツレとワキツレと

の別がある。シテツレはシテに附屬してシテを輔翼し、

ワキツレはワキに附從してワキを輔佐する。シテツレは

「佑」としるし、ワキツレは「屬」としるすのが例である。

「ワキ」(脇)はシテに次ぐ第二の役者。シテを輔佐するも

の。されば音調もシテと違はぬやうに注意し、特にシテ

を引き立てるやうに、さら／＼と位を持たせずうたは

ねばならぬ。

【四次次第】 ツレ會我十郎、シテ同五郎、及びツレ團三郎

同鬼王の四人が次第を諺つて、夜討の目的を述べる。

「次第」とは、役者が舞臺に出る囃子の一種。

次第の囃子で、ツレ會我十郎は侍烏帽子、襟淺黄、着附段厚板、

掛直垂、白大口、腰帶、扇、小刀の装束で、文を懐中し、弓矢を

持ち、シテ會我五郎は、侍烏帽子、襟花色、着附段厚板、掛直

垂、白大口、腰帶、扇、小刀の装束で、守を懐中し、弓矢を持

ち、ツレ團三郎及び鬼王は、襟萌黄、着附無地鬘斗目、素袍上

下、扇、小刀の装束で舞臺に入り、向ひあつて、「その名も高き

云々」と合唱するのである。

【その名も高き云々】 富士山の名高いやうに名高い富士の

裾野の御狩。

「御狩」(ミカリ)は源頼朝が催した富士の卷狩。後鳥羽天

皇の建久四年(一八五三)五月八日駿河國駿東郡藍澤の原の狩にはじまり、十五日富士郡富士野に移つた。兄弟の夜討はその二十八日である。

【詞】 コトバ。謡曲は詞と節との二つより成る。謡曲本の文字の傍に「」等の音譜のあるところは、節をつけてうたふところ、音譜のないところは即ち詞である。詞には名乗・呼掛・問答・物語の四とほりある。この「詞」は名乗である。

【會我の十郎祐成】 伊東祐親の孫。河津三郎祐泰の子。幼名一萬。その五歳の時、父は事によつて、工藤祐経に討たれた。後、母の再縁した會我祐信に養はれてその姓を冒し、十郎祐成と名乗つた。この時、年二十二。

【わが君】 將軍源頼朝。

【東八箇國】 トウハッカコク。足柄關以東の八州、即ち相模・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野の八箇國をいふ。關東八州。

【卷狩】 マキガリ。獵場を圍み、獸をその中に追ひ込んで狩りとること。又、その狩。

東鑑、十三、建久四年五月二十七日の條に「自明日可レ有ニ卷狩」。

【人なみ】 人並。普通一般の人のなみ。世間なみ。

萬葉集、卷五に「わくらばに 人とはあるを 人なみに あれもなれるを」

【富士の裾野】 富士山の西麓、富士郡の井出・神野の邊。

【サシ】 謡曲曲節の一。これにサシ、サシゴト、サシゴエ、詞のサシの四とほりある。

サシはクリとクセとの間にあるもので、シテ又はワキ或は地よりうたひ出し、地で納めるのが普通である。

サシは、瀧の如くよどみなく、すら／＼と、文字の運びあざやかに、息つきゆる／＼と、句切は少し引く心でうたふべきものである。

【いつ歸るべき故郷】 死を決して故郷を出たことをいふ。

「故郷」は、こゝではフルサトとよむ。

【いとどしく】 いや／＼甚しく。次の「名残を残す」にかゝる副詞。

伊勢物語に「いとどしく過ぎゆく方のこひしきにうらやまし



くもかへる波かな」  
後撰集、秋上に「いとどしく物思ふ宿の萩の葉に秋を告げつ  
る風のわびしさ」

【上歌】 アゲウタ。謡曲々節の一。下歌と同じく和歌を朗  
詠する意。下歌は中音でうたひ、上歌は上音でうたふ。

その文章は、下歌は短く、上歌は長きを普通とする。

【名残を残す我が宿】 わが家に名残の惜しまれることをい  
ふ。

【垣根の雪は卯の花の云々】 今わが家の垣根に雪のやうに  
咲いてゐるこの卯の花が、やがて散る春の花の最後であ  
るやうに、自分たちの命もこれが最後かと思へば、さす  
がに足の運びにもぶりがちであるが、それでも、足柄山  
を越えて進んでゆくうちに、「富士の裾野についた。」と  
の意。

【卯の花】は、うつぎの花、「うつぎ」は虎耳草（ユキノシ  
タ）科うつぎ属の落葉灌木。幹の高さ五六尺、葉は對生  
で楕圓形、鋭頭、鋸齒を有し、粗糲である。その葉柄は  
短い。花は白色で穂状花序に排列し、五六月の頃開く。

我が國各地の山野に自生する。又觀賞用として庭園に栽  
培することもある。

「わが足柄や云々」は、心の急ぐために、わが足ながらも  
道を遠く感ずるといふ意を、足柄山に言ひかけたので  
ある。

【足柄山】は相模・駿河の國境に峙つ連山。南東は箱根山  
に連つてゐる。その分水嶺をなすところは謂はゆる足柄  
峠で、標高七五九米に達する。

【いかに時致】 ねえ、時致よ。

「いかに」は、人を呼びかけるときにいふ語。どうちや。  
なんと。ねえ。

【時致】（トキムネ）は曾我五郎の元服後の名。幼字は箱  
王。その父を喪つたときはわづかに三歳。夜討したとき  
は二十歳。

【然るべき處に云々】 都台のよいところに假屋をつくらせ  
ておくれ。

「幕を打たす」とは、假屋をつくり、これに幕を張らせる  
ことをいふ。

【今に始めぬ御事なれども云々】 今に始まつた事ではない  
が、將軍家の御威光はたいしたものだなあ。

【打並べたる幕の内云々】 すらりとならんだ、關東の侍ど  
ものこの澤山な立派な假屋、いやはや、驚かされるばか  
りだはい。

曾我物語に「總じて上下の屋形の数、十萬八千軒、軒をなら  
べて小埒をやり、薨を並べて打ちたりけり。」とある。

【かほどに多き云々】 これほど多勢の人の中で、自分たち  
兄弟の假屋ほど、寂しいものはあるまい。

【さん候】 さんザフラフ。「さに候」の音便。さやうでござ  
います。いかにもさうです。

【今に始めぬ云々】 將軍家の御威光は、いつもながらたい  
したものでありますなあ。

【さて彼のあらまは候】 ところで、例の計畫はいかゞな  
さいます。

「あらまし」は、豫定。計畫。こゝは工藤祐經討取の計畫  
をさしていふ。

堀河百首、雜に「はかなきをおもひしらすはなれどもあらま

しにのみ目を暮らすかな」

【あゝ御情なや云々】 「あゝなさない、私は一寸の間だ  
つて忘れたことはありません。あの祐經を討ちとること  
ですよ」

【片時】（カタトキ）は、わづかの時間。しばしの間。へん  
じ。須臾。

竹取物語に「物思ひには、片時になむ老いになりけりと見  
ゆ。」

宇津保物語、藏開、下に「かくあやしきところに、一日かた  
とき立ちとまりたまひなまじや。」

【祐經】 スケツネ。前課「空行く雁」の釋義「工藤一蕨」  
参照。

【げに／＼某も云々】 ほんに、その事ならば、自分も忘れ  
たことはない。

「げに／＼」は「げに」をかさねてその意味をつよめた語。  
ほんに。まことに。なるほど。

榮華物語、初花に「あみの眉をひらけさせたまへれば、見奉  
る人々、げに／＼あはれと見奉る。」



【さていつをいつまで云々】 ついては、かうして何時といふあてもなしに、ぐづぐづと生きのびてはゐられない。ともかくも、おまへ、よいやうに定めてくれい。

【いつをいつまで】は、「いつといふあてもなく、のびく〜に」といふほどの意。

【ながらへ】は、生きのびること。  
古今集、賀に「かくしつゝともかくにもながらへて君が八千代にあふよしもがな」

【御説の如く云々】 おほせのとほり、なんで、いつといふあてもなしに、ぐづぐづしてゐられませうぞ。今夜夜討にして彼祐經めを討ち取つてしまひませう。

【御説】(コチャウ)は、おほせ。長上のことばを敬つていふ。

源平盛衰記、四十八、法皇大原入御の條に「一院の御説にて大勢にて寄すると申ししかば」

【夜討がけ】は、夜討にかけること。夜襲すること。

【彼の者】は、祐經。

【討たうするにて候】は「討たんとするにて候」の約略。

【それが然るべく候】 それがよからう。(五郎の計畫を肯定した十郎のことば。)

【や、思ひ出したることの候】 おゝ、思ひ出したことがあります。

【や】は感動詞。こゝは、「おゝ」「やあ」などの意。

【鬼王・團三郎】 オニワウ・ダンザブラウ。共に曾我兄弟の従者。團三郎は曾我物語大石寺本、眞字本には丹三郎に作り、流布本には道三郎に作る。

【形見の物】 記念の品。

【形見】(カタミ)は、(一)亡き人又は別れた人などを思ひ出す種となるべきもの。記念。(二)形見としてのこした品物。遺物。こゝは(一)の意。

萬葉集、卷十五に「わきもこが形見に見むをいなみづま白波高みよそにかも見む」

【とかく申し候べし】 とやかくと文句を申しませう。なんのかのと異存を申しませう。

【唯二人とも云々】 いつそのこと、二人ともおかへしになるがよからうと思ひます。

【汝兄弟に申すべきことを云々】 今、おまへたち兄弟にいふことがあるが、それを承知するか、それとも承知しないか、はつきりと申せ。

【承引】(シ・ウイン)は、うけひくこと。承知すること。

魏書の刑罰志に「或拷不承引。」

保元物語、内府異見の條に「御承引もなければ、重ねて申すに及ばず。」

【これは今めかしき御説にて候云々】 これは又今更改まつた仰せでござります。が、どのやうな事でありませうとも、仰せに背きはいたしません。

【これは思ひもよらぬ御説にて候ものかな云々】 これは意外のことを仰せられます。いかに仰せつけと申しても、事によりけりであります。この永い年月御奉公いたしましたのも、この御大切の場合に、眞先に立つて討死いたしましたためでございます。何と仰せられましても、その事だけはお受けが出来ません。歸ることは出来ません。(鬼王に)、なあ、鬼王、さうではないか。

【なか〜の事、尤もにて候】 兄さん(團三郎)のおつしや

ることはいかにもそのとほりです。尤です。歸ることは出来ません。

【なか〜】は、謠曲・狂言などの詞。いかにも、さなり、いふまでもない、勿論、などいふほどの意。

狂言、醉童(スハジカミ)に「何といふぞ、その薬つとりに糸圖があるといふか。なか〜ある。」

【何と、歸るまじいと申すか】 何だと、歸らないといふのか。

【まじい】は、「まじき」の音便。

【ふつとと罷り歸るまじく候】 断じて、歸りません。

【ふつとと】は、ふつりと。断じて。断然。

【これは不思議なる事を云々】 これは變なことを申すものだ。かやうな事を申しはしまいかと懸念したればこそ先ほど堅い約束をしたのに。それでは、どうあつても歸らないか。

【さやうに申さうすると思し召して云々】 そのやうな事を申しはしまいかと御懸念になつて、始めから念を押しておつしやつたのに、なぜ歸らないといふのか。どうして



も歸らないのか。

「申さうする」は、「申さんとする」の約略。

【先づ畏つたと云々】 とにかく畏りましたと申し上げな  
さい。

【おゝそれにてこそ候へ】 五郎、「おゝ、それでこそよいの  
だ」(十郎に) 兄さん、歸りますと申しました。

【さて何と仕り候べき云々】 さて、どうしたものであ  
らう。故郷へかへるのは不本意だし、歸らなければ主命  
に背くことになる。せつばつまつて、どうすることも出  
来ない。

「進退こゝに谷る」とは、進まれもせず、退かれもせず、  
途方にくれること。

詩經の大雅、桑柔篇に「人亦有言、進退維谷。」

「本意」(ホニイ)は「ホイ」ともよむ。本来の志。かねて  
の志。素志。本心。

後漢書の竇融傳に「不レ曉、國家及將軍本意。」

太平記、二十一、佐渡判官人道流刑の條に「弓馬の家なれば  
本意とは申しながら」

【是非を辨へず候】 どうしてよいかわかりません。

【但しきつと案じ出したる事の候云々】 おゝ、ふいと考へ  
ついたことがあります。如何なる場合にしても、命を捨  
てるといふことが大切です。恐れ入りますが、團三郎殿  
とこゝで刺しちがへて死にませう。

「きつと」は、「急と」の意。ふいと。ふと。

【いざさらば刺違へう】 さあ、それでは刺し違へて死な  
う。

【あゝ暫く云々】 こら、ちよつと待て、これは何といふこ  
とをするのだ。

【敬ふ者に従ふは君臣の禮と申すなり云々】「主の敬ふもの  
に従ふのは君臣の禮である(君の敬ふ所に従ふのは臣た  
るものの禮であり、兄弟の敬ふ母の爲をおもふのは汝等  
家來たるものゝ禮であるといふ意か。)この事をよく酌み  
わけよ。聞かなければ、死んだ後まで、いつくまでも  
おまへら兄弟を勘當するぞ。」との意。

曾我物語には、「いかに未練なり。君臣の禮もだし難けれども、  
心に従ふを以て孝行とせり。その上終に添ひ果つまじき身なれ  
ば、名残惜しきこと盡くべきにあらず。急ぎ出で候へ。」とあ

る。

「生々世々」(シヤウジャウセマ)は現世も後世も。いきかは  
り死にかはり。永世。永劫。

佛本行經に「生々世々不レ墮惡道。」

南史の王敬則傳に「唯願後身生々世々、不レ復生天子。」

平治物語、頼朝遠流の條に「かひなき命を助けられ參らせ候  
事、生々世々にも報じつくし難くこそ候へ。」

「勘當」(カンダウ)は、(一)罪を勘(カンガ)へて法に當てる  
こと。(二)お叱りを受けること。不興を蒙ること。(三)尊長  
の旨に逆ひて、縁を絶たれ、追放されること。勘氣。勘  
事。かうじ(勘事)。義絶。こゝは(三)の意。

保元物語、白河殿夜討の條に「親に不興せられしが、たま  
たま勘當ゆるされたる身の」

【地謡】 チウタヒ。シテ・ワキ等の役者のうたはぬところ  
を、一人又は多人數でうたつて、役者をたすけるもの。  
それゆゑ、わが謡の位をたてないで、シテ・ワキをたす  
けるやう心がけて諷ふべきである。

地謡は、能の時には地謡座にゐて、一列・二列又は三列

になり、地頭を立てて謡ふ。地頭は列ごとにあつて、各  
うたひての謡を整理し、多數の謡を一口から出るやうに  
謡はせる。

【かきくどきのたまへば】 ことばをつくして、こま／＼と  
いはれるので。

「かきくどく」とは、(一)くりかへし／＼いふこと。(二)切に  
意中をうつつたへること。うるさく説くこと。(三)己の意に  
従はせようとして迫つて説くこと。説き伏せようとして  
切に説くこと。こゝは(一)の意。

平家物語、三、有王島下りの條に「さめ／＼とかきくどきけ  
れば」

【不覺の涙せきあへず】 われ知らず落ち來る涙が、せきと  
めようとしても、どうしてもとまらない。

「不覺の涙」(フカクノナミダ)は、武士のたしなみとして  
涙など決して出さまいとつとめてゐるにかゝはらず、お  
ぼえず知らずわき出る涙をいふ。

【クリ】 謡曲曲節の一。サシ(クセの前のサシ)の前にあ  
つて、サシ及びクセの調子を準備する曲節である。



クリはすべて上音に始り、中音に終るものであるから、調子を高く、廻し等は十分大きく、終を二段にうたひ、その他はゆるみなく運び、句切のところはすべてうたひきらず、少しく引いて、しつかりとうたはねばならぬ。

【唐土】モロコシ。古昔我が國から支那を呼んだ稱。

萬葉集、卷五に「もろこしの遠きさかひにつかはされ」

【樊噲】ハンクァイ。支那漢初の功臣。沛の人。剛勇無雙の士。秦の末劉邦（漢の高祖）に従つて兵を起し、鴻門の會に項羽が劉邦を殺さうとしたのを救解して事なきを得しめた。屢々征戰に従つて功を樹て、舞陽侯に封ぜられた。西紀前八九年歿。武侯と諡された。

【母の衣を着かへしは云々】母からいたゞいた衣を着かへて、形見に贈つたのが、後世までの例となつたとかいふことだ。

樊噲が母の衣を着かへた云々の傳説は出所未詳。

【今當代の弓取の云々】今の世に、武士が武裝するとき、その身に着ける母衣（ホロ）は、この「母の衣」といふ意味からつけられた名なのだ。

「弓取」は、弓矢を執り用ひることをつとめとすること。又、その人、即ち武士。

源平盛衰記、十三、熊野新宮の軍の條に「大方發すまじきは弓取の青道心にてありけり。」

「母衣」は鎧の背に負うて敵の後矢を防ぐ具。五幅ほどの布帛でつくり、囊状をなす。



【然れば我等が賤しき身を云々】だから自分らのや

うな賤しい身を樊噲にくらべるのは餘りに不似合なことではあるが、親子恩愛の情は誰れでもかはりのないものである。

「我等を隔てぬ習なり」とは、「親子の情愛に貴賤の別のないのが世の常である」といふほどの意。

【クセ】曲。謡曲曲節の一。一番の骨子といふべき文章。クセは多くサシの後にある。獨吟ではサシの始からクセの終りまでうたふ。

クセは大概一番の中に一つあるけれども、謡曲田村のやうに、二つあるものもある。クセは淀みなくうたふべきものであると、昔から言ひ傳へてゐる。

【これは祐成が云々】これは私（祐成）が最後の時に書きました文です。文字が消え／＼で、うすくて見にくうございませうとも、形見として御覽下さい。人の形見には手跡ほどよいものはございますまい。どうぞこの文を御心におかけ下さいまして、私のなきあとを御回向下さいませ。世の諺にも「老少不定」と申しまして、年の若いものでも長生きをするとは限りませず、年をとつたものが却つて後にのこるのが、この世のならはしでございませ。この世の中は花の散り葉の落ちるやうに無常なものだとお思ひなさいませ。

「今はの時」は今はかぎりよこの世を去る時。臨終。

宇津保物語、國議、中に「今はのをりにぞまうでて見奉りし。」

「手跡」(シ、セキ)は「手迹」とも書く。手づから書いた文字。ふでのあと。筆蹟。

漢書の孝武紀に「封皇其手迹。」

保元物語、新院御謀叛思召立の條に「御兄の法性寺殿の詩歌に巧みにて、御手跡のうるはしくおはしますをば、譏り申させたまひて」

「水莖の跡」(ミツグキのあと)は、筆のあと。手跡。筆蹟。

「水莖」は、みづ／＼しき莖の義で、筆をたとへていふ。本居宣長は、その著玉勝間に「上古は梓の木に玉をつけたるを使のしるしとして持たせやりたるより、玉梓の使といひ、梓をみづ／＼しき木といふ意にて、消息文をみづぐきといひ、轉じて筆跡又は筆にもいふ。」と説いてゐる。

拾遺集の長歌に「けふ水くきの跡みれば契りしことは君もまた わすれざりけり」

「老少不定」(ラウセウフチャウ)とは、人の死は年齢の順序によらぬといふ意。

白氏文集に「浮世都如夢。老少亦何殊。」

觀心略要集に「世人之愚也、於老少不定之境、成千秋萬歲之執。」

平家物語、一、妓王の條に「老少不定のさかひなれば、年の若きを頼むべからず。」



「飛花落葉の理」(ヒククラクエフのコトワリ)は、人生は花の散り葉の落ちるやうに無常なものであるといふことのわけ。

正徹の寄花述懐和歌之序に「それ飛花落葉の春秋は、盛者必衰のこの世を觀じ」

【肌の守】 ハダのマモリ。いつも膚身につけてゐる神佛の護符。

【形見は人のなき跡の思の種と申せども云々】 形見は却つて死んだ人を思ひ出させる歎きの種であるとは申しませんが、一面には又、せめてものなぐさめとなるものでございますから、この守を肌身におつけ下さつて、時致がいつもおそばにゐるものとお思ひ下さい。

古今集、讀人知らずの歌に「形見こそ今はあだなれこれなくば忘るゝこともあひましもを」

【今まではこの守を云々】 今まではこの持主(五郎)をお守り下さつた守佛の觀音さまよ、私はやがて討死して、この世に縁はなくなりますが、たとひさうなりませうとも、どうか來世に往生の出來るやうにお助け下さい。

「守佛」(マモリボトケ)は、身のまもりとして信仰する佛。念持佛。護身佛。

【觀世音】(クワンゼオン)は菩薩の名。梵語Avalokitesvara(阿縛盧枳低濕伐羅)の舊譯。一に光世音といひ、新譯では觀自在といふ。淨土宗では勢至菩薩と共に彌陀の脇侍として慈悲の權化と崇める。法華經普門品には、この菩薩が三十三身を示現して普く苦惱の衆生を度脱することをお説いてある。その淨土は南海の補陀落山であるといはれ、十方の國土に身を現じ、衆生がその名號を稱へると、その聲に應じて、直に解脱を得しめるといふ。その行化の形相は多種多様で、六觀音(六道に配して)、七觀音・三十三觀音等の種類がある。

【この世の縁なくと】この下に「も」の一字を補つて文を解すべきであらう。

宇津保物語、藤原君に「來世未來の功德なり。」

【既にこの日も入相の鐘】 日の西山に入ることに入相の鐘をかけていふ。

【入相の鐘】(イリアヒのカネ)とは、夕方、寺院などでつ

きならず鐘をいふ。

源氏物語、潘標の卷に「山寺の入相の聲々にそへても、ねなきがちにてぞすぐしたまふ。」

枕草紙、十一に「山近き入りあひのかねの聲ごとに、戀ふる心の數は知るらむ」

【諸行無常と告げわたる】 世上一切のものはすべて無常であると告げ知らせるかのやうに鳴りわたつてゐる。(入相の鐘が)。

【諸行】(シヨギヤウ)一切の現象。宇宙間の萬物。萬有。「無常」は、變遷生滅して、しばらくも常住しないこと。つねなきこと。はかなきこと。

傳燈錄に「諸行無常、衆生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂。」平家物語、一、祇園精舎の條に「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。」

【さらばよ急げ云々】 「では別れよう。急いで行け。古人が、歌に「涙を封じこめてそのまゝ送るこの手紙の、そのぬれたのがかわかない前に、早く先方へ渡してくれ。」とよんだその心持まで、今更思ひ知られることよ。「文の干ぬ間にと詠ぜし人歌も讀み人も共に不明。」

【今更思ひ白雲の云々】は、今更思ひしられるの「しら」を白雲の「しら」にかけ、この白雲の立ちこめてゐる富士の裾野から團三郎・鬼王の兩人が會我にかへつたことに言ひ及んで、文をあやなしたのである。

【すこ〜と】 失望のあまり、しを〜と立ち去るさまにいふ語。

【中人】 ナカイリ。謡曲一番の前段と後段とのあひだ。中入の際は、樂屋へ入る場合もあり、造りものへ入る場合もある。

【一聲】 イッセイ。作者の舞臺に出るとき囃子の一種。この一聲の囃子で、後ヅレ古屋五郎は白鉢巻、着附厚板、側次、白大口、腰帶の裝束、後ヅレ御所五郎丸は白鉢巻、着附厚板、白大口、腰帶の裝束、後ヅレ(立衆)軍兵二人、五郎丸同様の裝束(内一人は繩を懷中)して、四人とも太刀を持つて橋懸に出で、さて一聲の詠をうたひ出す。

【寄せかけて云々】 「白波が高い音をたてて岸に打ちよせるやうに、われ〜は今高く関のこゑをつくつて、騒いでゐるのだ。」といふほどの意。



前記四人は一聲の囃子で、「寄せかけて云々」とうたひながら、舞臺に入り、脇座から地蔵座へかけて立ちならぶ。

早笛で後ジテ曾我五郎、前と同様の装束で、太刀をぬき、松明をふりながら橋懸へ出で、一の松邊で舞臺を見込み、あら夥しき軍兵やな云々」と松明をすてて拍子を踏む。(別刷挿圖参照)

【あら夥しの軍兵やな】 おゝ何といふ多勢の軍兵だらう。

【軍兵(ダンビヤウ)は、いくさびと。兵士。】

【こゝを先途と見えたるぞや】 今こそ勝敗を決すべきせとぎはのやうに見える」との意。軍兵どもが必死になつてゐるさまを形容していふ。

【先途(センド)は、勝敗の決すべき大切な時。せとぎは。】

保元物語、白河殿攻落の條に「こゝを先途と防ぎけり。」

【新田の四郎】 ニッタのシラウ。「新田」は俗に「仁田」と書き、ニタンとよむ。名は忠常。鎌倉初代の武將。伊豆の人。源頼朝が舉兵の始めからこれに仕へて親任せられ、壽永三年(一八四四)には源範頼に従つて平氏を西海に討つた。建久四年(一八五三)頼朝に富士野の卷狩に従ひ、曾我兄弟が頼朝の陣營を襲はうとするのを撃つて見祐成を斬つた。建仁三年(一八六三)比企能員の異圖あ

るに當り、北條時政の命を受けてこれを斬り、更に頼家の子一幡を殺した。尋いで頼家から和田義盛と共に北條氏を伐つべき命を受けたが、途中で事が齟齬して、遂に加藤景廉に殺された。

忠常は曾我兄弟と親族の間柄である。このときの事情について曾我物語に、「一河のしるしに、同じくは忠常が手にかけて、後日に勲賞に行はれたまはば、御邊の奉公と思ひ給へ。」といつて戦ひ、親しきもの手にかゝらんは本意ぞかし。」といつて討たれたとある。

【口惜しや死なば屍を一所にとこそ云々】 あゝ口をしいことだ。死ぬるときには死骸を一つ所にさらして死にたいと思つてゐたのに、かれこれしてゐるうち、散る花のやうに散り／＼になつて、あちらこちらとちがつたところで屍をさらすこととなつたのか、あゝ残念なことだ。」との意。

【物思ふ春の花ざかり】は、「散り／＼」の序。

玉葉集、雜、和泉式部の歌に「あひに逢ひて物思ふ春はかひもなし花も霞もめにしたれば」

同 紫式部の歌に「雲のうへの物思ふ春は墨染にかすむ空さへあはれなるかな」

【味方の勢】 ミカタのセイ。將軍がはの軍勢。

【打物の鏢もとくつろげ】 刀のつばのところをゆるめて、たやすく抜くことの出来るやうにすること。

【打物(ウチモノ)は、打ちきたへた武器。刀・槍・長刀などをいふ。】

保元物語、白河殿夜討の條に「恐らくは弓矢とつても、打物とつても、われこそあらめ。」

【鏢もと(ツバモト)は、刀劍の身の鏢をつけたあたり。

【鏢】は刀劍の具。刀身を貫いて刃と柄との間に挿み、握手のふせぎとするもの。形によつて角鏢(カクツバ)、車鏢・棗鏢(シトギツバ)葵鏢(アフヒツバ)等の名稱がある。

曾我物語 九、祐成討死の條に「十郎が太刀、鏢もとより折れにけり。」

【くつろぐ】とは、ゆるめること。ゆるやかにすること。

【あら物々しや、おのれらよ云々】 「なにを、きさまたち、おれのうでまへは先程見たであらうが。」との意。

【物々し】は、たいそうらしいこと。仰山らしいこと。こ

しやくなこと。おこがましいこと。

謡曲、景清に「もの／＼しやと、夕日影に、打物ひらめかいて切つてかゝれば」

【おのれら】は、こゝでは對稱の代名詞。きさまたち、てまへども、などの意。

【手並(テナミ)は、うでまへ。わざまへ。伎倆。】

保元物語、白河殿攻落の條に「手並のほどを見せたれども」

【御内方】 オンウチカタ。頼朝の近臣。

【古屋五郎】 この人のことは曾我物語には見えてゐない。

【樊噲が怒をなし】 樊噲が鴻門の會のとき項羽の態度を怒つたやうに、激しく怒ること。

史記、鴻羽本紀に、この時の樊噲の怒を形容して、「毛髮上指、目眦悉裂。」と書いてある。

【張良が秘術を盡くしつゝ】 漢の高祖の智慧囊たる張良のやうな秘術のありたけをつくしなから。

張良(チャウリヤウ)は漢の高祖の謀臣。前漢三傑の一。字は子房。家世々韓の相であつたので、韓のために仇を報いようとおもひ、秦の始皇帝を博浪沙(河南)で狙撃



したが果さず、逃れて下邨に隠れ、はからずもこゝで黄石公に會つて太公望の兵法を得たと傳へられてゐる。漢の高祖の兵を起すや、これに従ひ、常に帷幄の内にあつて高祖のために畫策し、高祖をして天下統一の大業を成さしめ、功を以て留侯に封ぜられた。後官を辭して惠帝の六年(四七一)に卒した。諡して文成公といふ。

【秘術(ヒジツ)】は、秘密の術。秘して他に示さぬ手だて。晉書の王豹傳に「霸王之神寶、安危之秘術。」  
謡曲、熊坂に「秘術を振ふならば、如何なる天魔鬼神たりとも、中につかんで微塵になし」

【古屋五郎が抜いたる太刀の鎬を削り云々】時致も、古屋五郎の抜いた太刀と、太刀の鎬が削れるばかりに奮闘したが、暫くしてゐるうちに、時致がどうして切りつけたものか、古屋五郎は眞二つに斬られてしまつた。

【鎬を削る(シノギをケツる)とは、刀の刃と背との間にある高いところ(即ち鎬)を削りあふほどはげしく斬りあふことをいふ。

曾我物語、九、祐成討死の條に「しのぎをけつりあひ、時を

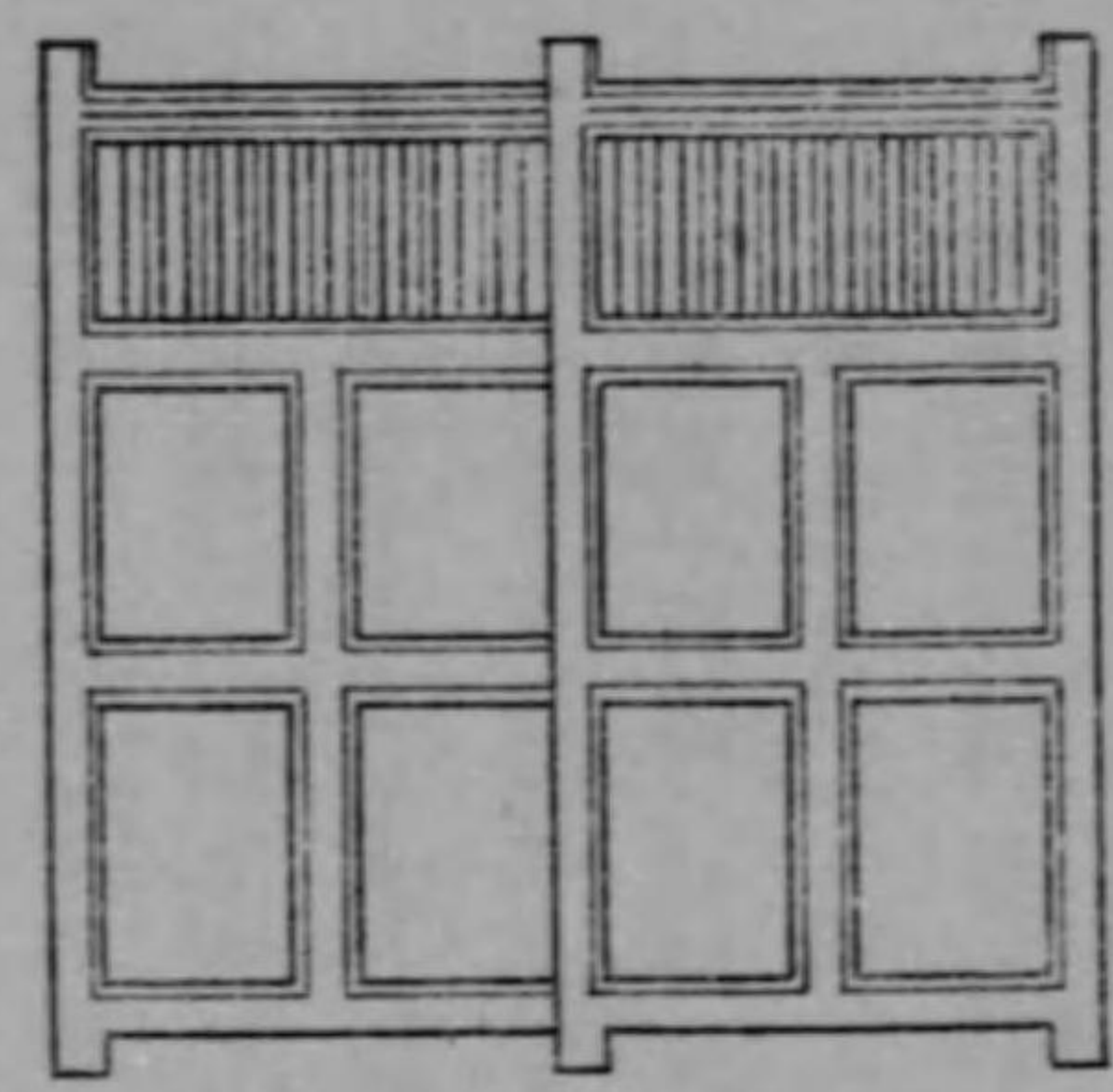
うつして戦ひける。」

【御所の五郎丸】御所(頼朝の館)附の五郎丸といふ意。曾我物語に「五郎丸とて、御寮に召し使はるゝ童あり。これは京のものなりしが、叡山に住して、十六の年師匠の敵を討ち、在京かなはで東國に下り、…この君に参りたりしが、究竟の荒馬乗の剛の者、七十五人が力を持ちけり。」と見えてゐる。

【御前に入れたてかなはじものと云々】將軍の御前(ゴゼン)へ入れてはならないと、肌につけてゐた鎧の袖を解き、草摺をさつくと投げすてて、鎧の胴ばかりになりその上にかの薄衣をかぶつて、唐戸の脇に立つて五郎を待ちぶせしてゐた。

【鎧の袖を解き云々】とは、鎧の袖も腰まはりの草摺も取り捨てて、鎧の胴ばかりを着けてゐることをいふ。

【草摺(クサズリ)は、鎧の胴の下に垂れたもの。一の板、二の板、三の板、四の板、菱縫の板がある。これを揺絲(ユルギイト)で、胴に着けさげる。大鎧には前後左脇に三枚、脇楯に一枚、都合四枚垂れる。草を摺る義から名づけたともいひ、又「鎖綴り」の義だともいふ。



の脱きすべしたるうすぎぬを取りて出で給ひぬ。」

【唐戸(カラド)は縦横の棧に入子板を張つた二枚の開き戸。

五郎丸「御前に入れたて」と正面先に辭儀し、脇座にて白練の薄衣を被いで立つ。  
ここでカケリとなり、五郎は軍兵を斬りまくつて將軍の許へ闖入しうとする。

【運槻弓】ウンツキユミ。運の盡きたことを槻弓にかけていふ。

【槻弓】とは、槻の木でつくつた丸木の弓。  
伊勢物語に「あづさ弓まゆみつきゆみ年を経てわがせしがこ

保元物語、義朝白河殿夜討の條に「御曹司の弓手の草摺を縫ひさまにぞ射切つたる。」

【薄衣(ウスキヌ)は地のうすいころも。うすころも。

源氏物語、空蟬の卷に「か

とうるはしみせよ」

【やり過し押しならべむんと組めば】五郎丸が五郎をやりすこしてから、五郎に押し並んで、ぐつと組みつくと。

【押しならべ】は、五郎丸の身を五郎の身に並べること。

【わたがみ】綿上、綿嚙。鎧の胴の名所。押付の板から續いて前の胸板を釣る左右の兩肩にあたるころ。教科書 鼈頭のカット参照。

【千筋の繩をかけまくも】「千筋の繩を五郎にかける」のかけを「かけまくも」の「かけ」にいひかけたのである。

【千筋の繩】は幾筋もの繩。  
かけまくも「かけむも」の延音。ことばにかけて申すも恐れ多いといふ意味の語。

【かたじけなくも】もつたいたなくも。恐れ多くも。  
萬葉集、卷十八に「かけまくも、あやにかしこし。」

竹取物語に「かたじけなくも、きたなげなるところに、年月を経てものしたまふこと、きはまりたるかしこまりと申す。」

【めでたけれ】將軍の御前を冒した者が擗められたのでかういつたのである。下懸では、「ゆゝしけれ」とうたふ。



8 挿圖

會我兄弟 岩佐古香筆

會我兄弟が復讐の目的を達すべく、富士の裾野へと急いでゐるところ。

筆者岩佐古香は通稱丈助。明治十七年、名古屋に生れた。谷口香崎に師事して日本畫を學んだ。京都美術協會會員で、同協會展覽會に屢々入賞した。現に京都に住む。

夜討會我 月岡耕漁筆 (別刷)

會我五郎が、中入後、前と同様の装束で、松明を振りながら橋懸へ出て、一つ松邊で舞臺を見込んでゐるところ。

筆者月岡耕漁は明治二年東京日本橋に生れた。月岡芳年の養子。日本美術協會・日英博覽會等で入賞した。

「能樂二百五十番」は有名な作品である。

能舞臺平面圖(挿圖参照)

- 1 舞臺 能役者がその技を演ずるところ。
- 2 後座 舞臺の後、囃子のものの着席するところ。
- 3 橋懸 鏡の間から舞臺へ通る路。前面には欄干をつけ、

後面の樂屋との境は裏板で仕切り、橋のやうに作つた故にかく名づける。

これを三段に區調し、鏡の間に近いところを序所、中段を破所、舞臺に近い所を急所といふ。その前に一の松、二の松、三の松を植ゑる。

- 4 正面 舞臺の前面にある見物席。
- 5 脇正 「脇正面」の略。舞臺の左側面にある見物席。
- 6 仕手柱 シテの所作をなす起點となる柱。
- 7 見附柱(目附柱) シテの所作をなす場合に、目的として目を注ぐ柱。
- 8 脇柱(大臣柱) ワキの着席するところにある柱。
- 9 笛柱 笛吹きを着席するところにある柱。
- 10 切戸(定口、隠病口) 地謡・後見などの出入する口。
- 11 鐘板 舞臺の後方に切つた板。この全面に松の古木を描く。この外、別に背景を施さない。
- 12 後見座 後見の着席するところ。その傍の柱を後見柱とも、狂言柱ともいふ。間の狂言師の着席するところ。
- 13 鏡の間 上幕即ち幕の中。姿をうつし見るために鏡をおくよりいふ。

五箱根路

正岡子規

1 解題

原文は「旅の旅」と題して、子規全集第十卷三一五頁以下に出てゐる。明治二十五年十月、作者子規が大磯の客舎で病を療養中、唯一人で思ひ立つて箱根・修善寺・熱海と二三日の行脚旅行をしたときの紀行のうち初めの部分である。本課の文の前にある一節は、「教授上の注意」の第二項のところに記されてあるから、就いて一讀せられたい。本課中の省又は左の通り。

三十四頁、七行目、「次の日まだき起出でつ。」の次に、  
板屋根の上の滴るばかりに沾ひたるは、昨夜の雲のやどりにやあらん。よもすがら雨と聞きしも寛の音、谷川の響なりしものと、はや山深き心地ぞすなる。けふは(一天晴渡りて……と續く)  
三十五頁、十行目、「面白くおぼゆ」の次に、  
見あぐれば千仞の谷間より木を負うて下り來る樵夫二人三人、のそりくともも得いはで汗を滴らすさま、いと哀れなり。  
樵夫二人だまつて霧をあらはるゝ

2 作者

正岡子規 マサヲカ シキ。

樵夫も馬子も皆足を茶屋にやすむれば、それくいたはる婆様のなまけ、一椀の濃茶よりも猶濃し。  
犬蓼の花くふ馬や茶の煙  
店さきの柿の實つく鳥かな  
三十八頁、二行目、「またなくをかし」の次に、  
箱根驛にて午餉したむるに、皿の上に尺にも近かるべき魚一尾あり。主人誇りかに、こは湖水の産にして、こゝの名物なりといふ。名を問へば赤腹と答へける。面白き秋の名なりけり。(これより山を下るに……と續く)



明治の俳境及び歌境の革新に最も功勞のあつた一人。殊に俳人と村に對して、明治の子規とまで稱せられてゐる。伊豫松山の人。名は常規。慶應二年(二五二六)の生れ。別に獨祭書屋主人と號し、歌の方では竹の里人



と號してゐた。初め東京帝國大學文科大學國文科に學んだが、二年で退學した。後、日本新聞社に入つて盛に新しい俳句・俳話を提唱鼓吹した。明治二十七八年の役、従軍記者となつて渡清したが、曾て肺を病んでゐたので、咯血甚だしく、半途で歸國した。爾來、東京下谷根岸に閑居して、聲中に筆を執り、その主宰する雜誌「ホトトギス」と新聞「日本」とに據つて、いよく俳道の爲に精進し、仰臥しながら天下の俳壇を支配するといふ概があつた。明治三十五年(二五六二)九月遂に永眠した。年三十六。俳諧大要・俳句問答・彌齋書屋俳話・子規隨筆・子規小品集・仰臥漫錄・子規書簡集・竹の里人歌、その他幾多の創作句集、編纂の俳書類は、すべて子規全集(アルス發行)十二巻に收められてゐる。

3 編纂の用意

本課の前々課「空行く雁」の舞臺は相模の曾我の莊であり、前課「夜討曾我」の舞臺は富士の裾野であり、本課の子規行脚の地點は箱根路であつて、いづれも地理的に相接近してゐる。而して本課は、「大方はすゝきなりけり山の上」の句に見えてゐる通り、秋闌にして花芒の穂に出づる頃の箱根路の紀行であり、又その自然描寫である。本課をこゝに置いた所以は、地理的・季節的の兩方面より見て、かく排列することが最も恰當であると信じたか

らである。若しそれ本課の文に至つては、筆路輕妙、俳味横溢、さすがに明治の俳壇・歌壇乃至文壇の明星たる作者の筆だとうなづかれる節が甚だ多い。寔に得易からざる佳篇である。よろしく再讀三讀せしめて、行文の妙趣を心解せしむべきである。

4 要旨

行脚の旅のあはれみ・をかしみを知らしめ、俳句の即興的趣味と、俳人の眼に映じた箱根の自然美とを鑑賞せしめるにある。

5 概説

大磯の客舎を出て湯本に來て一泊し(第一段、三四頁六行まで)、それから辿り登る箱根の坂路の風物に秋色に興じつゝ、元箱根を眼下に見る仙境に達する(第二段、三六頁七行まで)。やがて我が前にひらける蘆の湖の景色に對して、心ゆくまで賞美の思をやり(第三段、三八頁二行まで)、最後に箱根關趾附近一帶の花芒のむらがり眺め入つて今昔の感を深うしてゐるのである(第四段、三九頁二行ま

で。

6 取扱上の注意

子規の二十五歳の時の紀行である。晩年病床にあつてものした彼の文に比して、若々しさのあるところがまづうれしい。しかし、何といつても、ところ／＼古雅な語など交へた文語文であり、時代も三十年の昔のことであるので、今日の生徒の感興を惹くには、或は相當の指導を要することであらう。

今日登山熱など相當に盛んであるので、草鞋で山路を踏む快味などは経験してゐる生徒も多からうが、「浮世のかたみ」として、袱紗包を擔ひ、菅笠を戴き、杖一本を命とする、いはゆる風流心に至つては、どんなものであらうか。本課は實にその風流の旅である。こゝを味ははせるやうに導かれない。この風流といふもの、或は「ものあはれ」といふものに對する作者子規の氣焔が、本課の文の前に左のやうに記されてゐる。

汽笛一聲京城を後にして、五十三亭一日に見盡くすとも、水村山郭の絶風光は雲煙過眼よりも脆く、寫眞屋の看板に名所舊蹟を

見るよりも猶はかなく、一瞥の後また跡かたを留めず。誰かはこのを指して旅といふ。かゝる旅は夢と異なるなきなり。出づるに車あり、食ふに肉あり。手を敲けば盃酒忽焉として前に出で、財布を敲けば美人嫣然として後に現る。誰かはこれを指して客舎といふ。かゝる客舎は公共の別荘めきていとうるさし。幾里の登り坂を草鞋のあら緒にくはれて、見知らぬ巡禮の介抱に他生の縁を感じ、馬子に叱られ駕籠舁に嘲られながら、ぶらりぶらりと急がぬ旅路に、白雲を踏み草花を摘む。實にやものあはれはこれよりぞ知るべき。はた十錢のはたごに六部道者と合宿の寢言は、熟眠を驚かし、小石に似たる飯、馬の尿に似たる濃茶にひもじき腹をこやして、一枚の木の葉蒲團に終夜の寒さを忍ぶ。いづれか風流の極意ならざる。かういふ心持であればこそ、俗人ならば憤慨するところを、

だまされてゐる宿とる夜寒かなと吟じてゐられるのである。

「旅の旅にありながら」といひ、「道祖神にさわがされて」といひ、「風流のはじめ」といふ如き、元祿の芭蕉が残した紀行文のこれこれから脱化した物の言ひ方であるのは勿論である。この文が、かくも俳諧を基調とし、元祿の俳聖にあやかりつゝある作者の筆であることに特に注意



を拂はしめて、教授者自身も亦俳諧趣味に浸りつゝこの課の教授を進められたいものである。

【子規といへば、病と戦ひつゝ長逝した子規を想はせられるのがしばしばであるが、この課の子規は若い。殊にその挿畫の姿には留意させる必要がある。彼は芭蕉などの紀行を口讀するのみならず、又、心讀するのみならず、實に體讀してゐるのである。

### 7 設問

- 1 「旅の旅に在りながら」とは、どういふわけであらう。
- 2 「うき世のかたみ」とは、なぜ言つたのであらう。
- 3 挿入された句のうち、最も面白いと感ぜられるのは、どれか。
- 4 全文は、大體どんな氣分で書かれてゐるか。
- 5 書取練習  
假住居。脚絆。落膽。駕籠。挨拶。恍惚。絶景。腦天。
- 6 次の句を解釋せよ。  
色鳥の聲をそろへて渡るげな。  
山姥の力餅賣るすゝきかな。

どつさりと山籠駕おろす野菊かな。

### 8 釋義

【われうき世の旅に首途してよりこゝに二十五年】生徒に別の語で改作させて見たい。「われ生れてこゝに二十五年」といつたらよからう。

「うき世の旅」とは、人生を旅と見ていつた語。

謡曲、邯鄲に「うき世の旅にまよひ來て、夢路をいつと定めん。」

「うき世」は、浮世。浮きて定めなき世。世の中。

風雅集、雜下に「身こそあらめ心を塵の外になしてうき世の色にそまじと思ふ。」

外に「憂世」と書いて、やはり「うきよ」とよむ。これは、憂き事の多き世。つらい世の中。濁世。

伊勢物語に「散ればこそいと櫻はめでたけれ憂世になにか久しかるべき。」

【首途】(カドデ)は、門出の義。わが家をいでたつこと。

出立。發途。

古今集、哀傷に「かりそめのゆきかひちとぞ思ひこし今は限

りのかどでなりけり。」

【南海の故郷】 南海道なるわが故郷。作者正岡子規は愛媛縣(伊豫國)松山の人だから、かやうにいつたのである。

【南海道】は我が國七道の一。四國島をはじめとし、紀伊半島の一部、淡路島を含み、紀伊・淡路・阿波・讃岐・伊豫・土佐の六國から成つて、いづれも海に臨んでゐる。今は三重・和歌山・兵庫・徳島・香川・愛媛・高知の七縣に分屬してゐる。

【さまよひ出づ】 處さだめず、ふら／＼と立ち出でること。

【さまよふ】は、「彷徨」の字をあてる。ゆきまよふこと。うろ／＼すること。ぶらつくこと。徘徊すること。

枕草子、二に「居もさだまらず、こゝかしこに立ちさまよひ遊びたるも、いとをかし。」

【東都の假住居】 東京なる假の住居。子規は當時既に下谷の上根岸なる子規庵に住んでゐた。

【東都】は、東方のみやこ。

班固の西都賦に「有西都賓問于東都主人曰」こゝは勿論東京をさす。

【旅の旅】 旅中の旅。人生の旅。異郷の旅。げに旅の旅といはなければならぬ。

【風雲の思】 風雲を追うて、そゞろに各地を遊歴したいと思ふ心。

通例、風雲といへば、龍が風雲を追うて天に昇るやうに、英雄が機に乗じて出世する義に用ひるが、こゝはその意味ではない。

【頻に道祖神にさわがされて】 ひつきりなしに、道祖神にそゝのかされて。

道祖神(ダウソジン)は、「さへのかみ」(障神)に同じ。道路をつかさどりたまふ神。路上の悪魔を防ぎ、行人を守りたまふ神で、伊弉諾神(イサナギノカミ)の投げさせられた杖によつてなり出でたまふたといふ。

外に、みちのかみ、くなどのかみ、ふなどのかみ、たむけのかみ、だうろくじん、などともいふ。

【霖雨の霽間】 長雨の霽れあがつてゐる間。

【霖雨】(リンウ)は、長く降りつゞく雨。ながあめ。久雨。淫雨。



爾雅に「凡雨、三日以往爲霖雨。」

【草鞋】 ワラヂ。ワラヅ。「ワランヂ」「ワランヅ」の略。その成り立ちは左の通り。

ワラグツ(藁沓)―ワランヅ―ワランヂ―ワラ(ン)ヂ

音便 音轉 略  
ワラ(ン)ヅ

藁製のはきもの。爪先にある長い緒を周圍にある孔に通して足にまとひつけるもの。

太平記、五、大塔宮熊野落の條に「御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。」

【脚絆】 キャハン。又、「脚半」とも書く。脛にまとふ衣はゞき。

源平盛衰記、十九、佐佐木馬を取り下向する條に「きやはんに編笠を着」

【身をつくろひつゝ】 こゝは、旅装をとゝのへながら。身仕度をしながら、などの意。

「つくろふ」は「繕ふ」の字をあてる。(一)補ひつゝること。なほすこと。修復。修繕。(二)とゝのへよそほふこと。整

へ正すこと。(三)とりなすこと。言ひつゝろふこと。(四)病を療治すること。療養。こゝは(二)の意。

枕草子、一に「世にあるとある人、妻かたち心ことにつゝろひ。」

【袱紗包】 フクサヅツミ。袱紗に包んだもの。風呂敷包。

「袱紗」は、絹・縮緬などで作り、紋様を繡ひ、又は染めつけなどして、これに無地の裏をつけたもの。贈物を覆ひ、又はその上に掛けるに用ひる。但しこゝは單に風呂敷といふほどの意に用ひたものと見てよからう。

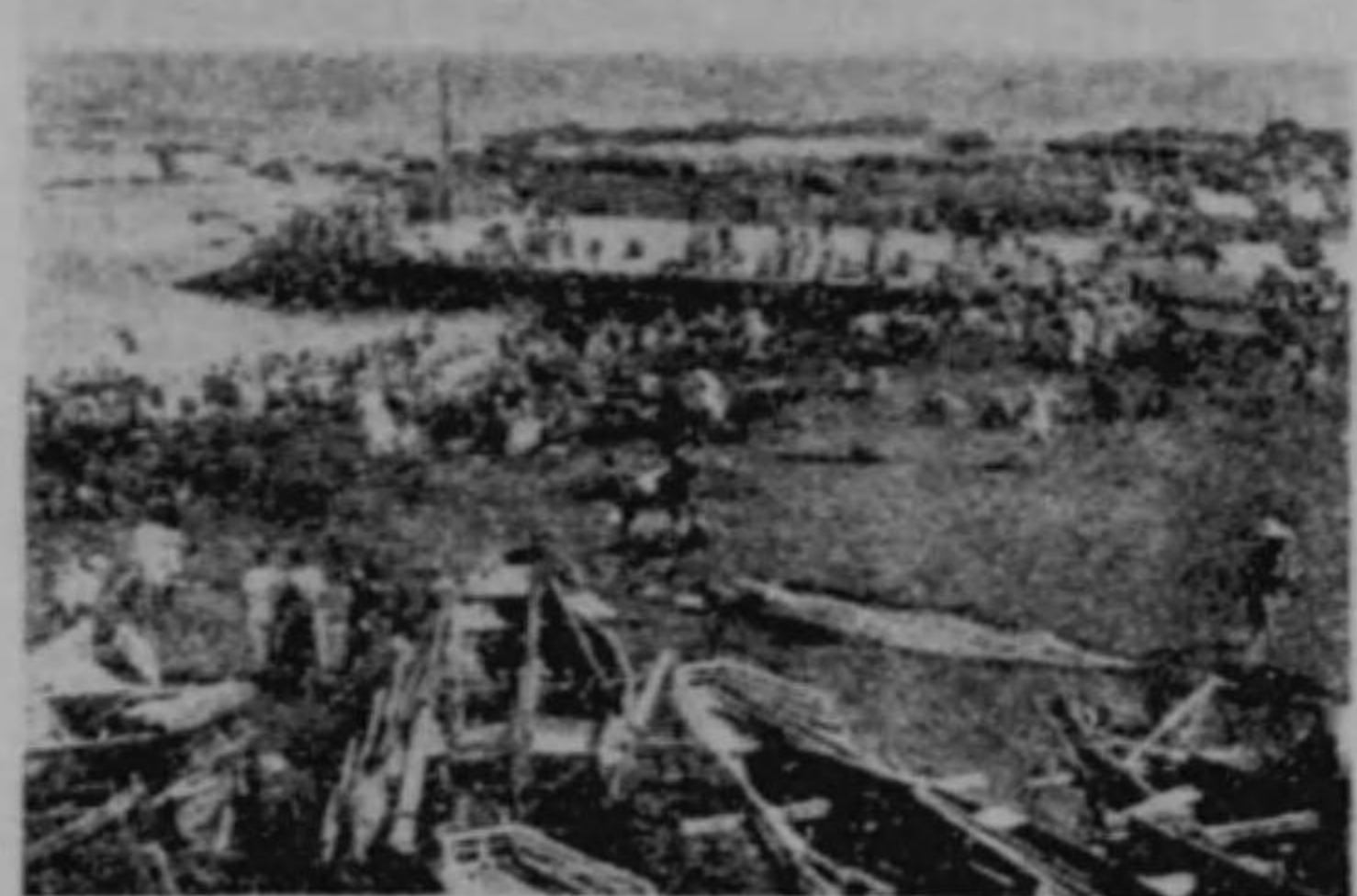
【うき世のかたみに擔うて】 世捨人の思で、ふらりと出で

た氣分が、この一句の中に十分に見えてゐる。

【飄然】 ヘウゼン。(一)た

だようて定めなきさま。(二)ふらりと去來するさま。こゝは(二)の意。

【大磯の客舎】 オホイソ



大磯

のカクシャ。大磯の旅館。

【大磯】は今の神奈川県中郡大磯町。鐵道東海道線の停車場。湘南地方知名の保養地で、避暑・避寒の好適地。都人士の別荘が多い。その海水浴場は我が國で最初に開かれたものである。附近には鴨立澤・高麗山などの名所がある。

【客舎】は、旅人宿。宿屋。旅館。

史記の商君傳に「商君亡至關下欲舍客舎」

【天下は股の下杖一本が命なり】 何といふ小氣味のいゝ言ひ方であらう。さしも廣い天下はこの兩脚の踏みゆくまゝ、いのちとたのむはたゞ一本の杖である。

【旅の旅その又旅の秋の風】 この一句、起筆より結文に至るまで、即ち全文をエキスにした趣がある。秋風に袂をひるがへしながら、心も軽く、身も軽く、旅から旅へとあこがれゆく作者の清興が、おもひやられる。

【國府津】 コフヅ。神奈川県足柄下郡國府津町。小田原町の東六軒。北東に丘陵を負ひ、南方は直に海に臨み、風光が甚だよい。鐵道東海道線の一驛があつて、こゝから

熱海線を分岐する。蜜柑の産が多い。

【小田原】 ヲダハラ。神奈川県足柄下郡小田原町。箱根火山の東麓近くに位し、相模灣に面する。舊東海道の一名城。戰國時代には、北條氏がこゝに城を構へ、徳川時代には大久保氏がこゝにゐて箱根の關所を監視した。城址の一部は今御料地となつてゐる。町は箱根に至る門戸に當り、避暑・避寒に適し、貴紳名士の別荘が多い。小峯公園(梅の名所)・報徳神社等の名所がある。

【一生懸命】 イッシヤウケンメイ。「一所懸命」の訛り。命にかけて事をする事。非常に骨折ること。

丹波興作、下に「一生懸命の時節到來、死に損はせてくれるな。」

【箱根路】 ハコネチ。箱根街道。昔の東海道即ち箱根八里を上下するもの。

【何となく】 數語を隔てて、「嬉しく」を限定する副詞であることを知らせたい。

【行脚】 アンギヤ。字の宋音。(一)禪家の語。諸國をめぐるあるく修行の僧。頭陀(ツダ)。抖擻(トソウ)。雲水(ウ



ンスキ)。遊行(ユギヤウ)。(二)徒歩で諸方を旅行すること。こゝは(一)の意。

項斯の詩に「從(リ)小郎行脚、出家來到(レ)今。」

【谷川の音耳を洗うて】 谷川の音を聞いて、耳がさつぱりすることをいふ。

【煙霧模糊】 エンムモコ。煙のやうな霧が立ちこめて、あたりがうすばんやりとしてゐること。

【煙霧】は(一)煙と霧。(二)煙のやうに立ちこめる霧。こゝは(二)の意。

北史の蕭大圖傳に「近瞻(リ)煙霧、遠歸(リ)風雲。」

鮑照の詩に「短翮(レ)不(レ)能(レ)飛、徘徊(リ)煙霧裏。」

【模糊】は、分明ならぬさま。ばんやりとしてゐるさま。

白樂天の詩に「平明(リ)山雪白(リ)模糊。」

【白露の中にほつかり夜の山】 「ほつかり」といふ擬態語が活きてゐる。たそがれ時の物影が皆うすれゆく中に、白露のみ光つて、そこに夜の山がほつかりと墨繪のやうに浮き出て見えるところ、何といふ静寂の風情であらう。

【湯本】 ユモト。今湯本村といふ。箱根山の火口瀬にあた



本 湯

り、早川と須雲川(スクモガハ)との會合するところ。小田原より一里半。箱根十一湯の一番かゝりである。

こゝの温泉は單純泉で温度七十一度。腦病や神經諸病に効があると云ふ。附近に早雲寺・正眼寺等の名刹がある。

【辿り附けば】 道をたづねながら、ゆきつけば。不案内な道に迷ひながら、尋ね／＼て行きつけば。

【袖をひかへて】 わが袖を引つばつて。

「ひかふ」とは、(一)ひきとゞめること。(二)手もとにしるしおくこと。そばにかまへおくこと。こゝは(一)の意。

【さ給へ、好き宿まゐらせん】 さあ、いらつしやい。よいお宿をお世話いたしませう。擬古文口調。

【いとむさくるしき家なり】 たいそうきたならしい家であ

る。

「むさくるし」とは、むさくきたなげなこと。きたならしS.N.P.

【旅亭】 リ。テイ。旅館。やどや。はたごや。

東鑑卷一、治承四年九月四日の條に「參(リ)入(リ)于(リ)御旅亭。」

【落膽】 ラクタン。力をおとすこと。がつかりすること。

文同の詩に「職事有(リ)出入(リ)長抱(リ)落膽。」

【まゝよ】 施すべき方法がなくて、自暴自棄したときなどに發する語。どうならうとも。さもあらばあれ。

一代男、一に「いつそに濡れた袖笠、あゝまゝよ。」

【風流のはじめ】 風流の遊のはじめ。

「風流」は、みやびやかなこと。俗ならぬこと。すき。文雅。風雅。

朗詠に「思(ヒ)魏文(ヲ)以(テ)翫(ブ)風流。」

晉書の王獻之傳に「少有(リ)盛名(ニ)而高邁不羈、風流爲(リ)一時之冠。」

【行脚の眞面目】 アンギヤのシンメンモク。行脚の眞のすがた。

【眞面目】とは、(一)本體のまゝなること。ありのままの姿。

いつはりかざりのないこと。ありてい。天真。(三)まじめ。實直。こゝは(一)の意。

【だまされてわるい宿とる夜寒かな】 宿引にだまされてわるい宿屋につれこまれ、夜寒になやむさまをそのまゝにのみ出でた句である。

【まだき】 まだその期に達せぬとき。はやくより。早朝。

伊勢物語に「夜もあけはきつにはめなむくだかけのまだきに鳴きてせなをやりつる。」

【一天】 空全體。そら一面。

李中の詩に「半夜風雷過、一天星斗寒。」

保元物語、法皇崩御の條に「一天暮れて月の光を失へるが如し。」

【鶺鴒】 セキレイ。燕雀類の一屬。體は燕に似て、尾は長く、上下に動かす。嘴は細く尖る。常に水邊に棲む。いしくなき、いしたゝき、いもせどり、かはらすどめ、こひをしへどり、などの別名がある。

【しるべ】 道しるべ。道案内。みちびき。てびき。



榮華物語、浦々別の條に「くれぐれと分け人らせたまふに、木の間よりもりいでたる月をしるべにて」

【箱根街道】 ハコネカイダウ。前の「箱根路」に同じ。

【鴨】 ヒヨドリ。燕雀類の一屬。體の長さ七寸許。つぐみに似て、尾が長く、脚が細い。頭上の羽毛は亂れて立ち、背は蒼灰色、胸部と腹部とは灰青色をなす。飛翔が巧で、群を成して飛ぶ。山林・藪などに多く、好んで木の實を食ふ。俳句では秋のものとなつてゐる。

【かしまし】 かまびすしい。やかましい。さわがしい。

拾玉集、五に「あはれかなひばら松原風さびてましらも鳥もかしましきやうへ」

【我がなりを見かけて鴨の鳴くらしき】「おれのこのをかしい姿を見かけて、あのひよどりめは鳴いてゐるらしいぞ。」といふほどの意。

「なり」は(一)物のかたち。形状。さまかたち。(二)からだつき。状態。身なり。(三)衣服などをつけたさま。服装。なりふり。(四)ありさま。ていさい。やうす。(五)なしたさまのまゝ。なすがまゝ。そのまゝ。こゝは(二)乃至(三)の意。

【色鳥の聲をそろへて渡るげな】「こゝのけしきは、いろいろの鳥が、聲をそろへて鳴きながら、遠地から渡つて來てゐるやうな様子だ。」といふほどの意。

【色鳥】は(一)種々の鳥。(二)秋わたるいろ／＼の鳥。俳諧辭典に「色鳥、秋わたるいろ／＼の小鳥の總稱。」雪玉集に「さらに又渡るもかなし山路ゆく秋や限りの色鳥のこゑ」

「渡るげな」は、渡るさうな。「げな」は推量の意をあらはす助詞。

【秋の雲瀧をはなれて山のうへ】瀧のあたりからわきあがつてゐた秋の雲が、いつしか瀧をはなれてほつかりと山の上に浮んだ實景を句によみなしたのである。

【巖端】 イハバナ。岩石のはしのところ。

去來の句に「岩はなやこゝにも一人月の客。」

【駕籠舁】 カゴカキ。駕籠をかつぐ人夫。



の山中の情趣、何とも言はうやうがない。



【山駕籠】(ヤマカゴ)は、旅人を載せて山路をのぼるに用ひる粗末な駕籠。竹を編んで、底を圓形に、屋根を網代に造る。垂れはない。丸棒又は丸竹を釣手として昇ぐ。

【石原に瘦せてたふるゝ野菊かな】瘦せた野菊が、駕籠舁の山人足にふみにじられなどして、あたりの石原によるぼひたふれてゐるさまに憐愍の情をもよほし、さてよみ出でた句である。

【雙子山】 フタゴヤマ。二子山とも書く。箱根火山の南東部にある寄生火山。外輪山上に噴出した熔岩丘で、略等大の上二子山(一、〇九〇米)と下二子山(一、〇六四米)とから成る。その北西麓に曾我兄弟の墓と傳へられるもの及び箱根十一湯の一なる蘆ノ湯温泉がある。

【秋に枯れたる婆様】 擬人法の反對に人を植物に擬したところが却つて面白い。「石原に瘦せて倒るゝ野菊かな」の句と好對照。山ではあり、秋ではあり、人間までが干か

【駕籠】とは、人を乗せて前後よりかつぎ行く具。これに引戸駕籠・垂駕籠・手駕籠・山駕籠等の種類がある。こゝは山駕籠。次の「山駕籠」の條を見よ。

【山路の菊野菊ともまたちがひけり】こゝ箱根の山路に咲いてゐる菊は、普通にいふ野菊とはちがつてゐるといふほどの意。

【野菊】は、よめな、こんぎく、ゆうがぎく、など、秋路傍に自生する菊類の總稱。又、あふらぎくの別稱。こゝは主として「よめな」類をいふのであらう。

【よめな】は、菊科に屬する山野自生の草。その嫩葉は食用に供せられる。初秋の頃淡紫色の小形の花を開く。よめがはぎ。うはぎ。おはぎ。のぎく。

【どつさりと山駕籠おろす野菊かな】昔は雲助(クモスケ)といふ駕籠舁があつたが、明治の時代、そんなものはさすがにゐない。けれども、山人足などいふものは、とかく亂暴なもので、人を乗せた山駕籠を、客が尻餅ついて痛いのも構はず、どつかとおろす。さすがは山の中だ、そこら一面には野菊が咲きほこつてゐる、といふ意。秋



らびてゐる。

【挨拶】 アイサツ。(一)人と應對すること。(二)答禮。返禮。  
(三)時儀。こゝは(一)の意。

【何となくものさびて】 何となく古びた趣むきがあつて。  
「ものさぶ」とは、(一)何となくさび衰へること。(二)ふる  
びておもむきのあること。こゝは(二)の意。

十訓抄、上に「いとよものさびたる家のすこの下に、遺水  
の音絶えく聞えて」

【名物】 メイブツ。(一)有名なもの。評判なもの。(二)その土  
地で有名な産物。土地の名産。(三)名稱のあるもの。こゝ  
は(二)の意。

【力餅】 チカラモチ。(一)山越しの時など、氣力をつけるため  
に食ふ餅。(二)相撲の興行場などで賣る餅。こゝは(一)の意。

【山姥の力餅賣るすゝきかな】 「さながら山姥ともいふべ  
きこの枯れ婆々が力餅を賣つてゐる。所がら、まことに  
ふさはしい。あれ、芒までがああのやうに穂に出て、一段  
のすごみを感じさせるはい。」といふほどの意。

【山姥】(ヤマウバ)とは、山に住むといふ女性の怪物。山

をんな。

謡曲、山姥に「山姥とは、山に住む鬼女とこそ曲舞にも見え  
て候へ。」

【杉】 スギ。松杉科に屬する喬木。葉は針狀にして稍、鎌  
の形をなす。冬季には變色するけれども落葉せず、果鱗  
は尖裂する。木材は種々の用に供せられ、樹皮は屋根な  
どを葺くに用ひられる。



【樅】 モミ。松杉科に屬する喬木。幹は高く直立する。樹  
皮は始め灰白色であるが、後には黒褐色となる。葉は細  
長く扁平で、四個の樹脂道を有し、常緑である。果實は  
毬果で、長楕圓狀卵形  
をなす。材質は輕軟で  
あるけれども、廣く諸  
種の用に供せられ、又  
觀賞用として栽培され  
る。

【元箱根】 神奈川縣足柄下郡元箱根村。箱根山の頂上。箱  
根宿の北半里。蘆の湖の東部を抱き、北に駒ヶ岳が峙つ

てゐる。蘆の湖遊覽船の發着地。こゝに鎮座する國幣小

社箱根神社は、古の箱根權現で、有名な古社である。

【秋さびたるけしき】 秋が更けて、满目荒涼たるけしき。

「さぶ」とは、(一)おとろへること。すさぶこと。(二)ふるび  
ゆくこと。(三)色のうすくなること。こゝは秋のふけゆく  
意にいふ。

【仙源】 センゲン。仙人の住むといふ奥深い地。仙境。

宋之問の詩に「未嘗<sup>レ</sup>窺<sup>ル</sup>仙源<sup>ヲ</sup>、獨進<sup>ル</sup>野人<sup>ノ</sup>船<sup>ニ</sup>。」

王維の桃源行に「春來遍<sup>ス</sup>桃花<sup>ノ</sup>水<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>辨<sup>ル</sup>仙源<sup>ノ</sup>何處<sup>ヲ</sup>尋<sup>フ</sup>。」

【支那の仙境に武陵桃源といふがあるが、こゝは、桃源ならで、  
常緑源ともいふべき仙境である。

【紅葉する木立もなしに山深し】 このあたり、落葉木の紅  
に染むものなく、たゞ常緑の喬木の鬱密森々たる景をか  
もし出してゐるさまをそのまゝによみ出でた句である。

【木立】(コダチ)は、生ひ立つた木。たちき。

源氏物語、明石の巻に「作りなしたる心ばへ、木立・立石・  
前栽などのありさま」

【千里の山嶺を攀ち】 誇張法によつて、おもしろく書きい

でたのである。

【山嶺】(サンレイ)は、山のみね。山峯。

宋書の鮮卑吐谷渾傳に「或在<sup>ル</sup>山嶺<sup>ニ</sup>、或在<sup>ル</sup>平地<sup>ニ</sup>。」

【攀ち】(ヨブ)とは、ものにとりついて、高いところへの  
ぼること。上らうとして、すがりつくこと。とりつくこと。  
攀縁。

【幾片の白雲を踏碎きて】 山の中腹にたゞよふ幾ひらかの  
白雲をおしわけつゝ登りゆくことをおもしろく書きいで  
たのである。

【鏡を磨き出せる蘆の湖】 清くすみわたつてゐる蘆の湖を  
ときすました明鏡にたとへていふ。

【蘆の湖】(アシのウミ)は箱根火山の火口原湖。富士八湖  
の一。三日月形をなし、湖面長さ六・六軒、幅一乃至一・  
五軒。その水は北に溢れて火口瀬早川となる。湖面は海  
抜七二六米、最大深度四六米。周囲の翠巒と相俟つて風  
光絶佳。北岸の湖尻(ウミジリ)から箱根町まで遊覽の  
發動機船が通じてゐる。箱根町・元箱根村・箱根神社・箱  
根關址等は皆この湖畔にある。



【絶景】ゼッケイ。すぐれたけしき。絶勝。

齊東野語に「三高亭天下絶景也。」

春語紀聞に「於郡城絶景處増廣樓居。」

【恍惚】クウコツ。「恍惚」とも書く。物事に心を奪はれて、ぼつとすること。うつとりとすること。

禮記の祭儀に「論其志意以其恍惚以與神明交。」

【立ちもえ去らず】立ち去ることもようしない。

【木のくひぜ】木の切りかぶ。

「くひぜ」は、株の字をあてる。木の切株。

和名抄、卷二十に「株、久比世。」

人丸集に「常磐山二葉の松に年を経てくひぜにならむ時を見  
てしか」

【つくぐと云々】じつと目を据えて見れば。

「つくぐ」は「熟」の字をあてる。(一)物を案じながめるさま、又は念を入れて考へるさまにいふ語。じつと。よくぐ。つらく。

源氏物語、若紫の巻に「ひるはつくぐとながめくらして」

【しんぐ】(一)夜のふけゆくさま。(二)奥深いさま。(三)しづまりかへつて、ひっそりとしてゐるさま。(四)寒さの身に

しみわたるさま。こゝは(三)の意。

【腦天】ノウテン。腦の頂上。頭上。

【力なく水にすれつあがりつ】元氣のなさうなやうす  
で、水をかすめたり、飛びあがりたりして。

【胡蝶】コテフ。「蝴蝶」とも書き、蝶ともいふ。昆蟲類中  
鱗翅類の一種。觸角は棍棒状をなし、翅は休止の際直立  
する。翅の色は概ね美しい。

莊子の齊物篇に「昔者莊周、夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。」

源氏物語、胡蝶の巻に「花園のこてふをさへや下草に秋まつ  
蟲のうとく見らむ」

【ひらく】「翻々」の義。薄きものの風にひるがへるさま  
にいふ語。こゝは胡蝶の翅の風にひるがへるさまにいふ。

津國女夫池、三に「青柳の、風にひらく」

【知らずてや、いと心強し】「や」の下に「飛ぶらん」などの  
語が省かれてゐる。「こんなか弱い胡蝶が、こゝを箱根の  
頂とも知らないで飛んでゐるのか。秋とはいへ、冬のや  
うに寒い山の中の湖の上を、この胡蝶が、か弱いながら  
も屈せず撓まず飛んでゐるのを見ると、日頃か弱い自分

も何となく勵まされる心地がして、たいそう力強く感じ  
る。」といふほどの意。

【兀然】ゴツゼン。高く突出するさま。

【三千仞】サンゼンジン。一切は一尺の七倍即ち七尺。又

四尺ともいひ、五尺六寸ともいふ。

釋文に「仞、七尺也。」

小爾雅に「四尺曰仞。」

漢書の雍劭傳の註に「五尺六寸曰仞。」

【その影を幾許の深さに沈めて】富士山の影が幾許尺かに  
小さく縮められて蘆の湖に映じてゐることをいつたので  
ある。

【さゝ波に縮みよせられたる】富士山の影が、蘆の湖上に  
たゞよふさゝ波に縮み寄せられて小さく湖面に映つてゐ  
ることをおもしろくいつたのである。

【またなくをかし】他にはまたと無いばかりに、獨特のお  
もしろみがある。

【薄】ス、キ。「芒」とも書く。禾本科芒屬の多年生草本。

年々宿根から莖・葉を抜き、高さ五六尺に達する。葉は

細長くて尖り、平行脈を有してその質が堅い。秋季莖頭  
に黄褐色の花を開き、長い穂状花序に集まり、この花序  
が數箇簇生して獸毛の状をなす。よつて俗に尾花といふ。  
秋の七草の一。莖や葉は屋根に葺く。庭に植えて觀賞用  
に供することもある。

【箱根の關】徳川時代に東海道の箱根山中に設けられた



關。三島・小田原兩宿  
の中間、箱根宿東方の  
入口にあつて、北は蘆  
の湖に面し、南には山  
を負ひ、無上の要害地  
であつたが、今はわづ  
かに石垣の一部が残つ  
てゐるのみである。徳  
川幕府の頃は小田原藩  
主がこれを預り、特に

女人や武器の出入を嚴重に取締つた。

元來この地に始めて關を置いたのは、何時からかよくわ



からぬ。しかし、承久の亂に「足柄・箱根に關を固む。」とあるからには、當時既に關があつたに相違ない。但しその地點は不明である。

【いづちなりけん】どこであつたらうか。「けん」といふ助動詞の意義及び作用を生徒にいはせて見たい。

【思ふものから】思ふものながら。思ふけれども。

「から」は「ながら」又は「けれども」の意をあらはすために添へた接尾語。これを「によつて」故に「などいふ意に用ひる「から」と混同させぬやうにしたい。

萬葉集、卷四に「路遠みこじとは知れるものからにしかぞ待つらむきみが目をほり」

【關守のまねくやそれと来て見れば云々】關守が招くのか知らと思つて来て見れば、さうではなくて、尾花の末に風が吹きわたつてゐたはい。

「關守」は、關所を守る人。關所の番人。

金葉集、卷四、冬、源兼昌の歌に「淡路しま通ふ千鳥の鳴くこゑに幾夜ねざめぬ須磨の關守」

源氏物語、關屋の卷に「關守のさもうらやましく、めざまし

かりしかな。」

「尾花」は、すゝきの花。前の「薄」参照。

金葉集、卷八に「鶉なくまの人の江の濱風に尾花波よる秋の夕暮」

【大方はすゝきなりけり山の上】伊豆相模境もわかず花すすき【實際今もやはりこの句のとほりで、蘆の湖畔箱根の宿あたりは、一面薄に鎖され、静岡・神奈川兩縣の境界を示す標木は、全く薄に埋もれてゐる。

「伊豆(イヅ)は東海道の一國。修して豆州といふ。本州中部の南東隅にある半島國で、北方は駿河・相模に接してゐる。火山が多く、温泉に富む。中にも熱海・伊東・修善寺等は世に聞えてゐる。屬島に初島・神子元島並に伊豆七島がある。半島部は静岡縣に屬し、伊豆七島は東京府に屬する。

「相模(サガミ)は東海道の一國。修して相州といふ。關東地方の南西隅にあつて、西は伊豆・駿河・甲斐と界し、東北は武蔵に接して關東平野に連なり、南東の三浦半島は房總半島と相對して東京灣の口を扼してゐる。南部相

模灣の岸は氣候が溫暖で、保養に適してゐる。全國神奈川縣に屬し、四市(横濱・横須賀・川崎・平塚)・八郡に分れてゐる。

「花すゝき」は、穂に出たすゝき。

萬葉集、卷八に「めづらしく君が家なる花すゝきはにいづる秋のすくらく惜しも」

【明治維新】メイヂキシン。慶應三年(二五二七)の大政變をいふ。同年十月十四日、將軍徳川慶喜は内外の形勢を察し、上表して大政奉還を奏請した。明治天皇は直にこれを嘉納せさせたまひ、十月九日王政復古の大令を頒發せさせ給うた。こゝに於て徳川幕府は十五代、二百六十五年で倒れ、さきに源頼朝が武家政治をはじめてから六百八十四年を経て、政令が再び朝廷から出ることをなつた。世にこれを王政復古又は明治維新といふ。

【金紋先箱】キンモンサキバコ。金漆(コシアブラ)で紋所をえがいた挾箱(ハサミバコ)。(教科書蠶頭の挿圖参照)

「金紋」は、江戸時代に、大名がその家格によつて行列の

挾箱の蓋につけることを許されたもの。大名行列中、先に立つ挾箱を先箱といひ、後に立つ挾箱を後箱(アトバコ)といふ。

「挾箱」とは、棒を通して従僕に擔はせ行く箱。挾竹(ハサミダケ)の遺製であるといふ。

「金漆」即ち「こしあぶら」は、金漆樹(コシアブラノキ)の液から製する一種の漆。きんしつ。きんのうるし。

【整々】せいぜい。正しくととのふさま。宣和書譜に「宋綬嘗爲小字正書、整々可觀。」

【鳥毛】トリゲ。「鳥毛槍」の略。

槍の鞘に鳥の毛をつけたもの。教科書蠶頭の挿圖参照。傾城反魂香、上に「まだほのぐらき曉の、鳥毛の槍先捕へしは」

【片鎌】カタカマ。片鎌槍の略。十文字槍の片方の鎌の缺けたもの。教科書蠶頭の挿圖参照。

川中島合戦、三に「後を切り取る片鎌槍、向ふよりは十文字前後一度に突き出せば」

【威勢よく振立て〜】昔大名行列の通行が、實際に威風



堂々たるさまであつたことを生徒によく想像させたい。  
【街道の繁昌】 カイダウのハンジャウ。こゝは箱根街道の  
にぎはひさかえてゐたことをいふ。

【もの本】 いろ／＼の事を書きしるしたもの、即ち書籍。  
【草刈るわらべの小路】 草を刈る子ども通行する小徑。

【行列のおもかげを薄の穂にとゞめたり】 薄の穂が立ちな  
らんで風になびいてゐるさまだけが、わづかに昔の大名行  
列の威風堂々たる面影を示してゐるといふのである。

【おもかげ】は、(一)かほかたち。かほつき。おもさし。(二)  
髣髴と目さきに見える姿。様子。かたち。こゝは(二)の意。

伊勢物語に「人はいざ思ひやすらむ玉かつら、おもかげにの  
みいと見えつゝ」

【槍立てて通る人なし花芒】 「明治維新前までは、烏毛・片  
鎌などの槍を立てて威風堂々とねりあるいてゐたこゝ箱  
根街道の大名行列も、今はわづかにもの本にのみ残つ  
て、たゞ花芒が、わづかに、そのおもかげをとゞめてゐ  
るはい。」といふほどの意。

9 挿 圖

旅装の子規

子規がこの課の作られた舞臺即ち箱根で、この旅の扮装のま  
まを撮つたもの。子規全集卷十の口繪に出てくる。

蘆の湖 釋義中の「蘆の湖」参照。

箱根街道大名道中 安藤廣重筆

廣重の作なる「東海道五十三次」の一。保永堂版の色刷のもの  
に據つた。

筆者安藤廣重は江戸末期の浮世繪師。幼名徳太郎。後、十右  
衛門と改めた。江戸八重洲(ヤヘス)河岸の定火消、同心徳右  
衛門の子。一立齋と號した。始め岡島林齋に狩野風を學び、  
後豊廣の門に入つて歌川廣重と稱した。最も浮世繪の山水に  
長じ、その遠景寫法の妙に至つては、天下獨歩と稱せられ、  
その影響は遠く泰西の畫家にまで及んでゐる。江戸名所百  
景・東海道五十三次・都名所百景等の名作がある。安政五年  
(二五一八)歿。年六十二。

六 朝

1 解 題

島村藤村の著「藤村詩集」の中の「労働雑詠」と題する詩から、  
「其一、朝」の章の大部分を採つた。

「藤村詩集」は島崎藤村の抒情詩集で、

若菜集 (明治三十年發表)

一葉舟 (三十一年)

夏 草 (同 年)

落梅集 (同三十四年)

の四集を合はせたものである。

本題の原據たる「労働雑詠」は「落梅集」の中に收めてある。

明治三十七年九月初版、東京、春陽堂發行。

2 作 者

島崎藤村 シマザキ トウソン。

名は春樹。新體詩人・小説家、明治五年(三三)二月、長野縣西筑  
摩郡神坂村(木曾山中)に生れた。三田英語學校を経て、明治學院

島 崎 藤 村



を卒業した。

明治二十六年、北村透谷と共に、雑誌「文學界」を出した。

明治三十年、始めて新體詩集「若菜集」を出し、次いで三十一年  
に「夏草」を、三十四年に「落梅集」を出して、名を成した。

明治三十五年「水彩畫家」を出して、モデル問題が起り、  
明治三十九年「破戒」を出した。これは自然派小説の嚆矢である。

次いで四十一年に「春」を、四  
十三年に「家」を出し、引續いて  
「並木」奉公人「芽生」を出し  
た。藤村が文壇への振出しは、  
新體詩と自然派小説との二方面  
である。この二つは共に明治文

學史の上に一大時期を劃してゐる。新體詩は、既に紅葉・美妙(山  
田)・鴨外・直文などによつて先鞭をつけられてゐたが、まだ傳統  
的な日本詩歌の氣分と表現とを蟬脱してゐなかつた。即ち氣分に  
於ては優美又は優雅の精神の外に一步も出でず、表現法としては  
既有的の詩形としての七五調を無視することができなかつた。この  
氣分と表現とを脱出して、氣分に於ては、典型美から内面に深ま  
り、感傷的な浪漫的な主情主義精神となり、表現に於ては、必ず



しも七五調によらないで、気分が快適な表現形式をとることとなつた。藤村以前の詩は固定的な美をその儘うたふといふのであつたが、藤村はその美を自己から出發して求めようとした。自己から求めようとするといふことは、個性の内面に掘りさげて行つて、沈潜し、懐懐し、憧憬するといふことである。この沈潜・懐懐・憧憬の精神には、文學の本質的精神、文學の原動力が流動してゐる。即ち藤村のロマンチズムは單なる空想でなくて、何物かを求めてゐるあこがれである。典型美から離脱して、魂をビリと抉るやうなものを求めてゐるのである。それが文學を生む根元の力である。明治の文學はこの精神によつて新生し、明治文學史は藤村の新詩によつて、一轉向されてゐるといふことができる。

自然派の小説はゾラの影響をうけ、日露役後の豐滿感に醸成されたものである。これは人間の醜惡を摘發して満足するものでなく人間の醜惡をあくまでつきとめて行つて、その反動として醜惡を淨化しようとするのが暗々裏に豫想されてゐるのである。醜惡をあくまでつきつめて行かうとする要求は、形式的な表面的な典型的な裝飾的な文學精神に對する反動運動として起つたものであつて、傳統を破壊して新生しようとする改革の精神からである。藤村が純一の精神をうたへばロマンチックな詩となり、一切を破邪して再生しようとするれば自然派の小説となる。この二つは相反する二つの傾向のやうに見えるがその根元に於ては一つである。大正六年頃佛蘭西に遊び、「海へ」「エトランゼ」を出した。「海へ」は往復の航海日記であつて、第一章「海へ」、第二章「地中海の旅」、

第三章「燕のごとく歸る」、第四章「故國を見る迄」、第五章「故國へ歸りて」に分れてゐる。これは海へのあこがれであり、海へのあこがれは、やがて外國へのあこがれとなる。ロマンチックの精神は必ず海をあこがれる。實朝もさうであつた、萬葉歌人もさうであつた。「エトランゼ」は交誼の (Stranger) の意味であつて、佛蘭西語である。

### 3 編纂の用意

現代詩の隆盛は先づ明治二十年代の藤村の活動にその端緒を切つたといつてよい。そこで現代詩を理解するためには少くとも藤村の初期の作品まで進む必要がある。こゝにはさうした文學史的の意図のもとに、又一面では初期藤村のロマンチックな又センチメンタルな詩風が若い人の心に共鳴する所ある興味の上からとて、本課をおいたのである。

ねむりよりさめたる新生の朝に、勞働こそ人生を高めるものであるとして、雄々しき野らへの出陣を情緒的に歌ひ出したものである。

### 4 要旨

朝になつた。鶏は「けふの命の戦闘のよそほひせよ」と叫ぶ。野に出でよ、そこには稻が黄に實つてゐる。空の日も、谷の流も、人を勵してゐる。軍神も來つて賤のものゝふを守るであらう。絹に包まれて寝るよりも、襦袢を纏うて働く方がどれほど愉快であるか知れぬ。口には朝の息を吹き、骨には若い血を纏うて、ほこらかに、力づくよく活動するのは、朝でなくては得られないのしさである。

### 5 概説

(「通釋」の項に、段に分つて解釋してあるので省く)

### 6 取扱上の注意

「長い人生にとつては少年時代、一年に取つては陽春の季節が最も希望に充ちてゐたのしいやうに、一日のうちでは、朝が最も清新で、最もたのしく、最も活力に満ちてゐて、最も愉快である。この「朝」の一篇は、それらの情趣を歌ひ出して遺憾がない。殊に野に出て働く農夫

生活の朝は、農夫に取つて最も愉快な時であるに相違ない。田園に親しみ得る事情にある生徒には、自己の身邊を歌つてくれたものとして味ははしむべく、都會地にある生徒には、田園の勞働生活の快味といふものを、この歌によつて味識せしめたいものである。

「嘉納治五郎先生は、曾て「人は朝起き出でた時に、身心ともにほがらかであるやうな生活を營むことが肝要である。」といふ意味の訓戒を試みられたことがある。昨日・昨夜を不合理な不節制な不愉快な裡に送つた人が、どうして、今日・今朝を心身ともにほがらかに起き出ることが出来よう。かくて、朝を愉快に迎へ得る爲には、昨日・昨夜が愉快に送られてゐなければならぬ。かくて又、今朝を愉快に迎へることは、やがてその一日を愉快に送り、明朝を愉快に迎へることでもある。

「この歌は、野に働く人々に取つての歌であるが、朝といふものを凡そ「命の戦闘のよそほひ」をする時として、すべての人に、希望に満ち、力に充ち、たのしい、よろこばしい時と思はしめるために歌はれたものとして味は



はしめたいものである。

7 設問

- 1 この歌全體を讀誦して、先づ、どういふ感じを受けとるか。
- 2 朝の雞の聲については、この歌の外に、なほどういふ感じを以て描かれた例があるか。(卷一、薄田泣菫の「雞」の文を思ひ出させる)
- 3 「戦闘」と縁語をなしてゐる語をあげよ。
- 4 次の語句は、どんな意味であるか。  
イ、雲に鞭うつ空の日。  
ロ、活きて起つこそをかしけれ。

8 釋義

【小夜嵐】 サヨアラシ。夜嵐。夜吹く嵐。  
 蟬丸、一に「玉ちる川瀬、浪の音、梢を渡る小夜嵐。」  
 【諸羽】 モロハ。左右の翼。兩翼  
 【咽喉の笛を吹鳴らす】 高らかに鳴聲をあげることをいつたのである。これは次の「命の戦闘」の縁語で、出陣の

用意の法螺貝にもたとへたのである。

【命の戦闘のよそほひせよ】 一日の活動、一日中の業務に出精することを、生命の戦闘と見たのである。生命の戦闘たる一日の活動にそなへるために、そのいでたちをととのへよといふのである。

【草鞋とく結へ録も取れ風に嘶く馬もやれ】 「命の戦闘のよそほひ」のおもなものである。

【雲に鞭うつ空の日】 雲に跨り鞭うつて空を渡る太陽。

【賦】 アブラ。脂肪。動物の體中に存し、時として外面に分泌する一種の粘液。身體を勞する時などに、皮膚の表面に出でくる。

【名もなき賤のものゝふ】 身分の低い無名の戰士。即ち勞働に従事してゐる農夫をいつたもので、これも「命の戦闘」の縁語である。

【綾絹】 アヤギヌ。綾織の絹。

井筒菜平河内通に「東白・西紅の綾絹に四本柱をよそほひて」  
 【襪履】 ツヅレ。破れたのを縫ぎ綴つた衣。つゞれころもぼろ。

出觀集に「玉ゆかの花の筵もさもあらばあれまこもが中のつゞれ戀しも」

【をかし】 こゝでは、おもしろい、よろこばしい、興がある、趣味がある、などの意。

蜻蛉日記に「みちのくにをかしかりける處々を繪にかきてもて上りて」

枕草紙、卷一に「夏は夜、闇もなほ螢とびちがひたる、雨などの降るさへをかし。」

【霜葉】 シモバ。霜に打たれて色づき枯れた木の葉。

9 通釋

今や夜は明けて再び朝が來た。朝は我等のところにあるのだ。さあ、今までの眠は夜のかなたへ埋れよ、夜の間に見た夢も去つてゆけ、夜中を吹いた夜嵐も姿をかくしてしまへ。

雞は兩翼をはたき、出陣の唄にも似た勇ましい鳴聲をあげて、「さあ、今日一日の生命の闘なる雄々しい活動の用意をせよ。」と叫ぶのである。

さあ、農夫よ、野に出でよ、そこには活動の相手として

稲の穂が黄色にみのつてゐる。疾く草鞋の紐を結へ、録も取れ、朝風に向つて勇ましく鳴いてゐる馬をも野邊へ進めよ。

雲に跨つて大空を渡る日は、不言不語でゐるけれど、下界の人を勵ます音は野に、山に、はた谷に溢れてゐる。日の照るところすべてに活動を促す快いひびきがある。

雄々しい勞働に従ふ時、流れる汗と賦とはどこに落ちるか。いふまでもなくかの野邊である。いざ軍神よ、その野邊に來て、賤しい無名の戰士たる農夫を護つてくれ、軍神よ。(「野に出でよ」の反覆)

綾絹に包まれて何等爲すこともなく安眠を貪るよりも、たとひ薄い襪履を身に纏ふとも、潑刺たる活動をするところ男子の本懐ではないか。

口には清新な朝の氣を吞吐し、身體の中には若い熱血を漲らし、胸には誇を抱き、手には力をたまらせて、落ち散つた霜葉を踏んで、早く野邊へ出てこい。

(「野に出でよ」の反覆)



10 参考

1 原文の省略

本課に採録した部分の後に左の三節を添加して原文は終つてゐる。

さながら土に繋がる、  
重き鎖を解きいでて  
いと暗きに住む鬼の  
筈の責をいでむ時

口には朝の息を吹き  
骨には若き血を纏ひ  
胸に驕慢手に力  
霜葉を履みてとく來れ

野に出でよ野に出でよ

稻の穂は黄にみのりたり

草鞋とく結へ鎌もとれ

風に嘶く馬もやれ

2 藤村の作風に對する批評

○藤村の「若菜集」が三十年八月に出た。それは詩界の混沌を破つて、若き日本の詩の向ふところを知らしめたエポック、メーキングの

一産物であつた。内容・詩形・詞藻の上で藝術的一致を具現した最初の詩集であつた。詩界の黎明の色は「若菜集」によつて濃度を加へて來た。

藤村が「若菜集」を出して新體詩人としての顯著な成功を得たわけは(一)専念、ヨーロッパの詩に讀み耽つて、スキンパン、ロセッチらのラファエロ前派の影響を受けたこと。(二)詩形・用語の上に細心の注意と研究とを傾けたこと。(三)藝術的氣稟が豊かで、新代の感情を代表的に歌ひ出したこと。(四)敘事・抒情兩面に於ける才能を備へたこと。(五)國文學・支那文學の素質が相當にあつたこと、などによるであらう。藤村の戀愛詩は勿論彼の個性の色彩・匂ひはあるが、戀愛詩人として奔放な情想を披瀝したロセッチや、「バイロンの再生」と稱せられたスキンパンの肉感的・官能的な抒情の歌などに影響せられたことは否まれぬやうである。それに彼自身、あり餘るほどの情熱を抱いて、孤獨の境、漂泊の旅などに戀を思ひ、美女を思ひ、自然の美を思ひ、憧憬・愛慕の感に身を没したのである。それらの體驗をとほして彼は若き日本に於ける青春の人々の感情を直覺し、それを烈しく「若菜集」に歌ひ出したのである。しかも彼には、藝術的に細かな用意があり、修練があり、優れた技巧があつたから、その詩の上に何等の破綻を示さなかつたのである。かうして「若菜集」が劃期的なあとを詩壇に印したのは當然のことだ。

勿論、今日から見ると、「若菜集」にはセンチメンタルな傾向が多くて、餘りに夢を見過ぎたやうなところがある。人生に對して高

踏的・逃避的な點がある。が、さうした缺陷があつても「若菜集」の美點は、決して傷つけられない。そこに永遠の美しい夢があるからだ。消しても消しても、消えさらぬ情熱の噴泉があるからだ。「若菜集」中の秀拔な詩はどれであるかと云ふことについては、各自の好みであらう。私は「深林の逍遙」「四つの袖」「秋風の歌」などを推したい。

「若菜集」で成功した藤村は、その向上の一路を歩むことを忘れなかつた。その翌年(明治三十一年)初夏には「一葉舟」を出し、冬には「夏草」を出して、彼の詩的心境の推移を示した。「一葉舟」には彼の情熱は一味の沈靜を加へたと見える。「夏草」には、藤村が、ロマンスの世界から現實の世界へ移つて行かうとした心持が見える。この傾向は、三十四年に出した「落梅集」に至つて一層具體化されたことがわかる。センチメンタルイズムの殻を破ることは、可なり困難ではあつたが、藤村は力めてそれを打破つて、現實の上に自己の新しい地盤を築きあげようとしたのである。

「一葉舟」では、曾て熱烈に戀を歌つた藤村が「白磁花瓶賦」で失戀の藝術家が心的苦悶のうちから創造した純白の花瓶に現はれた美の心を歌つた。その他「晩春の別離」「月光」などに於ても、藤村の沈靜に赴き始めた詩情の閃きを見せた。「夏草」になると「農夫」「新潮」など現實生活を歌つたものが新しく眼に着く。戀の夢から次第に醒めて、現實に眼をうつした藤村の心境が漸く鮮かにならうとしてゐる。「落梅集」になると、労働や事業を愛して、根強く現實に生きてゆかうとする正直な人々を心から嘆美してゐる

る姿が、はつきり出て來て居る。勿論、それには教訓的な調子が加はつて詩趣を稍減ずる嫌ひはあるが、プロレタリアに早く同感した藤村の博い愛の心がわかる。藤村の詩人としての生涯は茲に至つて轉機に起つて、詩に執るか或は散文の方へゆくかとなつたが、彼は思ひ切つて散文の方へいつたのである。(高須芳次郎——現代文學十二講)

○國會開設以後日露戰爭の頃に至るまで、若き心を目ざました文學は主情主義の色彩を帯びてゐた。抒情詩が榮えたのはこの時代である。この主情主義を最もよく代表するものは、二十六年に創刊された「文學界」の同人、透谷・藤村・禿木・秋骨(明治文學の研究者は從來、彼等を明治學院に結び付けてゐるが、透谷は學院に關係なく、他の諸氏も學院の精神によつて育てられたといひ得るや否やは疑問である。寧ろ明治女學校に集つた詩人及びその交友といふ方が適當である)これに加つた柳村・花袋等の諸氏である。(一二二頁)

同じく自然主義者に數へられた小説家のうちでも、藤村・獨歩・泡鳴等、新體詩人から成長した人々と、單にモオパッサン等を模倣して性慾描寫を中心にした人々との間には、非常なる深淺の差があつた。又、種々な戀を歌つた「戀ぐさ」、六人の女性を詠み分けた「薄ぼり」を出し、やがて、生存の慘ましい姿を描いた「難」を公にし、純情の歌より人間の努力を詠じた「農夫」及び「労働雜詠」に至つた藤村の成長には、抒情詩から小説に赴いた必然的な



精神の成長があり、告白的な、個性のうちから生れたといふ印象がある。(一二四頁)

自然主義は主情主義の時代とは異なり、自覚を有する故に、苦悶のうちにも明かるさを失はず、且つ、感情的な我のみならず、精神全體の覺醒であつた。彼等はもはや漠然たる憧憬を歌ふことに満足せずして、必然なるものを顯現せしめようとする。(一二八頁)(土屋光知、文學序説)

○藤村もこれまで「若菜集」の新體詩に歌つたやうな題材で「かなしいかなや」などと感傷してばかりもゐられなくなつて、三十九年に長篇「破戒」を作つた。破戒の主人公は信州の北部に特殊部落の人として生れた青年教師である。彼はその素性を恥としないやうな近代の理知を具へてゐる。しかしながら社會の舊慣は依然として猛烈にこの素性を排斥する。教師として生きるには習俗に従ひ素性を隠してゐるに限る。素性を明かすとは亡父の固い戒めである。しかしそれは一時の安きを偷む卑怯な生き方である。徹底を欲する青年の目覺めた心には習俗を打破して本當の生き方をしようとする已み難い要求がある。この本當の生き方を是とする醒めた知識と、まあ無事に過さうとする引込思案との間に苦しい争闘が絶えず行はれて、結局倫安の悩ましさに堪へないで兒童の前に素性を告白するのである。この現實の真相を包み隠すことに堪へきれないで遂にこれを暴露してしまふのが即ち當時の新しい傾向であつた。この意味に於て「破戒」は新精神を具象の事實で表

現し得たものといへる(九五頁)  
(岩城準太郎、明治大正の國文學)

## 七 偉 人

### 1 解 題

嘉納治五郎著「青年修養訓」の第七「偉人」の章を採録した。我が明治維新の人物を例證として、偉人の感化の偉大なことを説き、以て青年子弟を激勵した文である。

「青年修養訓」は、その凡例の一節に「本書青年修養訓は別著青年處世訓と相俟つて、廣義の道徳上から、今日の青年に特に必要な教訓を完成するものである。」としてある通りに、第一「我が國の青年に告ぐ」の章から、第五「結論」にいたるまで、すべて五十章、青年の修養上特に必要な題目を選んで、これに關する教訓的敘述をなしたものである。

明治四十三年、東京、同文館發行

### 2 作 者

嘉納治五郎 カナフ チゴラウ。

萬延元年(二五二〇)攝津國(兵庫縣)武庫郡御影に生れた。父は治郎作希之といつて幕末の志士であつた。明治十四年、東京大學

## 嘉 納 治 五 郎



を卒業。十五年學習院講師となり、十八年同院監事、十九年同院教授兼教頭に任ぜられた。二十二年宮内省御用掛となつて、直に歐洲に差遣せられ、翌年歸朝、文部省參事官に任じ、第五高等學校長を兼ね、後、第一高等學校長に轉じた。二十六年、高等師範學校長に任命。三十一年、文部省普通學務局長となつたが、幾もなく辭した。三十四年復び高等師範學校長に任ぜられ、大正九年一月までその職に在つた。辭任後直に歐米漫遊の途に上り、翌年歸朝。十一年、貴族院議員に勅選せられた。嘗て造士館を設けて青年子弟修養の指導をなし、又嘉納塾を設けて塾舎に青年子弟を收容し、以てその監督・指導に任じた。尙一方、柔道諸流を折衷して講道館流の一派を開き、その館長とし、師範として斯界に多大の貢獻をなした。昭和十三年歿、年七十九。

### 3 編纂の用意

青少年の喜ぶべき特色の一つは英雄主義に驅られ易いことである。これを善導する時は、その前途に希望と光明



とを認めしめて、奮然として他日の大成に向つて精進刻苦することとなる。されどこれが指導を怠らんか、單なる空想家たらしめ、誇大妄想狂たらしめ、終には空想と實現との懸隔の甚だしいものに直面して失望自棄、意氣沮喪の境に到らしめるであらう。英雄主義はまた偉人崇拜を齎らす。この偉人崇拜に適當な指導を與へることは、英雄主義の善導法として最も効果の多いものである。本課はかうした點から見て、漸く英雄主義を抱懐せんとする年頃の中學生に對して好個の教材であると信するのである。

#### 4 要旨

偉人の國家・社會及び人類に及ぼしてゐる功績感化を讚美し、更に青年子弟に對して、之を師とし範として奮勵努力すべきことを勸めてゐる。その立言の正大なところ、その措辭の雄渾なところを玩味せしめ、生徒各自をして、いはゆる「我として最高の發展を爲すべく、發憤興起せしむるに在る。」

#### 5 概説

第一節(四三頁—四四五頁) 吾人人類は歴史の空に輝く星のやうな偉人・傑士によつて、始めて意義ある過去と光榮ある現在とを有ち得ること、及び吾人の經營する事業は、彼等の遺業を繼紹してこれに新發展を加ふるに外ならないことを述べた。

第二節(四四頁—四六頁) 例證を明治維新の四大人物に取つて、偉人が成し遂げた經國濟世の鴻業を述べた。

第三節(四六頁—四八頁) 前節につゞいて維新時代の諸人傑の偉大な功業を總括的に敘し、國民が之を欽仰景慕することの偶然でない所以を説いた。

第四節(四八頁—五〇頁) 前節に於ける明治維新の四大人物の評論から轉じて、幕末の二大偉人たる吉田松陰・橋本景岳に言及した。

第五・六節(五〇頁—五二頁) 我が國の將來を經營すべき少壯國民の任務の重大なことを述べて、須らく偉人を學び、その先蹤を繼ぐべしと懇懇し、殊に世に

凡庸視せられつゝある子弟を論じてゐる。

第七節(五二頁—五四頁) 全文の結論。例を前記六偉人幼時の境遇に假りて、世に凡庸視せられつゝある子弟及び微賤の家に生れたる子弟を激勵し、更に有爲の人物を要することの極めて急なる我が國の現狀を敘し、「誰か前英に續ぎ來者に先んずるものぞ。」と絶叫して、有爲の青年の發憤を促し、最後に繰返して、人は須らく我としての最高の發展をなすべき旨を述べ、精神修養の一日も忽諸に附すべからざることを誨へてゐる。

#### 6 取扱上の注意

青年修養訓の凡例に「種々の説明法に加ふるに、古人の訓言詩歌を以てして理解を切實にし、感動を深からしむるやうにした。」とあり、又「本書の文體は口語體によつたのであるが、必ずしも常用の言語のみに限らず、これに文語・成句を調和し、現代の文章として最も適當ならしめんことを期した。随つて、その語法・句法・送假名・句讀法も一定の標準によつたもので、たゞ漫然と筆を下し

たのではない。」とある。

本課は全くこの用意の通りで、實に説明法が自在であり、引用句が適切であり、讀者の感動を深からしめるものがある。そしてその説話の態度がいかにも重厚で、何となく作者その人に面接して訓話を聴くやうな思がする。國士を以て稱せられてゐる作者は、誠に偉人を説くに相應しい人物であるといふやうにも、この文から感ぜられるのである。

口語體としては、少し固いやうにも思はれるが、豊富な漢語の語彙が極めて自由に使ひこなしてある。殊に各人物の評にそれが著しく感ぜられる。全く漫然と筆を下してはかうはゆかない。これを單に文章として見るも實に堂々たるもので、朗々讀誦すべき價値が十分にある。

偉人傑士が星の如く云々(四三頁—四六頁)の節は、星・空・輝・光など、縁語を用ひた修辭の巧に無理がない。

死生の境を行くこと云々(四六頁—四八頁)の事實については、芝の赤羽橋の畔を通る時、銃丸が鬢をかすめて行つた話や、九段招魂社の側を通るとき、自分の馬丁が銃弾



に斃れた話が「氷川清話」にある。何れも江戸城受渡前  
後海舟が幕府の爲に東奔西走してゐた際の事である。

7 設問

- 1 この文を通讀して、どういふ特色が感得されるであらうか。
- 2 この文が讀者の吾々を打つものは、なんでであらうか。
- 3 この文には一種の力があるが、それは、何によつて然るのであらうか。
- 4 内容の上から、この文の優れてゐる點をあげよ。
- 5 文章として、この文の秀でたところをあげて見よ。
- 6 次の語句の意義を吟味せよ。  
イ、大上は徳を立て、その次は功を立て、その次は言を立つ。(例を舉げて解釋せよ)  
ロ、世界の奇蹟。  
ハ、赤心を人の腹中に置く。  
ニ、英才煥發。  
ホ、安得類古人、千載列青史

7 書取練習

協心戮力。偉人傑士。景慕。先蹤。凡庸。精勵刻苦。王侯將相。機略縱橫。

8 釋義

- 【偉人】 キジン。偉大な性格をそなへた人。最もすぐれた人。すぐれて立派な人。俗語にいふ、えらい人。英語の Great man に當る。  
魏書の鍾繇傳に「此三公者乃一代之偉人也。後世殆難繼矣。」  
【古來の生民】 昔から今日までに、この世界に生れ出た無数の人民。  
「生民」は、たみ。人民。  
書經の革命に「道洽政治、澤潤生民。」  
孟子の公孫丑上に「自生民以來、未レ有孔子也。」  
【卓然】 タクゼン。ぬき出でて高い貌。  
漢書の武帝紀贊に「卓然能黜百家、表章六經。」  
【崛起】 クッキ。「屈起」とも書く。(一)山などが聳え立つこと。(二)俄かにおこり立つこと。  
王命論に「未見得屈起在此位者也。」

【功業】 コウゲフ。功績の顯著な事業。いさを。功績。

易經の繫辭に「吉凶見乎外。功業見乎變。」  
戰國策の齊に「功業可明矣。」

【德澤】 トクタク。仁徳のうるほひ。徳化の餘澤。めぐみ。恩澤。

詩經の序に「褒姒嫉妬、無道並進、德澤不加于民。」  
史記の平津侯傳に「先帝之德澤未衰。」

【炳】 ヘイ。著明なさま。あきらかなさま。光りかゞやくさま。

【暗淡】 アンタン。黯淡とも、黯澹とも書く。うすぐらいさま。昏冥なるさま。

楚辭に「彼日之照明兮、尙黯澹而有瑕。」  
郭熙の山水訓に「山水之雲氣、四時不同。春融怡、夏蒼鬱、秋疎薄、冬黯澹。」

【寂寞】 セキバク。「寂漠」とも書く。ものさびしいこと。ひっそりとしてゐること。

莊子の刻意に「恬淡、寂寞、虛無、無爲、此天地之平、而道徳之質也。」

楚辭に「山蕭條而無獸兮、野寂寥乎無人。」

白樂天の詩に「風荷老葉蕭條綠、水蘩殘花寂寞紅。」  
平家物語、四、嚴島御幸の條に「法皇の離宮の故亭、幽閑寂寞の御住居、御心苦しう御覽し置かせ給へば」

【幾多】 イクタ。いくばく(幾許)。轉じて、あまた(數多)。

【傑士】 ケツシ。すぐれた人士。傑人。

【不老(フラウ)のその輝(ヒカリ)を投じ】 いつくまでも老いず衰へない光を放つこと。永久に消えない光明を人世にもたらすことにたとへていふ。

【破闇(ハアン)のその光を耀かしてゐる】 きらびやかに。かゞやかわたつて、やみ夜を照らすこと。人世に大いなる光明をもたらしてゐることにとたとへていふ。

【意義】 イギ。こゝろ。わけ。意味。  
神仙傳に「班孟能含墨、舒紙著前、嚼墨噴之。皆成文字。字滿紙各有意義。」

【光榮】 クウエイ。はえ。さかえ。ほまれ。名譽。榮譽。  
李白の詩に「名在三列女、籍在竹帛以光榮。」  
歐陽修の文に「美三鳥之光榮。」

太平記、二十七、雲景未來記の條に「宿因の有る程は、子孫



無窮に光榮せり。」

【吾人】 ゴジン。われく。われら。

史記の河渠書に「泛濫不止兮、愁吾人。」

【文明】 プンメイ。文教が盛んで、人智が進歩し、百般の事物が整備して、世が開明に赴くこと。人文が発達して光明のあること。

易經の文言に「天下文明。」

【解釋】 カイシヤク。ときあかすこと。説明。

【經營】 ケイエイ。「經」は量り度る義。「營」は営み作る義。熟しては、繩張をなし、もとを立てて屋舎などを建築すること。轉じて、規模を定め、基礎を立てて物事ををさめ營むこと。

詩經の大雅、靈臺篇に「經始靈臺、經之營之。庶民攻之、不日成之。」

詩經の小雅に「旅方剛、經營四方。」

戰國策の楚に「欲經營天下、混一諸侯。」

【事業】 ジゲフ。わざ。仕事。

易經の上經に「暢於四支、發於事業。美之至也。」

同書に「所營謂之事、事成謂之業。」

【遺業】 キゲフ。先人ののこしておいた事業。遺緒。

晉書の王隱傳に「受父遺業。」

【繼紹】 ケイセウ。先代の人の事業をうけつぐこと。

周禮の疏に「取其繼紹而盡善盡美也。」

【新發展を加ふ】 新しい發展をつけ加へること。

「發展」(ハッテン)とは、發達し展開すること。伸びひろがること。

【大上は徳を立て云々】 徳を立てるのは、人の最上の行、功を立てるのは、その次の行、言を立てるのは、その又次の行であるとの意。

「徳」とは、本務遂行の結果として成り、又は本務を遂行せしめ得る人の道義的の力。又、正義人道にかなつたと、即ち正義の心、至善の行。

「言を立てる」とは、後世にまで傳はつて減びないほどの言論を發表すること。

左傳の襄公二十四年に「豹叔孫聞之、大上有立德、其次有立功、其次有立言。雖久不廢、此之謂不朽。」

【影響】 エイキヤウ。(影の形に随ひ、響の聲に應ずるが

如き義)關係の及ぶこと。さしひびき。

書經の大禹謨に「禹曰、惠迪吉、從逆凶、惟影響。」

漢書の江充傳に「下之應上、猶影響也。」註に「如影之隨形、響之應聲也。」

莊子の在宥篇に「大人之教、若形之於影、聲之於響。有レ問而應之。」

【不朽不滅】 フキウフメツ。朽ちもせず、滅びもせぬこと。

【壯快】 サウクワイ。さかんにしてこゝろよいこと。

【崇高】 スウカウ。けだかいこと。尊嚴なこと。

易經の繫辭に「崇高莫大乎富貴。」

【人格】 ジンカク。人の性格。人の品格。人から。

倫理學上では、精神の統一を持續して意識的行動をなし、道徳上の責任をも受け得られる資格ある個體をいふ。

【明治の御代】 雜誌「太陽」臨時増刊、「明治聖天子」所載、文學博士三上參次の「明治昭代の歴史上の地位」の一節に、

「明治の御代は複雑を極めたる史的事件の連続なり。しかも確乎たる大主義の終始これを一貫するありて、以て我が帝國の過去の二五百年に一段の括りを附け、以て更に無窮の將來を開かせ給へるものなり。先帝陛下(明治天皇)は嘉永五年を以て降

誕あらせ給へり。かの米糶の渡來していよく桃源の夢を破り

しはその翌年の事に係る。これより御位に即かせ給ふまでの十五年の間は、尊王攘夷の二問題相錯綜して、未だ戦争にこそは至らざれ、實に國史中の狂瀾怒濤時代の一かりき。而して先帝の御代となりて、王政めでたく古に復するに及び、先づ五事を天地神明に誓はせ給ひ、着々維新の政を行はせ給へり。即ち諸外國と和親交通の事あり、切支丹解禁の事あり、遷都の事あり、穢多非人の稱を廢し、眉黛・涅齒・結髮・帶刀を廢する等、風俗習慣改善の事あり、版籍奉還・廢藩置縣によりて、土地・人民私有の制の完全に跡を絶つあり、四民みな平等となる事あり、徴兵令出でて全國皆兵の主義となるあり、學制頒布せらるるあり、曆法の改まるあり、財政制度の整備せらるるあり、汽車・汽船・電信・機械等物質的進歩の著しきものありて、殖産興業次第に開け、公議輿論に據るの政漸を以て行はれて、遂に憲法の發布、帝國議會の開設となり、東洋唯一の立憲君主國の現出を見、教育に關する勅語の下るありて、教育の方針に確立し、つぶさに辛酸を嘗めたる條約改正も成功して諸外國と對等の交際を爲し、日清・日露の兩大戰役を経て、我が邦は遂に世界に雄飛するに至れり。東洋の一孤島として歐米の人より蔑視せられたりし状態より、列強の間の重きをなすに至るまでの大變化は、是皆明治の大御代の出來事にして、半世紀に足らざる歲月の事業としては、その成績の顯著なること實に意料の外に



あり。故に外人は或はこれに驚き、目を睜つて奇蹟と呼ぶに至る。

【長足の進歩】 チャウソクのシンボ。進歩の非常に早いことをいふ。

「進歩」とは、歩みを進めること。足をすゝめゆくこと。轉じて、次第に發達すること。漸次に善い方に向ひ行くこと。傳燈錄に「百尺竿頭須進歩、十萬世界是余身。」

【奇蹟】 キセキ。又「奇迹」とも書く。英語の Miracle の譯語。宇宙律以上の出來事又は不可思議なる事象。換言すれば、人間界又は自然界に行はるゝ因果關係又は勢力を以てしては成し得べからずと思はれる出來事をいふ。

奇蹟には種々の別がある。感覺に觸れないものを内的奇蹟といひ、死者の蘇生の如く耳目に觸れるものを外的奇蹟といひ、神の外、一切の被造物の力では行はれないものを大奇蹟といひ、人の力では行はれず、天使の力でのみ行ひ得べきものを小奇蹟といふ。又物質界・知識界・道德界の法則以外に行はるゝによつて物質界の奇蹟、知識界の奇蹟、道德界の奇蹟等の別がある。奇蹟は人間より見ればこそ奇蹟であるが、神より見れば尋常事である。基督教では大いに奇蹟を貴ぶ。聖書中には基督が大いに奇蹟を行つたことが記されてある。

漢の高祖の功臣頌に「無知叔敏、獨昭奇迹。」

【王政の維新】 ワウセイのキシン。徳川幕府が大政を奉還し、政令が大小となく朝廷より出て、王政の古に復した明治維新の大政變をいふ。慶應三年(二五二七)十二月十日の王政復古の大號令に、

徳川内府從前御委任の大政返上、將軍職辭退の兩條、今後斷然被開食一候。抑、癸巳以來未曾有の國難、先帝頻年被惱、宸襟一候次第、衆庶之所知に候。依之被決、叔敏、王政復古、國威挽回之御基被爲立候間、自今攝關幕府等廢絶、即先假に總裁の始に原き、經神・武弁・堂上・地下の別なく至當の公議を竭し、天下と休戚を同じく可遊。叔敏に付、勉勵舊來驕惰の汚習を洗ひ、盡忠報國の誠を以て可致、奉公一候事。

とある。こゝに於て政權は天皇に歸し、百揆はこれより皆革まり、世界の奇蹟と稱せらるゝ明治の聖世を出現するに至つた。これを「御一新」とも明治維新とも稱する。

【維新】は、詩經の大雅、文王篇の「文王在上、於昭于天。周雖舊邦、其命維新。」から出た語であるが、その用法には彼我大いなる相違がある。支那に於ける維新は天命が維れ新なることを意味し、我が國に於ける維新は、

百度が維れ新なることを意味する。兩者を混同せぬやう生徒に注意せられたい。

【大御稜威】 オホミイツ。天皇の尊嚴な御威光。

「大」御は共に崇敬の意を含む接頭語。

「稜威」は、鋭い威勢。尊嚴な威光。

古事記、卷上に「いづのちわきにちわきて。」

神代紀、卷上に「稜威之高軻。註に「稜威此云伊都。」

【努力】 ドリク。つとめはげむこと。奮勵すること

文選の古樂府、長歌行に「少壯不努力、老大徒悲傷。」

【奮闘】 フントウ。(一)勇氣を奮つて敵と闘ふこと。(二)力を奮つて困難と闘ふこと。こゝは(二)の意。

【至誠】 シセイ。極めてまことなること。極めて純粹にしていつはりなきこと。まごころ。

中庸に「惟天下之至誠、爲能盡其性。」

同書に「至誠之道、可以前知。」

【衷心】 チュウシン。まごころ。本心。衷情。衷懷。

【民人】 ミンジン。人民に同じ。たみ。

詩經の大雅に「維此惠君、民人所瞻。」

論語の先進篇に「有民人焉、有社稷焉、何必讀書、然後爲學。」

【大勢】 タイセイ。(一)大體の形勢。おほよその有様。(二)世のなりゆき。天下の趨勢。(三)大いなる權勢。こゝは(二)の意。

【着眼】 チャクガン。目ぼしをつけること。氣をつけること。

蘇軾の詩に「著眼細看君勿誤。」

【經國の大本】 國を治める根本の方策。

「經國」(ケイコク)は、國家を治めること。國家を經營すること。

晉書の宣帝紀に「今天下不耕者蓋二十餘萬、非經國遠籌也。」

魏の文帝の典論に「文章經國之大業、不朽之盛事。」

【謀慮深遠】 ボウリ。シンエン。かんがへのふかいこと。ふんべつのだいそうふかいこと。

【規畫周密】 キタク。クシウミツ。もくろみのゆきとどいて綿密なこと。



「規畫」は、はかりさだめること。又、そのこと。くはだて。もくろみ。計畫。畫策。

蘇洵の高祖論に「陳平張良智之所不及、則高帝嘗先爲之規畫處置。」

「周密」は、あまねくゆきわたること。綿密によくゆきとどいてゐること。

漢書の宣帝紀に「樞機周密、品試備具。」

【皇猷】 クァウイウ。帝王の國家を治めたまふ御はかりごと。治世の道。皇談。帝談。

北史の牛弘傳に「皇猷遐闡、化覃海外。」  
忠經に「皇猷丕々、行於四方。」

【贊す】 サンス。たすけること。賛助・翼賛・賛成などと熟する。

【木戸松菊】 キドシ・ウキク。明治維新の元勳。名は孝允。松菊はその號。小字は小五郎。長門國萩藩の醫和田昌景の子。

幼にして桂氏を繼いだが、後國務に與るに及んで木戸準一郎と改めた。夙に志を立てて書を讀み、吉田松陰等と交つた。幕末に方り、東奔西走して薩長の聯合を謀り、王政復古の大業を翼

賛した功は頗る多大である。

明治二年(二五二九)九月復古の功により、祿千八百石を賜ひ、從三位に敘せられ、三年五月參議に任ぜられた。この間明治維新の二大事件たる版籍奉還・廢藩置縣の事があつた。孝允は實にこれが主唱者で、又これが實行者であつた。四年九月特命全權副使として岩倉具視に從つて歐米を巡回し、六年七月歸朝した。時に征韓論が盛んであつたが、孝允はこれに反對した。七年一月文部卿を兼ね、次いで内務卿の事を兼理した。五月征臺の議に反對し、官を辭して郷里に歸つた。

八年三月再び參議に任じ、尋いで地方官會議の議長となつた。九年三月病によつて參議を辭し、内閣顧問となり、病癒えて後、宮内省出仕を兼ね、君側に侍して獻替する所が多かつた。

十年二月西南の事變が起つたとき、天皇に陪從して京都にゐた。會々宿病がまた發し、五月終に危篤に陥つた。天皇は親しくその寓に臨御して慰問し給うた。二十五日勳一等に敘せられ、翌日薨去した。享年四十四。天皇宸悼し給ひ、正二位を贈り、金幣を賜はつた。その敕宣に、

公誠忠愛。夙傾心于皇室。獻替規畫。大展力於邦猷。贊維新之洪圖。襄中興之偉業。功全德豐。有始有終。洵是國之柱石。實爲朕之股肱。茲聞溘亡。曷勝痛悼。因贈正二位。併賜金幣。宣。

翌年孝允の殊功を録してその嗣子を華族に列し、十七年侯爵を授けられた。二十二年憲法發布の時は、特に勅使をその墳墓に

遣はしてこれを告げしめ給うた。蓋し孝允が夙に立憲を以てその志と爲してゐたからである。同三十四年從一位を贈られた。

【沈毅】 チンキ。沈着にして、剛毅なこと。おちついて、物事に動ぜぬこと。

魏志の明帝紀註に「明帝秀出、口吃少言。而沈毅好斷。」

【端嚴】 タンゲン。端正にして威嚴のあること。正しくしておごそかなること。嚴正。

舊唐書の韋陟傳に「端嚴峻整。」

風俗通に「舊俗常以下衣冠子孫。容止端嚴。學問通覽。任顧問者上、以爲御史。」

【時局の紛難を處理す】 世の中におこるいろいろのもつれごとをとりさばいて、それ／＼始末をつけること。

「時局」(ジキ・ク)は、時世の状態。時勢のなりゆき。世局。

「紛難」(ファンナン)は、もつれみだれること。又、その事。

「處理」(シ・リ)は、處置をつけること。取り扱つて始末をつけること。

舊唐書の韓卓傳に「卓奏報失實。處理無方。」

【快刀の亂麻を斷つが如く】 よくきれる刀で、もつれみだれてゐる麻絲を斷ちきるやうに、てきぱきと物事を處斷するたとへにいふ。

「快刀」(クァイタウ)は、きれ味のよいかたな。

【凛々】 リン／＼。(一)寒さの肌身にしみるさま。(二)いさましいさま。(三)威嚴の鋭いさま。こゝは(三)の意。

潘岳の寡婦賦に「寒凄々以凛々。」

【英風】 エイフウ。すぐれ出でたる風格。

【上下の信頼を得】 上聖天子より下一般人民にまで信用せられ、たよりにせられること。

「信頼」(シンライ)は、信じたよること。信じて依頼すること。

【國家の柱石】 コクカカのチュウセキ。柱石の一家を支持する如く、國家の重任を負擔してこれを支持する臣。國家の重臣。

漢書の霍光傳に「將軍爲國柱石。」

漢書の元后傳に「前丞相樂昌侯、本以先帝外屬、內行篤有威重、位歷將相、國家柱石臣也。」



【大久保甲東】 オホクボカフトウ。明治維新の元勳。名は利通。幼名は利濟。通稱正助。後一藏と改めた。甲東はその號。薩摩の藩士次右衛門の子。天保元年(二四九二)鹿兒島に生れた。

長じて容貌魁偉、人に畏服せられた。幕末尊王攘夷の説の盛んな時、西郷隆盛・大山格之助等と共に東西奔走し、上京して、三條・岩倉諸公を説いた。後、薩長聯合の事に當り、維新の大業を翼賛した。既にして東京遷都の議を奏上し、御嘉納を蒙つた。後、參議に拜せられた。尋いで木戸孝允の版籍奉還の議を賛し、共に盡力した。後參議を免じ、大藏卿に任ぜられた。



明治四年特命全權副使として岩倉具視等と共に歐米を巡回し、六年歸朝、征韓論に反対した。同年參議兼内務卿に任ぜられた。七年、佐賀の亂を鎮めた。尋いで臺灣事件について清國に赴き、償金五十萬兩を得て還つた。十年西南の役起るや、政務に與つて功が多かつた。十一年五月參朝の途次、加賀の人島田一郎・長連豪等六

人の爲に紀尾井坂で刺殺された。享年四十七。天皇は宸悼し給ひ、右大臣正二位を贈り、幣帛を賜はつた。その教宣に、忠純許國。築鴻業于復古。公誠奉君。贊丕績于維新。剛毅不撓。外樹殊勳。英明善斷。内奏偉功。洵是股肱之良。實爲柱石之臣。茲聞溘亡。曷勝痛悼。仍贈右大臣正二位。併賜金幣五千圓。

後その功を追褒してその嗣子を華族に列し、侯爵を授けられた。明治三十四年更に従一位を贈られた。

【光明磊落】 クウウメイライラク。心があかるくて、物事にとまごぼらぬこと。

「光明」は、明らかなるひかり。又、光りかゞやくこと。

易經の上經に「履帝位而不疚、光明也。」

【磊落】は、胸中の豁達なること。公明快活で、物事にとまごぼらぬこと。心がさつぱりとして、細事に拘泥しないこと。

北史の李謐傳に「辭氣磊落、觀者忘疲。」

【規模宏豁】 キボコウクワツ。心がまへの廣大なこと。又、度量の大きいこと。

「規模」は、又「軌模」とも書く。しくみ。かまへ。かゝ

り。結構。企畫。

説文に「規、法度也、模、法也。」

張衡の歸田賦に「陳三皇之軌模。」

史記の漢高祖本紀に「其規模宏遠矣。」

論語の八佾篇に「管仲之器小哉。」註に「不知聖賢之道、故局量褊淺、規模卑狹。」

「宏豁」は、宏壯にして豁達なること。「宏」は廣い義。

「豁」は廣く開けてゐる義。

【安危利害の上に超脱して】 一身の安危・利害などといふことを少しも心にかけないで。

「超脱」(テウダツ)は、ぬけ出でること。世俗の拘束よりぬけはなれること。

劉克莊の詩に「從今詩律應超脱、盡吸瀟湘入肺腸。」

【泰然】 タイゼン。落ちついて、物事に動ぜぬさま。自若。元史の許衡傳に「家貧、躬耕、處處之泰然。」

【曠懷偉度】 クウウクワイド。度量の極めて廣く大きいこと。

「曠懷」は、ひろい襟懷。廣い度量。

「偉度」は、大いなる度量。大度。

【清濁併せ呑み】 度量が宏大で、人に對して特に好惡の感情を抱くことなく、如何なる階級、如何なる性質の人にも障壁を設けず、能くその人を信じ、その能に任ずることといふ。

海が清水をも濁水をも皆受け入れるに喩へた語。

【赤心を人の腹中に置く】 また「赤心を推して人の腹中に置く。」ともいふ。まごころを以て人に接すること。

「赤心」は、一點の私なき心をいふ。この場合「赤」は空盡にして、物なき意。

後漢書の光武紀に「降者更相語曰、蕭王推赤心置人腹中、安得不死乎。」

【談笑して天下の勢を制し】 笑ひながら、平氣で物語るうちに、天下の形勢をうまくおさへること。

【國家を磐石の安きに置く】 國家を安んずることをいふ。

「國家を泰山の安きに置く」、「國家を富嶽の安きに置く」などいふと同じ意味の語。

「磐石」(バンジャク)は、大石。



正韻に「磐、大石也」

易經の漸卦の疏に「山中石磐紆、故稱磐。」荀子の富國篇に「國安于磐石、壽於旗翼。」

【西郷南洲】 サイガウナンシウ。明治維新の元勳。幼字は小吉、長じて善兵衛といひ、又吉衛と改め、後、言之助隆永と稱し、南洲と號した。「隆盛」といふは維新以後の稱である。



資性朴訥、剛勇果斷、成童の頃から嶄然頭角を顯し、常に兒童をその門下に集めて教授するを樂しんだ。藩主島津齊彬は深くこれを愛し、擢んで近習役と爲した。壯歲江戸に遊び、水戸の藤田東湖の俊傑たるを聞いてこれと交つた。東湖はその人物の大に感心した。嘉永年中京都に入つて、勤王僧月照と交り、近衛關白の密旨を奉じて屢々水戸に往來した。因つて月照と共に頗る幕府に忌まれ、逃れて薩摩に歸つたが、幕吏の追捕が益々急で身を隠す地がなかつたから、遂に相抱いて海に投じ、隆盛だけ甦つた。時に孝明天皇の安政五年(二五二一)十一月十六

日であつた。これより姓名を變じて菊池源吾と稱し、自ら晦ました。世の中があまり騒しいので、藩吏はこれを大島に流した。南洲は大島に流されることこれで三度、因つて大島三右衛門と稱した。居ること二年、藩主久光は上京して國事を謀らうとし、隆盛を召還して樞機に參せしめた。これより京阪の間に往來していろいと畫策し、大久保利通・小松帶刀・阪本龍馬等と勤王黨の連絡を計り、又長藩の木戸孝允と會して薩長聯合を締結し、尊王討幕の大策を企圖した。慶應三年(二五二七)十月薩・長・藝の同盟を結び、小松帶刀・大久保利通と連署して討幕及び王政復古の議を上り、十四日遂に討幕の密教を薩長の二藩に賜うた。この日將軍徳川慶喜は大政を奉還したけれども、王政は名のみ止まつて實を得ることはできぬ。隆盛はこれを受へ、薩・長・藝藩の兵を集め、攝・關及び幕府を廢して新政府を組織した。それより東征軍の參謀として東海道を徇へ、品川に於て幕臣勝安芳と談笑の間に江戸城授受の議を了し、次いで北陸奥羽に出戦し、諸藩が恭順するに及んで凱旋した。功を以て賞典銀二千石を賜はつた。

明治四年正三位に敘し、參議に任ぜられた、五年七月陸軍元帥を兼ね、近衛都督の事を行ひ、次いで陸軍大將に任ぜられた。明治初年の大事件たりし御親兵の編制、廢藩置縣の斷行、軍制の創定、宮廷の改革等は概ね隆盛の威望によつて成つたのである。就中宮廷改革の功が最も大きい。六年征韓論が起るに及ん

で、議合はず、辭して故山に歸り、私學校を起して藩の子弟を教へた。

十年(二五三七)二月、遂に私學校の徒に擁せられて賊名を負ひ、九月二十四日岩崎谷の露と消えた。年五十一。二十二年本官を復せられ、正三位を贈られた。三十五年特に當年の偉勳を追賞せさせられ、その嗣子寅太郎を華族に列し、侯爵を授けられた。

【天地を旋轉するやうな大業】 天地をくるくるとまはすほどの大きな事業。

「旋轉」(センテン)は、(一)くるくるとめぐること。(二)くるくるとまはすこと。こゝは(二)の意。

北史の斛律光傳に「雲表見一大鳥射之。正中其頸。狀如車輪。旋轉而下。乃鳴也。」

【成就】 ジャウジュ。できあがること。しあがること。

漢書の呂后紀に「三年方築長安城。四年就半。五年六年成就。」

【維新の三傑】 明治維新を成就せしめた三人の豪傑。木戸松菊・大久保甲東及び西郷南洲の稱。

【偶然】 グウゼン。物事の期せずして然ること。思ひよらぬこと。

列子に「范氏之黨、以爲偶然。」

後漢書の劉昆傳に「昆對曰、偶然耳。」

【協力】 ケフシン。心を協せること。協力同心すること。書經の畢命に「三后協心、同底于道。」

【戮力】 リクリク。力を戮(アハ)せること。協力。書經の湯誥に「聿求元聖、與之戮力。」

【奇傑】 キケツ。ふうがはりの豪傑。

【勝海舟】 カツカイシウ。徳川幕末の政治家。名は安芳、通稱は鱗太郎。安房守といふ。海舟はその號。

文政二年(二四七九)に生れた。家祿僅かに四十石、辛酸具さに嘗めて夙に文武を學び、蘭學を研究した。安政二年(二五二五)長崎の海軍傳習所に入り、同六年軍艦に搭じて米國に航し、歸來海軍奉行として畫策する所が甚だ多かつた。



慶應三年(二五二七)慶喜の大政を奉還するや、幕臣血氣の徒の中にはこれを喜ばぬ者が多く、江戸城を枕に討死しようとするものが少くなかつた。海舟は深慮遠謀、切に帝國前途を憂へ、近く江戸百萬の生靈を憐み、是等輩々の議を排して慶喜に説き、恭順罪を待たしめ、舊知西郷南洲に會して徐るに



稗便の計を立てた。この時海舟がゐなかつたら、復古の大業はどうなつたかわからない。明治二年(二五二九)七月朝廷に召されて外務大丞に任ぜられ、十一月兵部大輔に轉じ、六年十月参議兼海軍卿に任じ、七年二月正四位に叙せられた。八年四月辭職。二十年伯爵を授けられた。二十一年樞密顧問官に任ぜられ、翌年勳一等に陞叙。三十二年(二五五九)薨じた。年七十七。海軍歴史・開國起原・斷腸の記・水川清話等の著作がある。

【時艱を濟つた】 ジカンをスクつた。その時代に於ける世の中のわづらひを救つた。

【人となり】 うまれつき。もちまへ。たち。性質。天性。

【偽異】 シュンイ。凡人にすぐれ、異なること。俊異・偽異。偽異など、皆同意の語である。

唐書の選舉志に「其八百人、以庶人之偽、異者爲之。」

【卓抜】 タクバツ。他にすぐれて、高くぬけ出でてゐること。卓出。

【炯々】 ケイケイ。するどく光りかどやくさま。きら／＼。

【眼識】 ガンシキ。物事のよしあしを見わける識見。

梁の簡文帝の文に「眼識無明、易傾朱紫。」

【大觀】 タイクワン。廣くすべてを觀察すること。全局を

通觀すること。

賈誼の文に「達人觀之、無物不可。」

【機略縱横】 キリヤクジュウワウ。時に應じて、自由自在にそれ／＼はかりごとをめぐらすこと。

「機略」は、臨機應變の計略。智略。策略。

「縱横」は、(一)たてよこ。(二)かつてきまゝ。むやみやたら。(三)自由自在。こゝは(三)の意。

後漢書の周舉傳に「舉字宣光、博學洽聞、爲儒者所宗、京師爲之語曰、五經縱横周宣光。」

【死生の境】 シセイのキャウ。死ぬか生きるかといふささひめのあやふい場合。

【幕府】 バクフ。(一)將軍の居所。將軍の本營。柳營。(二)將軍の政務を扱ふところ。武家の政府。覇府。こゝは(二)の意で、徳川幕府をさす。

【徳川幕府】 は徳川氏の政府。江戸幕府ともいふ。徳川家康は天正十一年(二二五〇)江戸城に入り、慶長五年(二二六〇)關ヶ原役後兵馬の權を掌握し、同八年遂に征夷大將軍に拜せられて政を行つた。兩來子孫相繼いで十五代

二百六十八年に及んだが、慶應三年(二五二七)慶喜の代

に至つて、職を辭し、幕府はこゝに滅亡した。

【恭順】 キョウジュン。つゝしんでしたがふこと。かしこまつて命に順ふこと。

左傳の昭公四年「慶封唯逆命。」の杜註に「謂性不恭順。」

【塗炭の苦】 トタンのクルシミ。水火の苦といふに同じ。

「塗」は泥、「炭」は火、泥塗を踏み、炭火に墜ちて救ふ者なきが如く民の苦しむをいふ。

書經の仲虺之詰に「有夏昏德、民墜塗炭。」

太平記、一、資朝俊其關東下向の條に「時、濼季に及んで、道塗炭に落ちぬといへども。」

【偉大】 ヒダイ。すぐれて大きいこと。非常に立派なこと。

【國民精神】 英語の(Nationality)の譯。一國民又は一民族に特有の精神。こゝでは、我が日本民族の特有たる忠孝義勇の精神をいふ。

【發揮】 ハッキ。ふるひおこすこと。あらはし出すこと。

易經の上經に「六爻、發揮旁通情也。」

【風雲に乗ず】 龍が風雲を得て天地の間に飛躍する如く、英傑の士が時運に乗じて大功を立てることをいふ。また雲と龍と遇ひ、風と虎と遇へるが如く、明君賢相の相際會するにもいふ。

楊雄の答賓戲に「皆麟風雲之會。」

後漢書の二十八將論に「威能感會風雲、奮其智能。」

易經の上經に「雲從龍、風從虎。聖人作而萬物覩。」

【峻嶽】 シュンガク。「峻岳」とも書く。けはしい山。險峻なる山岳。峻山。

王逸の文に「爵如峻岳之勢。」

【巍々】 ギ、高大なるさま。

論語の泰伯篇に「巍巍乎、舜禹之有天下也。」

平治物語、信賴、信西不快の條に「上、天の巍々に背き、下、人の誹を受けて」

【雲表に聳ゆ】 ウンベウにソビユ。高く雲居の空にそばたつこと。

「雲表」(ウンベウ)は、雲居の空。極めて遙かなる天空。

【嶄然として頭角を現す】 山の高くそびえ立つこと。轉じ



て衆人の中で一きは目立つて優れてゐるさまにいふ。  
「嶄然」(ザンゼン)は、山の高く聳える形容。一きは高くぬけ出てゐる形容。

韓愈の柳子厚墓誌銘に「子厚少 精敏、無不通達、逮其父時雖少年已自成、能取進士第、嶄然見頭角。」

【回天の事業】 クワイテンのジゲフ。非常に大きな事業。

「回天」は、「廻天」とも書く。天をめぐる主義。衰勢を挽回すること。時勢を變ずること、又非常に大きな勢力を形容していふ。

唐書の張玄素傳に「張公論事、有回天之力。」

太平記、二十七、左兵衛督師直を誅せんと欲する條に「義旗雲龍を靡かして、回天の機を露はしける。」

同三十五、尾張小河東池田の條に「一揆馳せ加はつて、廻天の勢を振ふ。」

【圓滿なる成功を告ぐ】 事業の完全に、立派に出來あがること。

「圓滿」(エンマン)は、十分に満ち足ること。缺けたところのないこと。

「成功」(セイコウ)とは、事業の成就すること。事仕の出

來あがること。

書經の禹貢に「禹錫ニ圭、告厥成功。」

【上下心を一にして云々】 明治元年三月十四日、明治天皇は紫宸殿に御し、公卿諸侯を率ゐて天神地祇を祭り、國是五箇條を以て天地神明に誓ひ給うた。その御誓文に、

- 一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決ス可シ
- 一、上下心ヲ一ニシテ盛ンニ經綸ヲ行フ可シ
- 一、官武一途庶民ニ至ルマテ各々其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメムコトヲ要ス

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基ク可シ  
一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起ス可シ  
我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地神明ニ誓ヒ大ニ斯ノ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立テントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

これ實に有名なる五箇條の御誓文である。明治の聖世の大發展は實にこの御誓文の御趣旨の實現に外ならぬといつてよい。

【經綸】 ケイリン。「經」とは絲を治める場合にこれを引く

ことを謂ひ、「綸」とはこれを理めることをいふ。こゝは、轉じて、天下を營み治める義に用ひる。

易經、屯卦の象傳に「君子以經綸。」

中庸に「唯天下至誠、爲能經綸天下大經、立天下之大本、知天地之化育。」

【國是】 コクゼ。國家の是とする公論、即ち國家の執る可き大方針をいふ。

劉向の新序に「莊王問於孫叔敖曰、寡人未得所以爲國是也。孫叔敖曰、國之有是、衆非之惡也、臣恐王不能定也。」

【世界の競争場裏】 セカイのキャウサウチャウリ。世界全國の人々の互に優劣勝敗を競うてゐる場處。

【國勢を張る】 國家の勢力を擴張すること。國威をかどやかすこと。

【景慕】 ケイボ。あふぎしたふこと。

梁の簡文帝の文に「矧彼前賢、寧忘景慕。」

柳宗元の詩に「擬情空景慕。」

【彼等の墓門既に苔むせる今日】 木戸・大久保・西郷等諸

偉人の墓の門に、もはや苔が生えてゐる今日。薨じて多くの年月の経過してゐることをいふ。「墓木已拱」などいふと同じ修辭法である。

「墓門」(ボモン)は、墓所の入口。

詩經の國風に「墓門有棘、斧以斬之。」

【雄偉なる人格】 すぐれて立派な人がら。

「雄偉」(ユウキ)は、(一)雄壯にして偉大なること。すぐれてたくましいこと。(二)すぐれて立派なこと。こゝは(二)の意。

【赫々たる功業】 カク／＼たるコウゲフ。さかんな功業。

「赫々」は、光りかゞやくさま、功名などの殊にいちじるしいさまにいふ語。

詩經の大雅に「明明在下、赫赫在上。」

荀子に「無赫赫之事者、無赫赫之功。」

韓愈の與于襄陽書に「高材多戚々之窮、盛位無赫赫之光。」

【國難に殉ず】 國難のために一命を果すこと。

「國難」は、國家の災難。一國の危難。

曹植の詩、白馬篇に「捐軀赴國難。」

「殉」(ジュン)は、(一)死者のあとを追つて自殺すること。



おひばらを切ること。(二)その物事の爲に身命を投げ出すこと。こゝは(二)の意。

書經の伊訓に「殉<sub>ス</sub>於貨色<sub>ニ</sub>」

【志士】 シシ。志を邦國に存して、國家民人の救済を理想とする人。

論語の衛靈篇に「志士仁人無<sub>ク</sub>求<sub>テ</sub>生<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>害<sub>ス</sub>仁<sub>ヲ</sub>、有<sub>リ</sub>殺<sub>シ</sub>身<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>成<sub>ス</sub>仁<sub>ヲ</sub>」

陸機の文に「志士多<sub>ク</sub>苦<sub>シ</sub>心<sub>ヲ</sub>」  
孟子の萬章下に「志士不<sub>レ</sub>忘<sub>ル</sub>在<sub>ニ</sub>溝壑<sub>ニ</sub>」

本文にいふ志士とは、彼の安政の大獄に井伊直弼の爲に刑せられた橋本左内・梅田源次郎・頼三樹三郎・吉田松陰・日下部伊三次・安藤帯刀・鶴飼幸吉等を指したのであらう。尙、維新の志士としては、高山彦九郎・山縣大貳・坂本龍馬・佐久間象山・平野國臣・僧月照・高杉晋作等其の他澤山にある。

【追憶】 ツキクワイ。あとより思ひ出すこと。追憶。追想。

【奉公の赤誠】 君國の爲に力をいたすまごころ、

「奉公」(ホウコウは)(一)おほやけに仕へまつること。(二)

君國のために力をつくすこと。(三)主人につかへること。こゝは(二)の意。

教育勅語に、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉<sub>シ</sub>以テ天壤無窮ノ皇運を扶翼スヘシ」

後漢書の祭遵傳に「憂<sub>レ</sub>國奉<sub>レ</sub>公<sub>ニ</sub>」

「赤誠」(セキセイ)は、まごころ。まこと。至誠。

韓偓の詩に「暫時勝下何須<sub>レ</sub>恥<sub>シ</sub>。自有<sub>ニ</sub>蒼々鑿<sub>ニ</sub>赤誠<sub>ニ</sub>」

【敢爲の志氣】 おしきつて、難局に當らうとする意氣。

「敢爲」(カンキ)は、おしきつて物事をやりとほすこと。

敢行。決行。

「志氣」は事を成さうとする意氣。こゝろざし。

禮記の孔子問居に「志氣塞<sub>テ</sub>于天地<sub>ニ</sub>」

【轉々】 ウタ、。(一)いよゝゝ。ますゝ。(二)そゞろに。何となく。

【景仰】 ケイカウ。ケイギャウ。徳を仰ぎ慕ふこと。

詩經の小雅に「高山仰止、景行、行止。」

金史の熙宗紀に「孔子雖<sub>ニ</sub>無位<sub>ニ</sub>其道可<sub>レ</sub>尊<sub>ニ</sub>使<sub>ニ</sub>萬世<sub>ニ</sub>景仰<sub>ニ</sub>」

【吉田松陰】 ヨシダシウイン。徳川幕末の勤王家。長州

の藩士。天保元年(二四九〇)生。本姓は杉。叔父吉田氏を繼いだ。通稱大次郎。後寅次郎と改めた。名は矩方、字は義卿、別號二十一回猛士。

嘉永四年(二五一二)始めて江戸に遊び、時事に感じて房總の海岸を巡視し、佐久間象山にその説を聞き、意氣投合してその教を受けた。

松陰は國事を畫策するには先づ海外諸國の情況を知るの必要あることを信じ、露艦に投ぜんとして長崎に行き、又安政元年(二五二一)米艦の下田に來たときこれに乗らうとして共に果さず、幕吏の爲に捕へられて藩に檻送せられ、萩城の野山の獄に禁錮せられ、翌二年獄を出されて家に錮せられた。三年塾を萩の松本に開いて家學を教授した。これぞ有名な松下村塾である。秀才の士が多くその門に集まり、藩の學校は爲に空虚になつた位である。



起つたため、幕府は命じて勤王の士を捕へた。松陰も亦梅田雲

嘗て村塾の聯に書した語に、「自<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>讀<sub>ニ</sub>萬卷<sub>ニ</sub>書<sub>ヲ</sub>焉<sub>シ</sub>得<sub>レ</sub>爲<sub>ニ</sub>二千秋<sub>ノ</sub>人<sub>ニ</sub>。自<sub>レ</sub>非<sub>レ</sub>輕<sub>ニ</sub>一己<sub>ノ</sub>勞<sub>ヲ</sub>焉<sub>シ</sub>得<sub>レ</sub>致<sub>ニ</sub>兆兆<sub>ノ</sub>民<sub>ニ</sub>安<sub>ニ</sub>こと。蓋しこれは村塾の教育主義である。

五年勤王攘夷の論が大いに

濱の事に關係して家に錮せられ、次いで野山の獄に下された。六年(二五一九)五月江戸に護送せられ、十二月二十七日斬に處せられた。年三十。門下から多くの人材を出した。その著書には、幽室文稿・武教講録・講孟劄記・留魂錄等がある。

明治二十二年四月、正四位を追贈せられた。

【橋本景岳】 ハシモトケイガク。徳川幕末の志士。越前の藩士。名は綱紀。字は伯綱。左内はその通稱、黎園又は景岳と號した。

夙に大阪に遊び、緒方洪庵に従つて醫を學び、歸つて父に繼いで藩醫となつた。後藩命を以て江戸に遊學した。藩侯慶永は、藩の學校を改革するに當つて、醫を免じ、技擯してその事を幹せしめた。乃ち藩の學制を改め、洋法の學科を加設し、宿弊が全く革まつた。

夙に尊王攘夷の説を持ち、家定の後に慶喜を立てて將軍となさんと謀り、京師に出て公卿の間に斡旋し、事殆ど成らうとして、井伊直弼の爲に捕へられて獄に下り、終に救書を要請したといふ罪に坐して、安政六年(二五一九)十月七日江戸の小塚原に斬られた。時に年僅かに二十六。

左内は博學にして、識見拔群、且機略に富み、風骨清爽、辯論竹を裂くが如く、凛烈の氣直に人の肺肝を刺すものがあつたといふ。しかも容姿は楚々として婦女子の如く、心事亦天真玲瓏、



恰も春風の如く、極めて親しみ易い特性を有してゐたといふ。その獄中の作に、「二十六年如夢過、顧思平昔感滋多、天祥大節胸心折、土室獨吟正氣歌。」といふがある。

明治二十四年十一月正四位を贈られた。

魏志の陶謙傳の註に「郡守張磐同郡先輩、與謙父交友。」吳志の關澤傳に「澤州里先輩、丹陽唐固、亦修身積學、稱爲儒者。」

【藤田東湖】 フチタトウコ。徳川幕末の勤王家。名は彪。通稱は虎之助、後誠之進と改めた。水戸藩儒藤田幽谷の子。文化三年(二四六)生。



少壯の頃武藝を嗜んだが、後、節を折つて書を讀んだ。烈公齊昭が封を襲ぐに及び、側用人に擢んでられ、君臣遭遇、水魚の如くであつた。

弘化元年(二五〇四)烈公が諱を幕府に獲るや、東湖も亦役を免ぜられて、小石川藩邸内に贅居を命ぜられた。二年小梅別邸に徙された。三年十二月贅居を赦されて水戸に歸り、四年致仕して宅愼を命ぜられた。

嘉永六年(二五三三)、再び側用人となつて學校奉行を兼ねた。當時米艦入航以來、開國鎖港の論が天下に喧しかつた。而して水戸は常に志士渴仰の中心となり、東湖の許に來つて教を乞ふものが甚だ多かつた。安政二年(二五二五)十月二日江戸に大地震があつた、東湖は一旦難を遁れたが、母を救ふために再び家に入り、遂に棟木に壓せられて卒した。母はその爲に免るゝことを得たといふ。時に年五十。

回天詩史・常陸帶・弘道館記述義・東湖遺稿等の著がある。

明治二十二年十一月正四位を追贈せられた。

【同輩】 同じ身分のともがら。等輩。

【才學】 サイガク。才氣と學問。

漢書の應奉傳に「皆有才學。」

源氏物語、繪合の卷に「さいかくといふもの、世にいと重くするものなればにやあらむ。」

【器識】 キンキ。器量と識見。

晉書の張華傳に「器識弘曠、時人罕能測之。」

【南洲は三十歳云々】 南洲と景岳とが初めて江戸に會したのは、安政二年(二五二五)十二月で、藤田東湖の邸に於てである。されどこの時は、兩人深く相知るといふに至らずして別れた。

翌月景岳は自ら薩藩の邸に南洲を訪問し、時事に關する意見を叩いた。南洲は景岳の柔和な姿を見て、共に天下の大事を語るに足る偉丈夫でない誤解し、冷淡に應じたが、景岳は滔々として、その意見を聞陳し、尋問追究極めて痛切であつたので、南洲は深くその才識に服し、翌日直に景岳を訪うて、兄弟の約を結び、共に國事に力を致すやうになつた。

【卓越】 タクエツ。たかくこえすぐれること。他にぬきんですぐれること。卓絶。

晉書の華譚傳に「未獲出群卓越之倫。」

【睿智】 エイチ。「睿智」とも書く。通ぜざるところなく、又知らざるところなきこと。最も深遠な知識。

易經の繫辭、上に「古之聰明睿智、神武而不殺者天。」

【靈覺】 レイカク。靈妙なる才覺。すぐれてさとい才のはたらき。

【國家の大計】 國家の經綸する大きなはかりごと。

【大計】 は、大きな計畫。大きな計略。

北史の崔浩傳に「帝勅諸尚書、凡軍國大計、卿等所不

能決、皆先諮浩然後施行。」

【政界の大波瀾】 セイカイのダイハラ。政治界にまきおこる大波。

【政界】 は、政治の社會。政海。「瀾」は、大波。

【手腕を試みた】 うでためしをした。

【手腕(シュワン)】 は、うで。かひな。轉じて、うでまへ。技倆。手なみ。わざまへ。こゝはその意。

【一期】 イチゴ。人間の一生。一生涯。一代。

徒然草に「大やう人を見るに、すこし心あるきはは、皆このあらしにてぞ一期は過ぐめる。」

保元物語、爲義最期の條に「人の身には、一期の終を以て一大事とせり。」

諸曲、安宅に「二期の浮沈極まりぬ。」

【刑場の露と消えた】 處刑せられて死んだことをいふ。

景岳は前「橋本景岳」の條下に述べたとほり、安政六年(二五二五)十月七日、江戸の小塚原で斬られた。

【小塚原】(コヅカッバラ)は、東京市千住區南千住にある地。江戸時代に刑場のあつた所で、舊千住街道に沿ふ。



「刑場」(ケイヂャウ)は、死刑を執行する場所。しおきば。

【知己】 チキ。善くおのれを知つてゐる人。

史記の刺客傳に「士爲知己者、女爲說己者、容。」  
同傳に「政(刺客)將爲知己者、用上。」

【非命の死】 ヒメイのシ。天命ならずして死ぬこと。災害又は負傷などで死ぬことをいふ。横死。

孟子の盡心上に「盡其道而死、者正命也。桎梏死者、非正命也。」

【國士】 コクシ。一國の名士。國中以最もすぐれた士。

史記の刺客傳に「豫讓曰、至知伯國士、遇我、我故國士報之。」

【典型】 テンケイ。古くは「典刑」と書いた。のり。かた。てほん。

詩經の大雅に「雖無老成人、尙有典刑。」  
國語の鄭に「修典刑以守之。」

【青史】 セイシ。歴史。史乘。記録。

宋文鑑、范質の詩に「南朝稱八達、千載穢青史。」  
後漢書の吳祐傳に「祐年十二、隨從到官。恢欲殺青簡。」

以寫中經書。註に「殺青者以火炙簡令汗、取其青易書、復不汗、謂之殺青、亦謂汗簡、義見劉向別錄也。」  
「恢」は祐の父。

【忠愛】 チュウアイ。(一)忠實と仁愛。(二)まごころをつくして愛すること。(三)忠君と愛國。こゝは(三)の意と見るべきであらう。

禮記の玉制に「悉其聰明、致其忠愛、以盡之。」

【英發】 エイハツ。すぐれあらはれること。又、すぐれて利發なること。

南史、梁の孝元帝紀に「帝明聰俊朗、天才英發出、言爲論、音響若鐘。」

【大義】 タイギ。五倫の道、就中君臣の大道を指す。

易經の上經に「歸妹、天地之大義也。」  
易經の上經に「男女正、天地之大義也。」

左傳の隱公四年に「石碯、使其宰馮羊肩、殺殺石厚于陳。君子曰、石碯純臣也、惡州吁而厚與焉、大義滅親、其是之謂乎。」

「石厚」は石碯の子。

【水火】 スキクワ。水と火。(一)勢の盛んなこと、水のあふ

【本領】 ホンリヤウ。

(一)本來の領地。舊來の知行所。本知。(二)本來のもちまへ。特色。特性。こゝは(二)の意。

【一小私塾】 イッセウシジユク。松下村塾を指す。この塾は長門萩城の外、松本村にあつた私塾で、地名によつて名づけたのである。

初め吉田松陰の叔父玉木文之進が、諸生を集めてこゝに教授し、その堂に松下村塾といふ額をかけたが、玉木氏が仕に就くに及んでこれを廢した。

松陰の外叔父久保氏もまた子弟を會して業を授け、且その塾號を襲用した。

安政三年(二五一六)七月、松陰はなほ塾居中であつたが、來つて教を乞ふ者が多いので、家學山鹿流の軍學を授けんことを藩に乞ひ、許された。時に松陰年二十七。尊王攘夷の義を教へ、忠孝節義を以て勵まし、大勢を挽回する方、富國強兵の術など、すべて時務に適切なことを以て主要となした。

自ら作つた松下村塾の記に、「抑、人之所最重者、君臣之義也。國之所最大者、華夷之辨也。今天下何如時也、君臣之義、不講六百餘年、至近時、并華夷之辨、又失之。而天下之人、且安然爲得所。生神州之地、蒙皇朝之恩、內失君臣之義、外遺華夷之辨。學之所以爲學、人之所以爲人、其在哉。」

れ火のもゆるが如きをいふ。(二)忿怒の勢の甚しいのを水火に喩へていふ。(三)水と火とは日用缺くべからざるものなるをいふ。本文は第一の用例。今その各の出典を次に挙げよう。

三國蜀志、魏延傳に「延性矜高、當時皆避下之。惟楊儀不假借延、延以爲至忿有如水火。」

潜夫論に「邪之與正猶水與火、不同原、不得並盛。孟子の盡心上に「民非水火、火不生活、昏暮叩人之門戶、求水火、無弗與者。」

【身を殺して仁をなす】 一身を犠牲として仁の徳を全くする義。

論語の衛靈公篇に「子曰、志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁。」註に「志士有立志之士、仁人則成德之人也。理當死而求生、則於其心有不安矣。是害其心之徳也。當死而死、則心安、而徳全焉。」

【志士】 シ、。國家又は人道のために身を捨てて盡くさうとする人。

孟子の萬章上に「志士不仁、在溝壑。」  
史記の刺客傳に「趙國志士聞之、皆爲涕泣。」



その塾中の模様は、高杉晋作に與へた書によつて知られる。それは「隔日左傳八家會讀。勿論塾中常居。七つ過會讀終る。夫より出又は米春き與<sup>レ</sup>在塾生<sup>ニ</sup>同<sup>シ</sup>之<sup>ヲ</sup>。米春大得<sup>ニ</sup>其妙<sup>一</sup>。大抵兩三人、同上<sup>リ</sup>、會讀しながら春<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。史記など二十四葉讀む間米精げ畢<sup>ル</sup>。亦一快なり。」

といふのである。村塾師弟講習の状が見えるやうである。又日本近世教育史には、

「松下村塾、吾人はこの名を聞く毎に、教育上、個人の勢の偉大なるに想ひ到るを禁ずる能はず。松陰が村塾を創めし時、歳纔に二十六。その死三十歳を去ること四年に滿たず。村塾矮にして陋。室唯二、六疊と八疊とのみ。先生、居常弟子と共にその中に起臥し、飲食し、教授し、談論せり。かゝる少壯の身を以て、かゝる矮屋の下に於て、かゝる短日月の間に、濟々たる多士を收容し、養成し、感化して、以て維新の宏業を翼賛するに至らしめたるは、殆ど一の奇蹟なるもの如し。如今廊廟棟梁器<sup>多</sup>。是松門受<sup>レ</sup>教人。」といふもの、決して虚言にあらざるを見るなり。昔唐の興りし時、賢臣多く文中子の門に出でたりと稱す。然れども、これを松陰が感化の大なるに比すれば、猶その及ばざるものあるを覺ゆ。云々」

【熱誠】 ネットセイ。熱情より發した至誠。熱烈な真心。

【輩出】 ハイシュツ。人物などのうち續いて世に出ること。續々と出てくること。

後漢書の蔡邕傳に「名臣輩出<sup>ル</sup>、文武並興<sup>ル</sup>。」

【急先鋒】 キフセンボウ。急に敵におしよせる軍隊の先手。こゝは急進して王政維新斷行の局に當つたものを軍の先鋒にたとへていつたのである。

【五人の大臣】 伊藤博文・山縣有朋・山田顯義・品川彌二郎・野村靖の五大臣をさしていふ。

「伊藤博文」(イトウヒロブミ)は、明治時代の政治家、初名利助。後俊輔と改めた。春嶽浪浪閣主人はその號。周防國の農林十藏の子。萩に出て伊藤氏を繼いだ。吉田松陰に従つて松下塾に學び、後、木戸孝允に従つて國事に奔走した。明治四年岩倉具視に従つて歐米に差遣せられ、六年歸朝。征韓論の起るやこれに反對して活躍した。十四年參議に拜せられた。同年大隈重信が野に下つたので、政府の實権は博文に歸した。翌年制度取調の爲再び歐米に赴き、十六年歸朝した。十八年最初の内閣總理大臣となつて以來、内閣を組織すること前後四回。又最初の樞密院議長に任ぜられ、憲法の起草に従ひ、三十六年立憲政友會總裁となつた。三十八年韓國統監となり、日韓融和に關して功績が多かつた。明治四十二年滿洲漫遊の途、哈爾濱で韓人に狙撃せられて斃じた。年六十九。國葬の禮を以て大森郊外谷垂の墓地に葬られた。明治十八年伯爵、日清戰役後侯爵、日露戰役後公爵に陞叙せられ、大勳位に敘し、菊花章頸飾を授けられた。

十九。

【品川彌二郎】(シナガハヤジラウ)は明治時代の政治家。尊攘堂主人又は念佛庵主と號した。長門藩士品川彌市右衛門の長男。吉田松陰の門に學び、氣概を以て知られた。維新の際國事に奔走し、爾來内務大書記官・農商務大輔・ドイツ大使・宮中顧問官等に歴任し、勳功を以て子爵を授けられた。明治二十四年(二五五一)松方内閣の内務大臣に任ぜられたが、翌年これを辭し、樞密顧問官に拜せられた。明治三十三年(二五六一)薨。年五十八。

【野村靖】(ノムラヤスシ)は政治家。舊山口藩士。維新の際國事に奔走して功が多かつた。明治以後、宮内權大丞・外務大書記官等となり、岩倉大使に隨行して歐米を歴遊した。九年全權辦理大使黒田清隆に隨つて朝鮮に赴いた。後、神奈川縣令・逓信次官・駐佛特命全權公使・内務大臣・逓信大臣・樞密顧問官・内親王御教育掛長等に歴任し、勳功を以て子爵を授けられた。明治四十二年(二五七〇)薨。年六十八。

【英偉なる人物】 すぐれてえらい人。

「英偉」(エイキ)は、すぐれてえらいこと。英俊。

晉書の陳頤傳に「夫英偉大賢、必出于山澤<sup>ニ</sup>。」

【少壯期】 セウサウキ。年の若いとき。二十歳前後のときをいふ。

前漢の武帝の秋風辭に「少壯時<sup>分</sup>、奈老<sup>何</sup>。」

「山縣有朋」(ヤマガタアリトモ)は明治時代の功臣。政治家且軍人。槍術をよくし、且和歌に達してゐた。長門國萩の人。幼名辰之助、後小介、狂介。安政五年(二五一八)吉田松陰の松下村塾に學び、高杉晋作の奇兵隊に入つてその參謀となり、諸所に募軍を破つて薩長二藩の聯合を圖り、幕政を倒すに與つて力が多かつた。明治二年(二五二九)西郷從道等と外遊して歸朝、兵權の統一を企て、五年遂に徵兵令の發布を見るに至つた。十七年伯爵を賜はり、十八年内務大臣に任ぜられた。のち市町村制を定めて地方の自治制を確立した。二十二年第一次山縣内閣を組織したが、翌年これを辭した。三十一年元帥號を賜はつた。この年第二次山縣内閣を組織し、文官任用令を定めた。三十七八年日露の役、帷帳に參し、功を以て公爵に陞叙せられた。後樞密院議長に拜せられた。四十二年伊藤博文の薨去後は、謂はゆる元老として、その薨去に至るまで元老政治を獨裁した。大正十一年二月小田原の別業古稀庵に薨去。年八十五。國葬の禮を以て豊島が岡に葬られた。

「山田顯義」(ヤマタアキヨシ)は明治維新の功臣。萩藩士。戊辰の役に功を樹てた。明治四年(二五三一)陸軍少將に任じ、岩倉全權大使に隨行して歐米に遊んだ。六年特命全權公使として清國に駐在した。十年西南の役に出征し、十一年中將に昇つた。十二年參議に拜せられ、工部卿を兼ねた。尋いで法典の制定に與り、十八年司法大臣に任ぜられた。後、功を以て伯爵を授けられ、樞密顧問官に拜せられた。二十五年(二五五二)薨。年四



文選の古詩に「少壯不努力、老大徒傷悲。」

【感歎】 カンタン。心に感じて歎賞すること。感心してほめはやすこと。

唐書の蘇萬均傳に「學生感歎。」

【昭代】 セウダイ。明らかに治まる御代。太平の御代。

褚亮の詩に「聲華誦昭代、形影委窮塵。」

【起因】 キイン。おこり。はじまり。起原。原因。

【任務】 ニンム。おのれの責任を以て取り扱ふべき事務。やくめ。つとめ。

【先蹤】 センシウ。既往の事蹟。先例。前例。

保元物語、新院御所各門々固の條に「和漢の先蹤、朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば」

平治物語、光頼頼參内の條に「先蹤もいまだ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり。」

【頼山陽】 ライサンヤウ。名は襄、字は子成、通稱久太郎山陽と號した。

安藝國竹原の人。幼より學を好み、殊に史學を修め、漢文・漢詩をよくした。十八歳のとき叔父香坪に従つて東遊し、尾藤二洲の塾に在ること一年、才學が日に進んだ。文化七年（二四

七〇）、菅茶山がその塾を督せんことを請うたので、乃ち備後の神邊に赴いたが、明年去つて京都に出で、遂にこゝに止つた。文政元年（二四七八）二月、父春水の大病忌に當つて廣島に歸り、喪が終つてから鎮西に遊び、豊筑より肥に入り、後、薩・隅を極め、明年廣島に歸つた。

文政八年以後京都に定住し、その居を山紫水明處と名づけた。蓋しその家居が鴨川に臨み、東山に對してゐたからである。

天保三年（二四九二）肺を病んだ。折しも日本政記の編述中なので、病を力めて筆を執つたが、稿未だ全く成らずして同年九月薨じた。享年五十三。その著に日本外史・日本政記・通義・春秋講義・先友録・文集・書後題跋・日本樂府・詩鈔・同遺稿等がある。就中日本外史は山陽が平生の心血を凝いだ名著で、明治維新革命の導火線となつた書物だといはれてゐる。

因にいふ、「十有三春秋云々」の詩は、山陽詩鈔の開卷第一に出てゐる。  
明治二十四年十二月正四位を追贈せられ、昭和六年更に從三位を追贈せられた。

【志學の齡】 シガクのヨハヒ。十五歳。

論語の爲政論に「子曰、吾十有五而志于學、三十而立、四十而不惑、五十而知天命云々。」

【十有三春云々】 「自分は今や十三歳の少年となつた。年月の流れの早さは、さながら水の流れのやうである。こ

の天地は始もなく、終もなく永久無限につゞくが、人生

には生死があつて、この身とても、いつ死ぬかわからぬ。どうか古のえらい人々にあやかつて、たとひこの身は死んでも、その名を永久に歴史にのこしたいものである。」

「春秋」は春と秋。轉じて、よはひ。年齢。

戰國策、秦に「王之春秋高。」

漢書の劉澤傳に「太后春秋長。」

「逝者已如水」は、論語の子罕篇の「子在川上曰、逝者如斯矣。不舍晝夜。」より出た句である。

「千載」は千歳に同じ。千年。轉じて永久の歲月。こゝはその意。

淮南子に「鶴壽千歳以極其游。」

晉書の慕容雲載記に「千歳一時、公焉得辭也。」

【發達】 ハッタツ。一)發育して完全な形體に達すること。のびたつこと。成長。二)進歩して完全な域に達すること。こゝは二)の意。

【經路】 ケイロ。徑路・逕路など皆同意。みち。こみち。

すぢみち。

易經に「長爲山、爲徑路。」

釋名に「經、徑也、如徑路無所不通、可常用也。」

【感憤】 カンプン。感じて憤發すること。感激。

【興起】 コウキ。一)おこりたつこと。二)感じて意氣のふるひ立つこと。こゝは二)の意。

孟子の盡心下に「百世之下、聞者莫不興起也。」

【鄙陋】 ヒロウ。いやしいこと。下品なこと。

五代史の雜傳に「狀貌堂堂、而不通文字、所爲鄙陋。」

【活理想】 クワツリサウ。生き／＼とした理想。

「理想」は英語 Idea の譯語。意志が努力して到達すべき最高の目標。眞・善・美等はこれである。理想は意志に従ひ行爲によつて實現さるべきものであるが、その完全な實現は人間には許されない。普通には、より具體的に解せられ、具象的模範をさしていふ「學者になるのが理想である。」などいふ類。

【向上】 カウジャウ。現在の状態若しくは位地を不完全又は不満足として、更に高尚善美なる理想を望み、これに



向つて専心努力すること。

莊子人間世の註に「無以進者、言更無向上者也。」

【發展】 ハッテン。發達展開の略。のびひろがること。榮えゆくこと。

【天才】 英語の Genius に當る。精神活動の或方面が特に先天的に通常の人よりも卓越してゐることをいふ。天性の才智といふ意。

嵇康の絶交書に「不欲以枉其天才。」

【凡庸】 ボンヨウ。すぐれたところのないこと。つねなみ。普通。

史記の周勃世家に「才能不過凡庸。」

【孟子】 マウシ。支那戰國時代の賢人。名は軻、字は子輿又、子車・子居ともいふ。鄒の人。その先は蓋し魯の公孫孟孫氏の出。後、鄒に移つた。孟子の生歿年代に關しては數説あつて一定しないが、周の安王の十七年前後に生れて、赧王の十年頃歿したらしい。三歳にして父を



に生れて、赧王の十年頃歿したらしい。三歳にして父を

喪ひ、慈母三遷の教養を受けて遂に大賢となるに至つたといふ。業を子思の門人に受け、子思の學説を繼承し、新に仁義王道を唱へた。

四十歳以前は専ら學を講じたが、業成るや、四十歳にして鄒の穆公に仕へ、尋いで諸侯に傳食し、五十歳にして梁に遊び、久しからずして去り、六十歳にして齊に行き、客卿として留ること十年。七十歳の頃齊を去つて宋・薛等に行き、尋いで鄒に歸り、八十餘歳で歿した。その著書に孟子七篇がある。

史記列傳に「孟軻、魯人也。受業于思之門人。道既通、游事齊宣王。宣王不能用。適梁。梁惠王不果所言。則見以爲迂遠而測於事情。當是之時、秦用商鞅、楚魏用吳起、齊用孫子田忌、天下方務於合從連衡、以攻伐爲賢、而孟軻乃述唐虞三代之德、是以所如者不合。退而與萬章之徒序詩書、述仲尼之意、作孟子七篇。」

【聖人は百世の師なり云々】 孟子の盡心下に出てゐる。

孟子曰、聖人百世之師也。伯夷、柳下惠是也。故聞伯夷之風者、頭搶地、懦夫有立志、聞柳下惠之風者、薄天敦、

鄙夫寬、奮百世之上、百世之下、聞者莫不興起也。非聖人不能若是乎。而況於親炙之者乎。

大學章句の序に、聖人を以て「聰明睿智、能盡其性者」とあるのは、非常の知識を具有してゐるといふ意。

中庸に「從容中道聖人也」といひ、孟子が「大而化之、之謂聖」といひ、又「聖人百世之師也」といつたのは、その徳業の偉大で、感化の尋常ならぬことをいつたのである。

樂記に「作者、之謂聖」といひ、易に「聖人作而萬物觀」とあるのは、事業家として聖人を見たのである。

要するに、聖人は大悟徹底せる大智者であると共に、仁愛の心が天の如く廣大で、世界萬衆を見ること昆弟赤子の親の如く、兼ねて大事業家でなくてはならぬ。

【伯夷】 ハクイ。

史記列傳に「伯夷、叔齊、孤竹君之二子也。父欲立叔齊、及父卒、叔齊讓伯夷、伯夷曰、父命也。遂逃去。叔齊亦不肯立而逃之。國人立其中子。於是伯夷、叔齊聞西伯昌善養立而逃之。國人立其中子。於是伯夷、叔齊聞西伯昌善養

老、盡往歸焉。及至、西伯卒。武王載未主、號爲三王、東伐紂。伯夷、叔齊叩馬而諫曰、父死而不葬、爰及于戈、可謂孝乎。以臣弑君、可謂仁乎。左右欲兵之。太公曰、此義人也、扶而去之。武王已平殷亂、天下宗周、而伯夷、叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之。及二歲且死、作歌。其辭曰、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣。神農虞夏忽焉殛兮、我安適歸矣。嗟徂兮、命之衰矣。遂餓死於首陽山。」

【柳下惠】 リウカケイ。名は展獲、一名は禽。周代の人。清貧に甘んじ、柳下に居り、徳が一世に高かつた。一夜一婦人が來つて宿泊を乞うたとき、同食して曉に至り、人敢て怪しむものがなかつたといふ。死後、惠と諡した。故に柳下惠といふ名で世に知られてゐる。

論語の微子篇に「柳下惠爲三士師三黜。人曰、子未可去乎。曰、直道而事人、焉往而不三黜。枉道而事人、何必去父母之邦。」

【頑夫】 グワンブ。頑鈍のをとこ。貪慾の男。事理を解せぬをとこ。

【廉】 レン。潔白にして正直なること。廉潔・清廉などと



熟する。

書經の阜陶謨に「簡而廉。」

史記の蘇秦傳に「廉如伯夷、義不爲孤竹君之嗣。」

【懦夫】 ダフ。懦弱なをとこ。いくぢなしの男。

【薄夫】 ハクフ。人情の刻薄なをとこ。薄情なをとこ。

【敦く】 アツク。「敦」は音トン。人情の厚いこと。敦厚、敦朴などと熟する。

【鄙夫】 ヒフ。心のせまくいやしいをとこ。心術の鄙陋なをとこ。

【寛】 クァン。心のひろく大きいこと。寛大・寛弘・寛容などと熟する。

簡野道明氏は、その著孟子通解で、本文を左の如く解説してをられる。参考の爲、左に、

孟子曰く、古の聖人即ち智徳のすぐれて高き人は、その徳澤遠く後世にまでも傳はりて亡びず、能く己の善を以て人の志意を興起し、人をして善を改めて善に還らしむ。特に當代の師表たるのみならず、實に百世の後までも師表たるなり。今これに當るべき人を求むれば、則ち伯夷・柳下惠是れなり。故に伯夷は既に死して世にあらずといへども、今に至るまで伯夷の行爲の清らかなる風を傳へ聞く者は、頑鈍の夫と雖も、亦化して廉潔

の操を守りて、苟も取らざるやうになり、氣の懦弱なる夫と雖も、亦變じて志を立つるありて、苟も一時の安を偷まざるやうになるなり。柳下惠も既に死して世にあらずと雖も、今に至るまで柳下惠の行爲の和げる風を傳へ聞く者は、人情の刻薄なる夫と雖も、亦化して敦厚の行あるに至り、心の狭く鄙しき夫と雖も亦變じて寛容の量あるに至るなり。それ夷、惠の二子は、百世の上に奮ひ起り、年を経ること誠に久遠なり。然るに百世の下その遺風を聞く者、皆感動して奮發せざるものなし。聖人清和の徳の至極せるにあらざるよりは、能く人を感化せしむること此の如きに至らんや。百世の下、唯その遺風を聞く者すら、尙且つ此の如く然り。況やその時に生れて、親しくその教化に熏灸するものに於ては、その感發當に如何なるべき。」

【鼓舞】 コブ。鼓を打つて舞はしめる義から出た語。人の氣を奮ひ起さしめること。

易經の繫辭に「鼓之舞之、以盡神。」

楊子に「鼓舞萬物者其唯風雷乎。」

【激勵】 ゲキレイ。激しはげますこと。又、感激して勵むこと。

史記の范雎傳に「欲以激勸應侯。」

唐書の吳兢傳に「宋璟等激勵苦切、故轉禍爲忠。」

【感化】 カンクァ。感じて自然に善道に移らしめること。

後漢書の陳擘傳に「爲說通義以感化之。」

【指導】 シダウ。指道とも書く。教へみちびくこと。指教。

漢書の路温舒傳に「吏治者利其然者、指道以明之。」

【微賤】 ビセン。地位・身分のいやしいこと。卑賤。

管子の版法解に「治不盡理、則疏遠微賤者、無所告譴。」

【自棄】 ジキ。自らその身をすてて顧みないこと。我が身を重んぜぬこと。やけくそになること。

孟子の離婁上に「孟子曰、自棄者不可與有言也。自棄者不可與有爲也。」

【維新前後の六偉人】 こゝでは、木戸松菊・大久保甲東、西郷南洲・勝海舟・吉田松陰・橋本景岳の六人をさしてさぶ。

【微祿の士】 ビロクノシ。小祿をもらつてゐた士。僅かの俸祿で生活してゐた士。

高適の詩に「遠行今若此。微祿果徒勞。」

杜甫の詩に「何日霑微祿。歸山買薄田。」

【赤貧洗ふが如し】 極めて貧しいことの形容。

「赤貧」(セキヒン)は、極めて貧窮なこと。

南史の臨汝侯岷之傳に「檢家赤貧、錢唯有貳貫、帖子數百。」

書言故事に「常言三人貧、曰赤窮赤貧、空盡無物曰赤。如赤地千里、如赤族盡殺、無遺類也。」

【生來】 セイライ。生まれつき。天性。天稟。天資。資性。天賦。

【魯鈍】 ロドン。おろかにして、才智の鈍いこと。愚鈍。晉書の皇甫謐傳に「何爾魯鈍之甚也。」

【意氣】 イキ。心だて。いきこみ。三國志、吳の江表傳に「以意氣許知己。」

【英才】 エイサイ。すぐれた才。又、その人。ひいでた才又、その人。孟子の盡心上に「得天下英才教育之。」

風俗通義に「伯林不世英才也、當爲國家幹輔。」

【煥發】 クァンパツ。火のもえたつ如く、精彩が外に表はれ出ること。いふ。廣川書跋に「魯公於書、其神明煥發、正在筆畫外。」

【精勵】 セイレイ。心をつくしてつとめること。勵精。



後漢書の朱浮傳に「學者精勵、遠近同慕。」

【刻苦】 コクク。いたく心力を勞してつとめること。苦勞を積むこと。

宋史の孔文仲傳に「少刻苦問學、號博治。」

【動功】 クンコウ。國家又は君主につくした功勞。てがら。いさを。

周禮の司勳に「王功同勳、國功曰功。」

軍防令に「對衆詳定勳功。」

源平盛衰記、六、小松殿教訓の條に「この一門代々朝敵を平げて四海の逆浪を鎮むるとは、無雙の勳功に似たれども」

【夭折】 エウセツ。若死すること。

左傳の昭公二年に「癘疫不降、民不夭折。」

吳書に「顏回有上智之才而夭折。」

【我も人なり彼も人なり】 我も彼も人といふ點にちがひはない。されば、彼の爲し得ることは、我も爲し得ない道理はないとの意。

孟子の離婁下に「是故君子有終身之憂、無一朝之思也。乃若所憂則有之。舜人也、我亦人也、舜爲法於天下、可」

傳、於後世、我由未免爲鄉人。也。是則可憂也。憂之如何、如舜而已矣。若夫君子所患則亡矣。非仁無爲也、非禮無行也。如有一朝患、則君子不患矣。」

【借越】 センエツ。身分に過ぎた事をすること。

韓愈の上襄陽于相公書に「今愈雖卑且賤、其從事於文、實專且久。則其贊王公之能、而稱大君子之美、不爲借越也。」

【狂妄】 キャウバウ。ものぐるひ。亂暴。

【排斥】 ハイセキ。おしのけること。しりぞけること。

後漢書の宦者傳に「雖時有忠公、而竟見排斥。」

【王侯將相寧ぞ種あらんや】 王侯將相の如き身分の貴いものとても、別に最初から種類のちがつてゐるものではない。だれでも、伎倆次第、努力次第で、その地位を占めることが出来るとの意。

史記の陳勝世家に「陳勝曰、壯士不死則已、死即舉大名、王侯將相寧有種乎。」

【英俊】 エイシュン。才智の衆にひいでた人。英傑。

史記の淮陰侯傳に「異姓並起、英俊烏集。」

【發憤】 ハツブン。いきどほりを發すること。精神をふるひおこしてその目的に邁進すること。奮發。

論語の述而篇に「其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至、云爾。」

【勉勵】 ベンレイ。つとめはげむこと。

論衡に「禁情、割欲、勉勵爲善矣。」

【顏淵】 ガンエン。名は回、字は子淵。無繇の子。孔子の弟子。

天資明睿、一を聞いて十を知る。實に十哲の第一人者である。三十二で卒した。孔子はこれを哭して慟し、「天我を喪はせり。」といはれた。歴代堯國復聖公に累封し、孔子の廟庭に配祀せられた。明代に至つてその子孫を官に任じて、翰林院五經博士とした。

史記の仲尼弟子列傳に「顏回魯人也。字淵、少孔子三十歲。顏淵問仁、孔子曰、克己復禮、天下歸仁焉。孔子曰賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂。回也如愚。退而省其私、亦足以發、回也不愚。用之則行、捨之則藏。唯我與爾有是夫。回年二十九、髮盡白、蚤死。孔子哭之慟曰、自吾有回、門人益親。魯哀公問、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顏回者、好學、不遷怒、不貳過、不幸短命死矣。今也則亡。」とある。程子はこれを評して、「顏子去二聖人一」

只毫髮間。」といひ、後世稱して亞聖といふ。

【舜何人ぞ、予何人ぞ】 孟子の滕文公上に「成謂謂齊景公曰、彼丈夫也、吾丈夫也、吾何畏彼哉。顏淵曰、舜何人也、予何人也。有爲者若若。是。公明儀曰、文王我師也、周公豈欺我哉。」註に「彼謂三聖賢也。有爲者亦若是。言、人能有爲、則皆如舜也。」

【有爲の士】 イウキのシ。事を成すに足る才能のある士。

「有爲」とは、事をなすこと。役にたつこと。

孟子の公孫丑下「將大有爲之君、必有不召之臣。」同じく離婁下に「人有不爲也、而後可有爲焉。」

【各般】 カクハン。いろ／＼。もろ／＼。諸般。

【前英】 ゼンエイ。前代の英俊。先代の英雄。

【來者】 ライシヤ。將來に生れ出てくる人。未來にこの世に生れる人。

論語の子罕篇に「後生可畏焉。知來者之不如此也。」

【奮起】 フンキ。ふるひたつこと。

歐陽修の文に「自公之奮起、徒步而名動天下。」

【終生の一大快事】 一生の間に於ける一の大きな快事。



「終生」(シユウセイ)は一生。一生涯。生涯。

王褒の九懷に「歴九州分案合誰可二分與終生」

「快事」(クワイジ)は、こゝちよき事。愉快な事。

### 9 挿圖

西郷隆盛筆

身は憔悴して白髪となり衰顔とならうとも、それは心にもか  
けない。たと心中には常に奮勃として湧きあがる壯心を藏  
し、劍を横たへて未だ何等の勳功の無いのを残念に思ふのみ  
である。今我は貧窮中にあるが、それらは何等意に介する所  
にあらず、世間の憐悪なる人々の群から脱出して、たと一途  
に君國に報せんとするのみであるとの意。

「窮鬼」は、貧乏神である。

木戸孝允筆

詩の意味は、「去年、大軍が我が國境に逼つたかと思へば、今  
朝は又獨身劍を提げて他郷に入るといふ次第である。人生は  
萬事斯く變化するもので、さながら夢のやうである。が、只  
一片男兒の心腸だけは依然として存してゐる。」といふのであ  
る。戊辰は明治元年である。「去歲千年過我輩」は、幕府の  
長州征伐の大軍が作者の郷國たる防長に押寄せたことをいふ

のである。當時の状況が想ひやられる。

大久保利通筆

これは明治七年、臺灣事件について、勅を奉じて清國に赴  
き、談判がめでたく解決して五十萬兩の償金を約し、北京を  
辭し、通州から天津に下る船中で賦したものである。

勅を奉じて單航、北京に向ふ。黒烟堆裏、波を蹴て行く。  
和成りて忽ち通州の水を下る。篷廳に閑臥して夢おのづか  
ら平かなり。

一讀のもと、當時のその心が察せられる。「篷廳」は「蓬窓」  
に同じ。とまぶきの船の窓。轉じて、ひろく船の窓の義にも  
用ひる。

## 八 自他一如

### 1 解題

橋田邦彦著「碧潭集」の中から探つた。

「碧潭集」は橋田邦彦の隨筆感想を集めたもので、その自然科学  
者としての素養の上に、生命をあづかるものとしての深い哲學觀  
の織り交ぜられた味に深いものが多い。

### 2 作者

橋田邦彦 ハシダ クニヒコ。

明治十五年(二五四二)鳥取市に生れた。第一高等學校を経て、  
東京帝國大學醫學部を卒業した。爾來生理醫學を研究し、醫學博  
士の學位を授けられ、東京帝大醫學部教授の任にあつた。昭和十  
一年、第一高等學校長に任ぜられ、帝大醫學部教授を兼ねた。  
また哲學的、思索的隨筆をよくし、「碧潭集」「空月集」等の著が  
ある。

### 3 編纂の用意

前課の結尾に於て「偉人を師として奮起するは終生の最

## 橋田邦彦

大快事であつて、假令運命がその人をして偉人の名を成  
さしむるに至らしめずとも、我として最高の發展を爲し  
得たならば、人生の目的はこゝに達せられたといふべき  
ではあるまいか」と述べられてある。本課に於ては、直  
ちにこれを承けて、先人を師として奮起し、自己を没し  
て偉業の大成に精進することの意義を論じた文を讀ませ  
ようと思ふのである。

### 4 要旨

學術の進歩は先人の努力の賜である。後進としては、こ  
の先人の努力を基礎として、その上に更に大なるものを  
建設せねばならぬ。それには自己をその事のために没却  
して精進するだけの努力が必要であつて、自己を没却す  
るところに自他は一如となり、學術の進歩は堅實なるも  
のがあることを論じたものである。



### 5 概説

第一節（五四頁—五七頁四行）

先人の業績を基礎にしてその上に更に大なるものを建設するのが我等の権利であつて、また義務である。それには自己をそのものの中に没却し、先人が拂つたよりも一層の努力を拂ふことを要する。

第二節（五七頁五行—五九頁五行）

自己を没却するとは、自己の精進を認められることを求めず、自己の精進の代償を求めず、その成否すら問はずしてひたすら精進することである。

第三節（五九頁六行—終）

我々は先人の恩恵を蒙ること極めて大である。これに對しての感謝は自己を没却することである。自己を没却した時先進後輩は一如となり自他一如となる。

### 6 取扱上の注意

□一讀ただけでは稍、こみ入つた論述のやうに考へられるが、再讀して一々に肯づいて讀んで行くと、實によく

筋道の通つた、よくわかる文である。すべてかうした思索的論文の讀み方は、鑑賞を主とする文學ものの讀み方とは自ら異るところのあるべきである。従つて「讀み」に於ても特別の工夫のあるべきで、「讀む」考へる」この二つの交互作用の上に理解も完全になつてくる筈のものである。この種の文の讀み方の態度を養ふのに恰好の教材である。

□この文では我々の學問貢獻の態度としては自己没却といふことを徹頭徹尾強調してゐるのである。この點をよく讀み取らして、生徒將來の心構へを養ふの資たらしめた

□「殊に我が國に於ては偉大なものを出来るだけ急速につくり上げる必要がある」といつてゐる。「偉大なもの」と「急速に」とは、矛盾した關係にある。このどちらか一方では全きを得ないのである。この矛盾する二つを統合して兩者を共に満足せしめるためには異常なる精進努力が必要となるのである。

□「縁の下の力持」といふやうなことは、ともすれば人の嫌

ふところである。殊に年少野心に燃える人々には恐らく魅力のない言葉であらう。しかしその重要性は少年の頃から認識させておかねばならぬものである。

### 7 設問

- 1 この文で作者の言はんとする根本主旨は何か。
- 2 「後世に負はされた権利であり義務である。」と言つてある権利と義務とを説明せよ。
- 3 「學問建設の人柱」とは何か。
- 4 偉大なものを急速につくり上げるためには如何なる事が要求されるか。
- 5 「自他一如」といふ意味を言へ。

### 8 釋義

【學術】 ガクジュツ。學問。

唐書の杜通傳に「其爲人少學術、故當朝議論、時時失淺薄。」

【進歩】 シンポ。(一)歩を進めること。

宋史の樂志に「舞者進歩、自南而北。」

(二)物事の次第に善い方に移ること。次第に發達すること。

と。こゝでは(二)の意味である。

【先人】 センジン。(一)今より以前の人。前人とも云ふ。太平記に「豈、亡國の先人のために、有徳の賢君を謀らんや。」

(二)亡父。先祖。

詩經の小雅、小宛篇に「我心憂傷、念昔先人。」

こゝは(一)の意味である。

【基礎】 キソ。(一)礎。土臺。もとゐ。(二)建設物の最下位に設けられ建設物の全重量を支持するもの。こゝは(一)の意。

【業績】 ゲフセキ。成しとげた仕事。仕事の出来榮え。仕事の成績。「學界の大なる業績」といふやうに用ふ。

【感謝を拂ふ】 カンシヤをハラふ。感謝は有りがたく思ふこと。御禮をいふの意。

韓愈の文に「感謝情至骨。」

【覺悟】 カクゴ。(一)さとること。(二)あきらめること。

決心すること。こゝは(一)の意味である。

【後進】 コウシン。あとから進んで來ること。又その人を



いふ。後輩といふのと同じ。  
後漢書に「好士喜誘益後進」

【雙肩】 サウケン。両方の肩。

張華の詩に「一從連雙肩」

【權利】 ケンリ。(一)權勢と利益。

史記の鄭世家贊に「語有之以權利合者、權利盡而交疎」

(二)或る事をなし得る資格。(三)特定の利益を享受する法律上の資格。能力。權。大日本帝國憲法の第二章は「臣民權利義務」である。こゝは(二)の意味である。

【義務】 ギム。(一)人間行為の準則として、爲すべく、また爲すべからずとする形式を以つて規定せられたもの。

(二)法律上ある行為をなすこと、又はなさざること、或は他人の行為を容認することを必要とする法律上の拘束をいふ。こゝでは(一)の意味である。爲すべきことの意味である。

【主張】 シュチャウ。(一)持説。主義。(二)主宰の意。

(三)主として言ひ張ること。こゝでは(三)の意味である。

【建設】 ケンセツ。たてまうけること。かまへつくること。

漢書に「建設藩屏」

【飽くまで】 アくまで。どこまでも。

【企圖】 キト。(一)くはだてること。たくらみはかること。くはだて。計畫。企劃ともいふ。(二)めあて。目的。こゝは(一)の意味である。

【所以】 ユエン。(一)なすところ。しかた。

論語の爲政篇に「視其所以」

(二)いはれ。わけ。理由。

韓愈の文に「察其所以」

こゝは(一)の意味である。

【先輩】 センバイ。(一)官位・學藝・年齢などが己より長じてゐる人。

三國志の吳志、關澤傳に「澤、州里先輩、丹陽唐固、亦修身積學、稱爲儒者」

(二)己より先に進士となつた者。

唐國史補に「進爲時所尙久矣、互相推敬、謂之先輩」こゝは(一)の意味である。

【堅牢】 ケンラウ。かたくて容易にやぶれないこと。丈夫なこと。堅固。

蘇軾の雪詩に「也知不作堅牢玉、無奈能開頃刻花」

【鐵骨】 テッコツ。鐵骨コンクリートに於て、その骨材として使用される鋼材をいふ。一般に形鋼を用ひる。こゝでは骨組の意味である。

【潜め】 ヒソめ。かくす。

【没却】 ボッキヤク。なくすこと。無視すること。念頭におかないこと。こゝは最初の意味である。

【埋没】 マイボツ。埋れて見えなくなるること。

【自覺】 ジカク。self-consciousness の譯語。自己の行為や經驗の反省に伴ふ自我感情。又與へられた自己の素質・能力等の限界についての正しい評價意識。更に先天的認識の根據、絶對價値の源泉としての純粹自覺をもいふ。單に自らさとする意味にも用ひる。こゝはその意味である。

【人柱】 ヒトバシラ。昔、橋または堤防を築くとき、河の神への生贄として水底に生きた人を埋めること。またそ

の人。平家物語の卷六、經島の條に「人柱可被立なんど、公卿僉議有りしか共」

【犠牲】 ギセイ。(一)いけにえ。天地宗廟を祀るに用ひる生牛。

禮記・月令篇に「孟春、命祀山林川澤、犧牲毋用牝」

(二)自分の身命をすてて國のため人のためにつくすをいふ。(三) Victim の譯語。供犠の行事のうち、特に生物、特にその靈を媒介として神を感應することをいふ。こゝは(二)の意味である。

【迷信】 メイシン。迷妄の信仰。誤り迷つてゐる信仰。

【入用】 ニフヨウ。いりよう。所用。

北魏書の樂志に「因天然之有、爲入用之物」

【犠牲的精神】 ギセイテキセイシン。自分の身命をすてて國のため、人のためにつくすこゝろ。

【發揮實現】 ハッキジツゲン。物に備はつたものを外へあらはし出すこと。あらはし示すこと。

易經・文言傳に「六爻發揮、旁通情也」

【急速】 キフソク。すみやかに、いそいで。



晋書の羊祜傳に「吳俗急遠、不能持久、唯有水戰、是其所便、一入其境、則長江非復所固」

【事情】 ジジヤウ。まことのしだい。ことこのころ。ことのわけがら。

韓非子の説難篇に「見無心、而遠事情」

戰國策の秦策に「道遠、臣不得復過矣、請諷事情」

【着眼】 チャクガン。眼をつけること。注意を向けること。着目とも云ふ。

蘇軾の詩に「塗車芻靈皆假設、着眼細看君勿誤」

【歩調】 ホテウ。(一)歩行の調子。足なみ。あるきつき。

(二)多人数の行動の調子。「歩調を合はす」などといふ。こゝは(二)の意味である。

【後塵を拜す】 コウジンをハイす。(一)車馬などの走つて行つた後に立ち揚る塵を浴びること。(二)人の下風に立つこと。

古今詩話に「中僧羅賦詩、尾句云、莫嫌恃酒輕言語、曾把文章誤後塵」

【精進】 シヤウジン。(一)梵語毘梨耶の譯語。勤・精勤・勤

精進とも譯す。勇敢で諸の善法を進修することをいふ。

(二)身を清め、ものいみすること。(三)魚鳥を食はず、蔬菜を食ふこと。(四)菩薩修行中の第三位。即ち十信(修行位の菩薩が漸次轉陞する位が五十二種ある中、最初の十位で、信・念・精進・慧・定・不退・護法・回向・戒・願の十種をいふ)の第三位をいふ。

【所得】 ショトク。(一)我が身に得ること。我が身に得る利益。(二)法律用語。個人又は法人の規則的な収入の一部又は全部をいふ。こゝでは報酬位の意味である。

【成果】 セイクツ。出来上つた結果。

【只管】 ヒタスラ。たゞその事ばかりなるにいふ語。ひとむきに。ひたぶる。切に。一途に。

源氏物語の夕顔に「あふまでのかたまばかりと見し程にひたすら袖の朽ちにけるかな」

【裝飾】 サウシヨク。よそほひかざること。又そのもの。かざりつけ。よそほひ。みじまひ。

齊書の皇后傳に「宮人開鐘磬、早起裝飾」

【復興】 フクコウ。再びおこること。再興。

後漢書の祭遵傳に「大漢厚下安人、長久三德、所以累世十餘、歷載數百、廢而復興、絶而復續者也」

【木筋セメント塗り】 モッキンセメントヌリ。鐵筋コンクリートの代用品で、鐵骨の代りに木材を以つてし、その表面にセメントを塗つたもの。

【スカバはし】 如何はし。(一)おぼつかないこと。

(二)よからぬこと。見苦しい。こゝは(二)の意味である。

【世態】 セタイ。世の中のありさま。世情。

故事成語考に「可厭者世態炎涼」

【發露】 ハツロ。あらはるゝこと。發覺。發顯ともいふ。

【不滅的】 フメツテキ。亡びないやうな。

【冥藏】 メイザウ。外より見えないやうに内にかくれてゐること。

【露出】 ロシュツ。外部にあらはれてゐること。

【表現】 ヘウゲン。あらはすこと。あらはしかた。

【縁の下の力持】 エンのシタのチカラモチ。いくら力めても、人に認められぬ割の悪い苦勞をすることをいふ。

【俚諺】 リゲン。俗間に行はれることわざ。卑近な諺。

漢書の賈誼傳に「里諺曰、欲投鼠而忘器」

【功利的嘲笑】 コウリテキテウセウ。生活の實用に役立つぬものとしてあざけり笑ふこと。

【希望】 キバウ。ねがひのぞむこと。

韓愈の文に「雖不足、以希聖成德」

【壁塗り】 カベヌリ。鐵骨の上を塗ること。こゝでは基礎が出来てから表面を裝飾することである。

【特殊な技能】 トクシュなギノウ。特別な技能。技能とは、うでまへ。技倆。

史記の孟嘗君傳に「長無他技能」

【一體になる】 イツタイになる。一つになる。一緒になる。

【固有】 コイウ。(一)もとから有ること。自然に所有すること。

孟子告子篇上に「仁義禮智、非由外鑿、我也、我固有之也」

(二)その事物のみが特に有すること。特有。こゝは(二)の意味である。



【意見】 イケン。(一)所信。心に思ふ所。考へ。見込み。唐書の高宗紀に「上元元年、天后上意見十二條。」

(二) 意見をのべて人を誡めること。こゝでは(二)の意味である。

【學說】 ガクセツ。學問上の論說。學問上の意見。説。

【同僚】 ドウレウ。同役。同じ役をつとめる人。

詩經の大雅、板の篇に、「我雖異事、及爾同僚。」

【背景】 ハイケイ。(一)背部の景色。(二)演劇用語で書割のこと。(三)周囲の形勢、情況。(四)うしろだて。こゝは(四)の意味である。

【周囲】 シウキ。(一)まはり。めぐり。ぐるり。(二)外界。外邊。こゝでは(一)の意味である。

【自力と他力】 ジリキとタリキ。自力は自らの力。他から助を借りぬ自分一己の力。佛語としては、自己の作善修行の功德力により、佛果を得んとすること。他力とは、他人の助力。佛語としては、衆生を救済する慈悲者の力。即ち阿彌陀如來の本願の力をいふ。

自力と他力とは相反するやうであるが、自己を没却すれば、

ば、自からを主張しないから、自他の區別はなくなつて、こゝに自他一體となつたところの向上進歩があるのである。

【渾然一如】 コンゼンイチニョ。渾然とは物の區別がないさま。こゝでは自力と他力が一つになつて區別が出来ないこと。一如とは佛語で、一は不二、如は不異の意である。

【歸依】 キエ。神佛などを信仰して自分の生命をそれに託すこと。

### 九 神無月の頃

#### 1 解題



兼好法師の「徒然草」の中から、三段を抄録して一課とした。「徒然草」は兼好法師の作で、その題名は開卷第一の「つれづれなるまゝに」の語によつてつけられたものである。三光院實澄の崑玉集によれば、兼好の歿後今川了俊と兼好の近侍命松丸とが遺稿や反古などを整理して二卷に編次したものであらうといふ。

本書は實に兼好の隨感・見聞・評論等であつて、子細にその所説を検討すれば、老佛の厭世的・虚無的思想や、孔・孟の儒教思想その他のものを見出すことも出来るが、兼好が特にこれ等の思想を闡明しようとして書いたものでなく、要するに趣味の隨

筆であると思做してよいであらう。

主な註釋書は

- 野 槌 (十三卷) 林道春
- 徒 然 草 抄 (十三卷) 加藤馨齋
- 徒 然 草 文 段 抄 (八 卷) 北村季吟
- 徒 然 草 諸 抄 大 成 (二十卷) 淺香山井
- 徒 然 草 大 全 (十三卷) 高田宗賢
- 徒 然 草 講 話 (一 册) 沼波瓊音
- 徒 然 草 詳 解 (一 册) 内海月杖

その執筆の時代について藤岡作太郎氏の研究したところのものを次に示しておく。

紀 元	年 號	兼好の年 齡	文 段
一九七八	文保二年	三六	「洞院左大臣殿云々」(百一段)以後
一九七九	元應元年	三七	「元應の清暑堂の御遊」(六九段)以後
一九八四	正中元年	四二	(出家)



一九八六	嘉暦元年	四四	「吉田中納言云々」(百七十 六段)以後
一九九〇	元徳二年	四八	「惟繼中納言は云々」(八十 五段)以後
二〇〇六	正平元年	六四	(在京)
二〇一〇	觀應元年	六八	(死)

### 2 作者

兼好法師 ケンカウ ホフシ。

#### (I) 略歴

本姓は卜部氏。名は兼好。山城吉田神社の祠官卜部兼顯の第三子。吉田に居つたので吉田を姓とした。後宇多上皇に仕へて左兵衛尉となつたが、上皇の崩後剃髮して(吉野拾遺による)俗名のまゝに兼好と稱し、風月を友と

(藤岡博士の考證)

(岡 太 暦 に よ る)

正中元年(42)  
後宇多法皇の御崩御によつて出家  
貞和二年閏九・六(64)  
貞和四年十二・二(66)

延慶二年(27) 二月八日 院の仰せにより神詠部類を編む。  
三年(28) 六月十四日 萩戸の隅に化鳥を射る。  
康永二年(61) 七月廿七日 雙岡に塔婆を立てて親戚故友の跡を弔ひ、櫻を植ゑてうゑおきし花とならびの岡のべにあはれ幾世の春をすぐさむ。  
貞和四年(66) 八月廿八日 南帝の召によりその御袍着加持を奉仕す。  
二月二日 新古今集を講じ、殿上人廿餘人聴聞す。

して諸國を歴遊した。(家集の詞書による)又、信州木曾に庵を構へた(吉野拾遺による)こともあつたが、又京都に還り、専ら和歌を詠じて娛んだ。當時兼好は頼阿・淨辨・慶運と共に和歌の四天王と稱へられた。寂滅の地を洛西雙が岡に卜し、櫻樹を栽ゑ、  
「契りおく花とならびの岡のべにあはれ幾代の春をすぐさむ」  
と詠じたが、晩年伊賀の橘成忠に招かれて伊賀に赴き、國見山の麓、密集院に住して、正平五年(觀應元年)そこに入寂した。年六十八。  
(II) 年譜

京都にあり

五年(67) 正月廿四日

横川に上り法華經を寫す。  
顯基中納言記をつくる。

五月廿三日

宇都宮公綱・藥師寺公義の訪問を受けしが、寂然として答へず。頼阿と共に伊勢國阿野明神に詣で、七日の通夜のすまびに「寂覺の友(草子)」を撰す。

觀應二年(68) 二月三日

病氣。光嚴法皇より典藥頭和氣清元をつかはさる。辭して藥をのまず。即ち米三十石を賜ふ。

二月十五日  
二月十八日  
二月廿七日

寂。(一説二月十八日・四月八日)右註進。  
權僧都を誂賜せらる。

應安六年(歿後)三月十二日

二條良基、兼好の撰べる「往生傳」「寂光淨土錄」「徒然草」の寫本を將軍に上る。

### 3 編纂の用意

徒然草は内容の趣味多きと、文章の洗煉されてあるために、國文を學ぶ初歩のもの最も好んで讀むものである。わけでも、本書の文は屢々高等専門學校受験問題として選ばれる。随つて本書の文を講讀せしめることは、この點よりするも、中學生に取つて極めて必要である。従來の讀本には難易聯關等の關係から一段づつ各所に散

在せしめて編輯したが、今回の修正に際してはこゝにこれを纏めた。これは數段を纏めて讀むことによつて、徒然草の全貌に對する見透しが一層十分に行はれ得ると考へたためである。

### 4 要旨及び概説

柑子の木

栗栖野の奥、苔の細道をふみわけて到つたところが、



「かくてもあられるよとあはれに」既められた庵の庭に、實のなつた柑子の木が厳しくかこつてあるので、折角の興がさめて「この木なからましかば」と感じたといふ。この話では、庵の主の俗界をよそに住ひながら、なほ、利欲の煩惱から脱しきれずに居るのを嘆く作者の心を理會せしむべきである。

高名の木のほり

いはゆる高名の木のほりが、高い木にのぼせた一人の男の、高いところにあるうちは、何も言はないで、低いところに下りて来た時に注意を與へたといふ事實についての説話である。「あやまちはやすき所になりて必ず仕ることに候」といふ、その「聖人のいましめ」にもかなつた下薦の言葉が、この一節の要旨でもある。

懈怠の心

初心の人の弓を習ふことに例を取つて、懈怠の心を戒めたものである。殊に當人が心づいてゐない懈怠の心が最もおそろしいといふ。一時の懈怠は後に千里の遅滞を生ぜしめる。人間は、何事にも「唯今の一念」を

以て當ることが大切である。これが一節の要旨である。

5 取扱上の注意

- 三節とも、何れもその眼目とするところは明らかである。教授者は燥急に説明注入することを避けて、よろしく生徒をして各節の眼目を捉へしむべきである。
- 徒然草の文は古文として、その形式上の解釋練習の爲にも、好個の材料とされる。本課も直に内容教授に入らず、先づ一通りは逐語的に口語譯を試みさせたがよからうと思ふ。そして、何等の故障もなく、その原文のまゝで文意が解釋出来るやうにしておいて、さて後に、原文のまゝで、その内容上の重點眼目がびたりと胸にこたへて味ははれるやうな域に導きたいものである。
- 一節の眼目とは、換言すれば作者兼好のねらひどころである。作者の執筆の動機ともなり興味ともなつた點が何であるかを把握し得ることがこの種の文の解釋に於ける始であり、終であるといはれよう。
- 而して、その眼目たることは、決して過去のことではなく、

又、兼好一人のことでもなく、更に、たまくこゝに引合に出された人物個人のことでもない。何れも今日の社會のことであり、或は學生の身の上の事である。殊に生徒の日常生活にこれらの話を活かして悟らしめることは、實に教授者の手腕に俟たなければならない。

6 設問

- 1 次の語句の意味を問ふ  
イ、かくてもあられるよとあはれに見る。  
ロ、鞠も難きところを蹴出してのち、やすく思へばかならず落つとはべるやらむ。  
ハ、何ぞ唯今の一念に於て直にすることの甚だ難き。  
ニ、三節の各、から、格言とすべき一句づつをあげて見よ。
- 3 今日の世の中に、これらと相似た例話があるならば話して見よ。
- 4 三節の文に於て、文法上の呼應、係結の注意すべきものを指摘せよ。

7 釋義

柑子の木 (第十一段)

【神無月】 カンナヅキ。陰曆十月の稱。八百萬の神がこの月は出雲の大社に集るといふ傳説から起つた語だといふ。又、神之月の轉とも、雷無月の義ともいふ。

萬葉集、卷八に「かみなづきしぐれにあへるもみぢばの吹かば散りなむ風のまに〜」  
會丹集に「何事も行きて祈らむとおもひしに社はありて神無月かな」



【柑子の木】 カウジのキ。  
芸香 (ヘンルウダ) 科柑 (ミカン) 屬の落葉喬木。  
蜜柑の一品種。果實に酸味が多く、果皮が薄くて果肉に密着してゐる。表面は甚だ滑らかで、黄色に熟する。かうじみかん。

【栗栖野】 クルスノ。今の京都市東山區山科町栗栖野。古



はこの一帯の地の總稱であつたらしい。

【山里】 ヤマザト。山にある人里。山中の里。

古今集、春上に「春たてど花も匂はぬ山里は物うかるねに鶯の鳴く」

宇津保物語、國讓、中に「しがの山もと比叡つよきのわたりにをかしき山里はべり。」

【遙かなる苔の細道をふみわけて】 遠くはるかにつゞいてゐる苔のむした細道をふみわけて、その先に心細く住んでゐる庵がある。

【苔の細道】とは、苔の密生してゐる細い道。

千載集、冬に「眞桑かる小野の細道あとたえて深くも雪のなりにけるかな。」

【庵】 イホ。僧の假居、又、農事のためなどに草木を結んで造つた假家。いほり。草舎。



草舎。

萬葉集、卷五に「ふせいほのまげいほのうち」

天智天皇の御製に「秋の田のかりほのいほのとまをあら

り。」

みわがころもでは露にぬれつゝ」

【笈の雫】 カケヒのシヅク。笈からしたゝり落ちる水のしづく。

【笈】は「懸樋」の義。高く架けわたして水を通はせる樋。「埋み樋」に對する語。

後拾遺集、難に「思ひやれ訪ふ人もなき山里のかげひの水の心細さを」

【つゆ音なふものなし】 すこしもおとづれて來るものはなし。

【つゆ】は、すこし。いさゝか。わづか。

竹取物語に「つゆも物空にかけらば、ふと射殺したまへ。」

古今集、秋下に「ぬれてほす山路の菊のつゆの間にいつか千年をわれはへにけむ」



「おとなふ」は、おとづれること。訪問。

源氏物語、宿木の卷に「さしはへては、おとなはず侍るめり。」

【関伽棚】 アカダナ。佛に

そなへる水又は花などを置き、又佛具などをすゝぐ棚。

宇治拾遺物語、卷十三に「関伽棚の下に花からおほくつもれり。」

風雅集、雜中に「あかだなの花の枯葉もうちしめり朝霧ふかし峯の山寺」

これらの例によつて見れば、室内に設けた佛壇の物でないことがわかる。寺などでは、佛壇の傍に低く屋根をおほひ、中に二三の棚をつくり、下を簀子にしてある。

【関伽】は「阿伽」とも書く。(一)梵語で、水の義。

翻譯名義集に「阿伽此云水。」

(二)佛に手むける水、又は香水。

源氏物語、若紫の卷に「あか奉り、花折りなどするも、あらはに見ゆ。」

【かくてもあられるよ】 こんなにしても、住めば住まれるものだし。

【あはれに見るほどに】 感にたへて、しみじみと見てゐるうちに。

【あなたの庭に云々】 彼方の庭に、柑子の木の枝もたわむばかりになつてゐる周囲を嚴重にかこつてあつた。

この句は文脈が少しく亂れてゐる。「あなたの庭に」は、副詞のはたらきをなし、句を隔てて、下の「圍ひたりし」を修飾してゐる。随つて、下の「枝もたわむになりたる」にはかゝらぬ。而して「枝もたわむになりたるがあたりを云々」の「が」は、所有をあらはす助詞で、「枝もたわむになつてゐるものの周囲」と解せねばならぬ。元來は

「彼方の庭に大いなる柑子の木の枝もたわむになりたるがあたり、そがあたりを……」とあるべき文のやうに思はれるが、いかゞ。

【すこしことさめて】 少々興がさめて。少しおもしろみがうせて。

【ことさむ】とは、興がうせること。

枕草子、五に「その聞きつらむ所にてふとこそよまましか。餘りぎしき、ことさめつらむぞあやしきや。」

古今著聞集、八に「この事によりて、御鞠もことさめて。」

【この木なからましかばと覺えしか】 いつその木が無かつたらよからうものにとおもつた。

【ましかば】の下に「ゆかしからまし」などとあるべきを



省いてある。

「覚えしか」は「圍ひたりしこそ」の結語。

高名の木のぼり(百九段)

【高名の木のぼり】 名高い木のぼり。木のぼりの名人。

高名(カウミヤウ)は、(一)名高いこと。評判の高いこと。

(二)武功。戦場で敵の首を取ること。こゝは(一)の意。

大鏡、上に「高名のおほやけの世繼。」

【人をおきてて】 人を指圖して。

「おきつ」は「掟つ」の字をあてる。おきてをなすこと。

定めること。處置すること。さしづすること。



宇津保物語國讓  
下に「みづしどこ  
ろ、大殿の具いと  
よくおきてたり。」  
奥州後三年軍繪  
詞に「その舌を切  
るべきよしおき  
つ。」

【軒たけばかりになりて】 軒の高さほどになつて。

【心しておりよ】 よく氣をつけておりなさい。

「心す」とは、心を留めること。氣をつけること。注意すること。

後撰集、雜二に「心してまれに吹きくる秋風を山おろしには

なまじとぞおもふ。」

金葉集、春に「吹く風も花のあたりは心せよ。今日をば常の春

とやは見る」

【ことばをかけ侍りしを】 ことばをかけたところが。こゝ

の「を」は反對の意を示す「を」で、「に」とりかへても意

味が通じる。

【かばかりになりては云々】 これほど低くなつてからは、

たとひ飛びおりても、おりられませう。

「かばかり」は「かくばかり」の略。これほど。かほど。

竹取物語に「かばかりまもるところに、天の人にも負けむ

や。」

【そのことにて候】 そのことごとさると、膝を進めて得意

げに説明することろもちである。

【目くるめき枝あふきほどは】 目がくらみ、枝があふな

かしくおもはれるうちは。

「くるめく」とは、目のまはること。目のくらむこと。目まひのすること。

宇治拾遺物語、卷六に「目くるめきかなしければ」

【おのれが恐れ侍れば】 常人自身が恐れて氣をつけてをりますから。

【あやしき下藤】 見るかげもない下賤のもの。

「あやし」とは、賤しいこと。見すばらしいこと。

枕草子、三に「人もあはなむと思ふに、更にあやしき法師、あ

やしの言ふかひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いと口をし。」

【下藤(ゲラフ)は、(一)藤を積むことが浅くて地位の低い

もの。官位のひくいもの。「上藤」「中藤」の對。

【藤】とは、僧侶が安居の功を積んだ年を數へるにいふ

語。轉じて、一般に年功を積むこと。

伊勢物語に「國經の大納言また下藤にて」

(二)下さまのもの。下人。

謡曲、佐々木に「下藤の身の悲しさは怒にめでけるが」

こゝは(二)の意。

【聖人のいましめ】 易經の繫辭に「君子安而不危、存而

不忘亡、治而不忘亂。是以身安而國家可保也。」とある

のをさしたものであらう。

【聖人(セイジン)とは、智徳が圓滿に發達して萬世の師

表とあふがれる人をいふ。孔子・釋迦・基督・ソクラテ

スの如きは實にその人である。

【鞠も難き所を蹴出して云々】 蹴鞠も、蹴にくいところを

旨く蹴出して、もういゝとおもふと、次には必ず蹴損じ

て落してしまふとか申すやうであります。



蹴土 蹴長 蹴隆 蹴筆  
「蹴鞠」(シウ  
キク)とは庭  
上で鞠を蹴る  
一種の遊戯。  
古は「くゑま  
り」といひ、  
後には「けま  
り」といつた。

技を行ふ場處を懸(かゝり)といふ。競技者は八人を限りとし、鹿革製の鞠を順次に蹴渡して地に落さぬやうにする。四隅には柳・櫻・松・楓を植ゑる。この技は古く唐土



から渡来したもので、平安朝の末以降盛に行はれ、名人がまた随つて輩出し、法式も大いに備はるに至つた。後鳥羽天皇の頃、藤原宗長、その弟雅經の二人は特にこの技に練達してゐた、爾來宗長の家を難波、雅經の家を飛鳥井（アスカキ）と稱し、相並んで長く斯道の師範家となつた。明治維新の後は殆ど廢絶した。

懈怠の心（九十二段）

【懈怠】 ケダイ。おこたりにまけること。おこたりに。なまけ。怠慢。

菩薩本行經に「夫懈怠者業行之累。在家懈怠則衣食不供、產業不營。出家懈怠則不能出離生死之苦。」



枕草子、二に

「一日ばかりの

しやうじんのけ

だいとやいふべ

からむ。」

【もろ矢】 諸矢。

早矢（ハヤ）と

乙矢（オトヤ）

との二本の矢。一手矢。又、諸矢を的に射あてること。

榮華物語、殿上の花見の條に「今日よりは子の日の松と梓弓もろ矢に千代をかけて引かなむ」

拾遺集、難春に「引く人もなしと思ひし梓弓今ぞ嬉しきもろ矢しつれば。」

【たばさみて】 手に挟み持つて。わきばさみもつて。

萬葉集、卷二十には「はじ弓を たにぎりもたし、 まかご矢を たばさみもちて」

【的】 マト。その形の圓（マドカ）なるよりいふとも、又

目處（マト）の義ともいふ。弓・鐵砲などを射習ふとき、

ねらひあつべき目標として立ておくもの。板・紙・布・革

などで作り、形は種々ある。中央に圓線を記すを普通と

し、第一の黒圈を一の黒といふ。

【初心の人】 シ・シンのヒト。まだ物事に馴れぬ人。こゝ

はまだ弓術に達せぬ人。

狂言、八句連歌に「某も初心なによつて、悪い處を直いて

おくりやれ。」

【なほざりの心】 物事をおろそかにする心。

「なほざり」は、等閑の字をあてる。深い注意を拂はぬこ

と。まめやかならぬこと。本氣ならぬこと。かりそめ。

おろそか。疎略。

宇津保物語、忠乞に「なほざりなる御心かな。」

後撰集、秋下に「なほざりに秋の山べを越えくれば織らぬ錦

をきぬ人ぞなき」

【毎度たゞ得失なく】 いつもたゞあたりはづれに關係な

く。

「得」は、矢の的にあたること。失は矢の的をはづれるこ

と。

【師のいはく】「……たゞふ」【さはく……とさふ】【さひけ

らく……といひけり】「のたまはく……とのたまふ」かや

うに上と下と一致させるのが古の語法である。しかし、

今は、「下を」とどめて、「さふ」「さひけり」のたまふ」

を省くことが多い。

【おろそか】 疎略。なほざり。かりそめ。

源氏物語、桐壺の卷に「おほやけごとにつかうまつれる、お

ろそかなる事もこそと」

娥歌加留多、三に「奉公において、露ほどもおろそかのない

横笛。」

【このいましめ萬事に互るべし】 このいましめは、ひとり

弓矢の道ばかりでなく、萬事にわたつて心がくべきこと

である。

【道を學する人】 學藝を修める人。

この語を古來一般には佛道を修行する人と説いてゐる

が、それではあまり意味がせますぎはしないかとおもふ。

【夕には朝あらむことを思ひ云々】

朱文公の勸學文に「勿レ謂 今日不レ學有 來日、勿レ謂 今日

不レ學有 來年、月日逝矣。歲不 我延、嗚呼老矣。是誰之愆

也。」

【重ねてねんごろに修せむことを期す】 あとで再び深切丁

寧に修行しようとして豫期してゐる。

【一利那のうち】 きはめてみじかい時間のうち。

利那（セツナ）は梵語 *śamā*。印度に於ける時の最少單

位。時の最大單位「劫」(コフ)の對。壯士の一彈指の間

には六十五利那あるといふ。

俱舍論に「時之極少名一利那、時之極長爲劫。」

太平記、二十七、上杉島山流罪死刑の條に「石火の光の中、

一利那。」



【たゞ今の一念】 たつた今の一瞬間。

「一念」は極めて短い時間。

仁王經に「一念中有九十刹那」  
往生禮讚に「乘蓮華一念至佛國」

8 通 釋

柑子の木

十月の頃、栗栖野といふ所を通つて、或山里まで尋ね入つた事があつた。そのとき奥深く苔むした細い道をたどつて行くと、寂しさうに住つてゐる庵室があつた。落葉に埋れた樋口を傳つてちよほくとしたる水音の外には、何一つおとづれるものがなかつた。園伽棚に菊の花や紅葉などを折り散らしてあるのを見れば、さすがにこんな山里にも住む人があるからであらう。こんな風にしてでも住めば住まれるものよと、感心して見てゐると、彼方の庭に大きな柑子の木が、枝もたわむばかり實のつてゐるのがあつて、その周囲を嚴重にかこつてあつたので、少し興がさめて、いつそんな木が無かつたならばと思つたことであつた。

高名の木のぼり

木のぼりの名人で何とかいつた男が、人にいひつけて高い木にのぼらせ、梢を切らせたが、危い時分には何もいはず、おりる時、家の軒の高さ程になつてから、「過をするな、氣をつけておりなさい。」と聲をかけたのを、或人が聞きとがめて、「こんなになつてからは、飛びおりてもおりられませう。どうしてそんなに言ひなさるか。」といつたら、かの男が、「その事でございます。目がくらくして、枝のあぶない時は、自分が恐れて用心しますから、申す必要はありません。過は易いところになつて、油断をする結果必ずするものでございます。」といつた。この木のぼりは賤しい下郎の身分であるが、その言ふことは聖人の御誠にかなつてゐる。鞆を蹴るにしても、むづかしい所をうまく蹴おほせて、やれくんと安心すると、きつと蹴落して失敗するものだといふをしへがあるさうである。

解怠の心

或人が弓を習ふ時、二本の矢をもつて的に向つた。師匠

9 挿 圖

山里の柑子の木 西川祐信筆

「繪本徒然草」から本課の第一篇「柑子の木」の場面を畫いた西川祐信の挿繪を轉載した。

筆者西川祐信は徳川時代の畫家。名は祐助、通稱は孫右衛門。後、左京といひ、文華堂・自得齋等と號した。京都の人、はじめ狩野永納に就いて狩野派の畫を學んだが、後土佐永祐の門に入つて土佐派の畫に親しみ、終に二流を折衷して西川派を開いた。美人畫に長じ、西鶴・自笑・其磧等にたのまれて、その作の挿圖を多く畫いたといふ。寶曆元年(二四一一)歿。年八十一。或はいふ七十四。

10 参 考

「解怠の心」の一篇は引例が誠に剴切で、簡潔の文のうちに機微な人情の弱點を敍したところがまことにめづらかである。兼好がこの「只今の一念」を重んずる心は、やゝ佛教の無常觀の匂がする例ではあるが、この外にも次の如くところどころに見られる。この一篇の話と比較對照して適宜生徒に説明していただきたい。第百八「寸陰惜しむ人なし」の段には、

がこれを見ていふのに、「初學の人は二本の矢を持つてはならぬ。後の矢があると頼む心から初の矢を輕んずるやうになる。いつでもきつとこの一本の矢で射とめようと思はなければならぬ。」といつた。たつた二本の矢を師匠の前でおろそかにしようとする誰か、誰か思ひはしない。けれども自然に怠の心が生ずるので、結局おろそかにすることになる。このことは、自分には氣がつかぬが、師匠はちやんと知つてゐる。このいましめは、たゞ弓矢の事ばかりでなく、萬事に應用が出来る。その一例を擧げて見れば、道を學ぶ人は、夜になると、明日の朝があると思ひ、朝になると、今夜があると思つて、いづれもう一度よく修めようと思ふ。そこに怠の心が生じてくる。しかし誰もこれに氣がつかない。まして一刹那の短い間に怠の心が萌すなどといふことに誰が氣づかうぞ。併し、實は、この間にでも怠の心はちやんときざすものである。唯今即刻すぐに事を行ふといふことは、どうしてまあ、そんなにむづかしいのであらう。



「たゞ今の一念むなく過ぐることを惜しむべし。」

第百八十八 「或者子を法師になして」の段には、

「一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる、これをおそるべし。」

「萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。」

などである。この他に、

第五十九 「大事を思ひたゝむ人は」の段、

第四十九 「老來て始めて道を行ぜん」との段

などいづれも参考とするに足る。殊に第百八十八段の話は少し

長いが、まことに、おもしろい。一々左の原文について御覽を

願ひたい。

(第百八) 寸陰惜しむ人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚

にして怠る人の爲にいはば、一錢かろしといへども、これをか

さぬれば貧しき人を富める人とす。されど商人の一錢ををしむ

心切なり。刹那覺えずといへども、これをはこびてやまされば、

命を終ふる期忽ちに至る。されば道人は遠く日月を惜しむべか

らず。たゞ今の一念空しく過ぎしことを惜しむべし。もし人來

りて、我が命明日は必ず失するべしと告げ知らせたらむ

に、今日の暮るゝ間、何事をか頼み、何事をかいとままむ。我

等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならむ。一日のうちに

飲食・便利・睡眠・言語・行歩・やむことを得ずして多くの時を失

ふ。そのあまりのいとま幾許ならぬうちに、無益の事をなし、

無益の事をいひ、無益の事を思惟して時をうつすのみならず、

日を消し月をわたりて一生を送る、最も愚なり。

謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲の思を觀ぜしか

ば、惠遠、白蓮のまじはりゆるさざりき。しばらくもこれな

きは死人に同じ。光陰何の爲にか惜しむとなさば、内に思慮

なく外に世事なくして、止まむ人は止み、修せむ人は修せよと

なり。

(第百八十八) あるもの子を法師になして、學問して因果の理を

も知り、説經などして世わたるたづきともせよといひければ、

教のまゝに説經師にならむために、先づ馬に乗りならひけり。

與・車持たぬ身の、導師に請ぜられむとき、馬などむかへにおこ

せたらむに、もゝじりにて落ちなむは心憂かるべしと思ひけり。

次に佛事の後酒などすゝむることあらむに、法師のむげに能な

きは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことをならひ

けり。二つのわざやうゝ境に入りければ、いよゝよくした

くおぼえて嗜みけるほどに、説經ならふべきまななく年より

にけり。

この法師のみにあらず、世間の人なべてこのことあり。若きほ

どは諸事につけて身を立て、大いなる道を成し、能をもつき、

學問をもせむと、行末久しくあらます事ども心にはかけながら、

世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前

の事のみまぎれて月日を送れば、ことゝなす事なくして身

は老いぬ。終にものの上手にもならず、思ひしやうに身をも立

たず、悔ゆれども取返さるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪

の如くに衰へ行く。

されば一生のうち、むねとあらまほしからむことの中に、いづ

れ勝るとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、その外は思

ひすてて一事を勵むべし。一日の中、一時のうちにも、數多の

事の來らむ中に、少しも益のまさらむことを營みて、その外を

ばうちすてて大事を急ぐべきなり。いづかたをもすてじと心に

とりもちては、一事も成るべからず。たとへば碁をうつ人、一

手もいたづらにせず、人に先だちて、小を捨て大に就くが如し。

それに取りて三つの石をすてて十の石につくことは易し。十を

すてて十一につくことは難し。一つなりとも勝らむかたへこそ

つくべきを、十までなりぬれば惜しくおぼえて、多くまさらぬ石

にはかへにくし。これをも捨てず、かれをも取らむと思ふことゝ

ろに、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。京に住む人、

急ぎて東山に用ありて既に行きつきたりとも、西山に行きてそ

の益まさるべきことを思ひ得たらば、門よりかへりて西山へ行

くべきなり。こゝまで來つきぬれば、この事をば先づ言ひてむ。

日をさゝぬことなれば、西山のことはかへりてまたこそ思ひ

立ためと思ふゆゑに、一時の懈怠、すなはち一生の懈怠となる。

これを恐るべし。一事を必ず成さむと思はば、他の事の破るゝ

をも病むべからず、人のあざけりをも恥づべからず。萬事にか

へずしては一の大事成るべからず。

人のあまたありける中にて、あるもの、ますほのすゝき、まそ

ほのすゝきといふことあり、渡邊のひじりこの事を傳へ知りた

りと語りけるを、登蓮法師この座に侍りけるが、聞きて、雨

の降りけるに、蓑笠やある、貸したまへ、かの薄のことならひ

に、渡邊の聖のがり尋ねまからむといひけるを、あまりに物

さわがし、雨やみてこそと人のいひければ、無下のことをも仰

せらるゝものかな。人の命は雨のはれまを待つものかは。我も

死に、聖もうせなば、尋ね聞きてむやとて、走り出でゆきつ

習ひ侍りにけりと申し傳へたるこそゆゝしくありがたうおぼゆ

れ。敏きときはすなはち功ありとぞ論語といふふみにも侍るな

る。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思

ふべかりける。

(第百十九段) 大事を思ひたゝむ人は、さがたく心にかゝらむ

事の本意を遂げずして、さながら拾つべきなり。しばしこの事

果てて、同じくはかの事沙汰しおきて、しかゝの事人の嘲や

あらむ。行末難なくしたゝめ設けて、年ごろもあればこそあ

れ、その事待たむ程あらじ。物騒がしからぬやうになど思はむ

には、えさらぬ事のみいとゞかさなりて、事の盡くる限りもな

く、思ひ立つ日もあるべからず。おほやう人を見るに、すこし

心あるきは、このあらましてぞ一期は過ぐる。近き火な

どに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身を助けむとすれば恥をも

顧みず、財をも捨てて去るぞかし。命は人を待つものかは。無

常のきたることは水火を攻むるよりも速に、遅れがたきもの

を、その時老いたる親、いとけなき子、君の恩、人の情、捨て



がたしとて捨てざらむや。  
 (第四十九段) 老來りて始めて道を行ぜむと待つことなかれ。古きつか、多くはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らむとする時にこそ、始めて過ぎぬる方の誤れる事は知らるれ。誤といふは他の事にあらず、速にすべきことを緩くし、緩くすべきことを急ぎ、過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひあらむや。  
 人は唯無常の身にせまりぬる事を、心にひしとかけて、つかのままも忘るまじきなり。さらばなどかこの世の濁もうすく、佛道を勤むる心もまめやかならざらむ。昔ありけるひじりは、人の來りて他の要事をいふとき、答へて曰く、今火急の事ありて既に朝夕にせまれりとして、耳をふたぎ念佛して、終に往生を遂げたりと、禪林の十因にはいへり。心戒といひけるひじりは、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、静かについひけることだになく、常はうづくまりてのみぞありける。

# 一〇 案山子

## 1 解題

「柳樽」所載の川柳十三句を採つた。  
 川柳は江戸時代の後期に出現した文學で、専ら滑稽洒落を詠出する一種の詩形である。もと前句附(後に註する)の一轉したものであつて、人生の弱點を諷刺し、世態の缺陷を衝き、特に



落想の奇抜を尙んだ。その形式は俳句と同じく五七五の三句十七字である。中には七七五、又は五七七などのもあるが、それは例外である。しかしその趣は俳句とは自ら異なり、切字・季等の制限はない。

前句附は初は多く京阪地方に行はれたが、貞享・元祿の頃から江戸にも行はれ、寶曆の頃より前句附の附句は一句立として作られる傾向を生じた。その頃前句附の點者に柄井川柳といふ者があつた。彼は點者中群を抜き、夙にその機を察して附句の一句立を唱へ、前句附は附句のみで十分面白く傳へることが出来る」と説いた。かくて、明和二年始めて俳風柳樽の初編を出して、前句附の中から、句意の獨立したもので巧に人生の弱點を捉へ、皮肉な諷刺を試みたものを選んで載せた。柳樽には悉くその作者の名を缺いてゐるが、その中には川柳の作も入れられたと思はれる。それから年毎に一冊を出し、その風調は市井の間に大に行はれた。

川柳はもとの名をそのままに、これを前句と呼んで、別に新ら



しい名をつけなかつたが、川柳の點じた句であるから、世間ではこれを川柳點といひ、又略して川柳と呼び、遂にはその體の句を悉く川柳と呼ぶやうになつた。

前句附については、佐々政一著、近世國文學史の中に「芭蕉の歿後、其角の俳諧は漸く遊戯的に傾いて、さしにも幽玄であつた蕉風を洒落化して了つた。かの『十六夜や龍眼肉のから衣』といふが如きがその一例で、十六夜は明月の夜を起き盡くした眠たさに、龍眼肉のやうな眼をしてゐるといふ洒落である。これを所謂洒落風と稱して、高弟の淡々・湖十なども、最もそれを得意とした。續いて化鳥風とか五色墨とかいふ流派が、皆その俗化・洒落の風を助勢したので、江戸の俳壇は一時謎々の如き調子になつた。かくてもなほその發句らしい形式を採ることが面倒であるので、この謎がやがて更に作り易い前句附の流行に移り去つたのである。だから上方の前句附はなほ次の如きものであつた。

寝てゐる顔をつく／＼と見る (前句)

二人目の醫者の藥をたのみにて (附句)

棄てるとは知らぬ我が兒と嘆く母 (附句)

前者は病人の顔、後者は嬰兒の顔を見ると附けたので、頗る俳

諧の附句に似てゐるが、江戸に入つては、その前句をなるべく意味の漠然たるものとして、これに對して、争つて意想外なる趣向を立てようとする趣は、謎々に髣髴たるものがある。

美しいこと／＼ (前句)

日本の眞中へ来て化けるなり (附句)

江口では佛と同じ鍋も喰ひ (附句)

前者は田舎女の傾城に化けた様で、後のも遊女の後身である。その材料も多くは俗間の風俗であつて、月花の風流とは甚だしく遠ざかつた。且つその風俗の寫實が日に日に滑稽的方面に向つて、果はその前句を取り去つても、一句として滑稽的風俗詩とも稱すべきものを作るに至つたのが謂はゆる川柳である。」と記してある。

## 2 編纂の用意

江戸時代の後期に於て、特に江戸の平民文藝の一として發達した川柳について、その特有の内容即ち滑稽・諷刺・皮肉の意を寓した趣味と、その形式とを理解せしめ、延いては、その發生に關する事情や、江戸時代の平民生活の人情・風俗・批評眼等を窺はしめ、併せてそれと國民

性との關係等をも知らせたいと思ふ。

## 3 要旨

俳諧から轉化して來て、俳句と共に、我が國文學の中で最も短い形の詩として弄ばれてゐる川柳といふものに就いて、その妙味を知らしめようといふのである。滑稽・諧謔・諷刺・皮肉といふ如き内容事實が、機智・頓才を以て滑脱自在に吟じ出されてゐる。人の弱點・短所を剔抉し、或は社會の裏面を發いて痛いところを刺す如き思ひをさせるを以て特色とするが、またよく無邪氣にいろいろのかしみを捉へて、人を笑はせずにはおかない。

## 4 取扱上の注意

□「川柳のわからぬやうな人間には、江戸の文學はわからない」と、江戸文學の或通人は言つてゐたが、豈たゞに江戸文學のみならんや。およそ日本文學の中には、上代から近世まで、滑稽諧謔の趣味が脈々として一つの流をなしてゐると謂はれよう。これらの趣味は日本の國民性の快活な一面の表現でなければならぬ。

□本課に採られた川柳も、特別な故事などの注釋を要するものは例外として、他は、その意味がわかると同時に、そのをかしいわけは説明が出来なくとも、自然と生徒の笑ひと興味とを催さしめるであらう。即ち、注釋が必要なのは、主として歴史的或は傳説的原據に因んで吟ぜられたものである。或は社會的の特別な風俗・習慣がわからない爲に、その妙味が納得されないものもあらう。これらを明らかにしてやるのが教授者の任務である。

□しかし、實際の取扱に當つては、最初からその故事や習慣、その句のをかしみまでもを説いてしまつては曲がないこと勿論である。川柳の解釋は、確かに生徒が有する頓智のメンタルテストとなる。血のめぐりの速いか否かの検査となる。

□「よつびいて」は、「ひようと放つ」といふ軍記物の用語を知らぬ生徒には、そのをかしみはわかるまいが、「手の甲へ」は、「煤はらひ」の時の手のひらを考へさせれば、自然とをかしくなる筈である。「清盛の醫者」も、平家物語などで、清盛の最期の有様を知らぬ生徒にはむづかしか



らうが、「武藏坊」については、七つ道具を憶ひ起させればわけなく微笑が催されて来るであらう。

【右の外、何れの解釋にも一隅をあげて三隅を以て反させるやうに、或はメンタルテスト式に扱つて行く用意が必要である。

【泣く／＼も】は、人間の利欲にきたない事を吟じ出したものとして、殊に有名な川柳であるが、生徒には経験があるものは少なからう。

【狩場々々へ外科を呼び】は、是非とも、「夜討會我」の一節と結びつけて考へさせるやうにしたい。

【あやめ葺き】や「祭」には、古來の風俗の説明が必要とされ、「本降になつて」には、例の「急がずばぬれさらましを」といふ道歌を引く必要があらう。

5 設問

- 1、この中で、最も滑稽だと思ふのはどれか。
- 2、人間の弱點を最もよく捉へてゐるのは。
- 3、言葉をよく利用したと思はれるのは。
- 4、最もふざけてゐると思はれるのは。

- 5、俳句と比べると、どんな點が違ふと思はれるか。  
イ、内容上から考へて見よ。  
ロ、形式上から考へて見よ。
- 6、この課に擧げた川柳の外に、各自に知つてゐる川柳を披露して見よ。

6 釋義

【よつびいてひようと放さぬ案山子かな】

那須の與一さながらの武裝、よつびいてひようと射るかと思つたら、なんのこと、いつまでも放さぬ案山子だ。戦記物に語を借りた手際が面白い。殊に平家物語を讀んで那須與一の條の緊張した場面を知つてゐる人にとつては、よけいにその輕妙な滑稽を感じしめるであらう。天地神明に祈つて命をかけて的を射る與一が「よつびいてひようと放つ」矢は「あやまたず、扇の要際一寸ばかりおいてひいふつとぞ射切つた」ので、實に勇壯な場面であるが、この案山子武者は雀にさへ馬鹿にされる。しかもいでたちだけはこと／＼しい。うまい所を捉へたものである。

【手の甲へ餅を受取る煤はらひ】

朝から働き通した煤はらひ、普段よりもよけいに腹がへる。お茶の時刻になつても坐つてゆつくりとお茶うけを頂戴するわけにいかぬ。そこで立ちながらであらう。しかも一々手を洗つても居られぬので、比較的汚れの少い手の甲を出してお茶うけの餅を受取るといふのである。顔も煤で汚れてゐようし、そつと手の甲へ受取つた餅をおとさぬやうにたべてゐる掃除姿の男女のさまは、たしかに一種の戲畫で、微苦笑を禁ずる能はぬものがある。

【轉寐の顔へ一冊屋根にふき】

「轉寐」(ウタ、ネ)とは、蒲團も敷かず転がつてうとうとと眠ること。暑さのはげしい頃、ごろりと仰向けになつて本を讀んでゐると、いつの間にか睡くなつて、うとうとと寐込んでしまふ。今まで讀んでゐた本は、綴目を棟にして、左右に屋根を流したやうに顔の上に載つてゐる。昔も今もかはらぬ夏の晝寐風景である。

【隣へも梯子の禮にあやめ葺き】

五月の端午の節の前日、軒に菖蒲と艾とを葺くのである。生憎我が家に梯子の持合はせがないので、隣の梯子を借りて葺き終へた。さて梯子借用の御禮に何をがなお返へししようか、丁度恰好のものもないし、仕事序でもあるしといふので、隣の軒へも菖蒲を葺いて、それで手輕にお禮をすましたといふのである。

「あやめふき」のことは一條兼良の公事根源に

「六府、あやめの輿を南殿の階の東西にたつ、又時の花を折りそへて同じく置く。四日は朝餉の庭にこれをたつ。主殿寮所々に菖蒲ふく。天平十九年五月より詔ありて、百官諸人悉く菖蒲の鬘をかくべし。かけざらむ者は、宮中に入るべからずと定めらる。弘仁式にも菖蒲艾花など三日は早旦に南殿の前に置く。」とある。これに對する關根正直の新釋に

「……所々に菖蒲を葺く」とは、南殿を始め、諸殿舎の軒に菖蒲を葺くにて、これ主殿の官人の役なり。かくするは歳事記に五月五日艾をむすびて、人の形の如くして戸上にかくれば毒氣をはらふと見えたり。菖蒲を軒に挟み、



髪としてかくるも、かゝる意なるべし。」とある。

【おさへればすゝき放せばきりくす】

きりくす<sup>／＼</sup>すが鳴いてゐる、どれ捕へようと抑へて見れば芒の葉だ。えゝ馬鹿らしい、と放せば、きりぎりすはその下からビヨーンと遙か向ふの方へ跳んで逃げる。

【おさへれば】「はなせば」と人間の動作だけを描いて、あとは「すゝき」「きりくす」の二つの名詞があるだけであるのに、きりくす<sup>／＼</sup>と、それを捕らうとする人間の姿態とが、さながら目に見えるやうである。

【迷惑な顔は祭で牛ばかり】



「祭」は四月の中の西の日に行はれた賀茂の祭。一に葵祭と呼ばれた盛儀である。葵の花を美しく飾つた牛車が賀茂の社へ参詣する。また物見のための牛車も車立ての場所を争ふほど押し寄

せてくる。車に乗つた人、牛飼ひ、徒歩の見物衆、いづれもとりく<sup>／＼</sup>に装つて今日の祭りの楽しさ喜ばしさに輝いた顔をしてゐる中に、たゞ牛だけが、重い車をひきつづ、周囲の混雑をいかにも迷惑さうな顔で澁々と動いてゐるといふのである。その一點の異色をすばやく看取した機敏な眼力は推稱すべきものである。

【本降になつて出てゆく雨やどり】

外出の途中俄雨に襲はれる。「やあ降つて来た、どうしよう、とにかくよつとこゝの軒下で雨やどりをして、霽れるのを待たう。」と雨を避けたが、さて中々止まない。今に今にと思つてゐると、ますく<sup>／＼</sup>ひどくなりさう。「仕方がない。」とあきらめて雨中を急いで行くと、雨はもう本降りになつてゐるのだ。これならいつぞ降りはじめの時に歸るのだつたと悔いても、もうおそい。

【福祿壽十人前の頭痛がし】

「福祿壽」は所謂七福神の一。短身・長頭で髯が多く、杖に經卷を結び、鶴を伴つた像である。福と祿と壽との三徳を具へたところを畫いたものであるといひ、又支那

宋の嘉祐中の道士天南星の化身であるともいふ。その福祿壽の特長は何を描いても先づその頭にある。あの長大な頭部は優に常人の十倍もある。随つて、頭痛の際にも十人前の頭痛がするであらうとは、蓋し道理にかなつた滑稽である。

【泣くくも良い方を取る形見わけ】

「うちのお母さんも、もちつと生きてゐて下さつたら……こんなに早くなくなれると知れてゐたらあゝもしたらう、かうもしたらう。」などとしきりに涙を流しあつてゐる子供や近親の女。さて形見分けとなると、急に醜い慾が出て、「それよりかこの方がいゝは」「わたしにこちらを下さいよ」「いゝ柄だは、一生大切にしておよ」などと、それそれよい物へと手を出す。「大切にします」はよいが、その慾はあさましい。人情の弱點を巧に喝破してゐる。

【毎夜出て人をつかんで食ふ按摩】

夜毎に出て人をつかみ食らふとは、羅城門の鬼かと思ひきや、笛を吹きながら、杖にたよつてやうやく歩くあはれな按摩であつた。なるほど人をつかんで食つてゐる

に違ひない。實に人を食つた作者である。事々しい事を言つて、人の意表に出てゐる。

【清盛の醫者ははだかで脈をとり】

平家物語からの着想。清盛は熱病で死んだ。平家物語によれば「入道相國病みつき給へる日よりして、湯水も喉へ入れられず、身の熱きことは、火を焚くが如し。臥し給へる所四五間が内へ入る者は、熱さ堪へ難し。たゞのたまふ事とは、あたく<sup>／＼</sup>とばかりなり。まことにたゞごととも見え給はず。あまりの堪へ難さにや、比叡山より千手井の水を汲みおろし、石の船に湛へ、それに下りて冷え給へば、水おびたゞしう沸き上つて、程なく湯にぞなりにける。もしやと笥の水をまかすれば、石や鐵などの焼けたるやうに、水ほとばしつて寄りつかず。おのづから當る水は、炎となつて燃えければ、黒烟殿中に充ち満ちて、炎うづ巻いてぞ上りける。」といふ程の物凄さである。これでは醫者も裸にならねばなるまい。

【夜が明けて狩場狩場へ外科を呼び】

本巻第四課「夜討會我」を想起すると解釋は極めて容易



である。曾我兄弟が父の仇敵工藤祐經を討つた翌朝、頼朝幕下の狩場では、そこでもこゝでも外科醫を呼んだことだらう。それは昨夜仇討の名乗をあげた兄弟に向つて挑みかゝつて、多数の手負ひや死人が出来たのだから。

【武藏坊とかく支度に手間がとれ】

武藏坊とは例の叡山西塔の山法師武藏坊辨慶で、源義經股肱の勇士である。彼は武勇豪快をもつて聞えてゐるが、同時にまたその帯ぶるところの七道具は戦陣に異彩を放つてゐた。後世武者繪かきの好んで題材としたところである。その七道具を身に帯するについては、さう／＼簡単にはまゐらぬ。さればこそとかく支度にひまがかゝつたと、川柳子に乘せられたのである。

こゝにいふ七道具とは、具足・刀・太刀・矢・弓・母衣・兜の七つの武具で、辨慶或は朝比奈三郎の如き勇力ある者が背負つて戦陣に臨んだといはれてゐるものである。

【義貞の勢はあさりを踏みつぶし】

元弘三年、新田義貞は義兵を擧げて、北條高時に矛を向けた。高時は弟の四郎左近大夫を將として義貞を伐たし

めたが、北條方は大敗して、鎌倉へ退却した。これを追うて義貞は同月十八日、鎌倉の西方から迫り、七里ヶ濱を経て、稲村が崎を廻つて鎌倉へ突入しようとした。傳説には、時恰も潮が満ちてゐて大軍の通過が不能であるので、義貞は帯びてゐた黄金作りの太刀を海に投じて海神に祈つた。すると忽ち潮が退いて干潟となつたので、そこを大軍は破竹の勢で亂入したといふ。この川柳はその傳説を滑稽に見立てたので、今迄海水のあつた俄干潟だから、定めしたくさんのあさがゐたであらうから、その上を突入する義貞の大軍はあさを踏みつぶして行つたことであらうといふのである。

### 7 参考

#### 1 川柳に関する評論

本課に載せた川柳の大半の鑑賞批評、又一般に川柳といふものの本質や、特色や、その國文學として江戸時代の人たち乃至今日の吾々の生活とどういふ風な關係があるかについては、下に掲げた金子元臣氏の「川柳點」の一文が大いに参考となるであらう。

#### 川柳點

金子元臣

川柳點は、實に、剃刃の如きか。觸るゝもの、皆斷れ、近づくもの、皆傷く。語句簡勁にして、直に、人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り。滑稽、頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に、輕薄なる、鄙俚なる調なきにしもあらねど、要するに、寸にして珍なるものなり。いで、左に、その二三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者、年賀に来て、御慶帳の記名に因り、「さらば、來ぬ分にして下され」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は、帳の代に名刺受を玄關に出す。これも、あがるなといはぬばかりなり。

竹の子は盗まれてから番がつき

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは、附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり。訓誡ともなる。

おさへれば薄はなせばきりぎりす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が、「餓蚊取三渴虎」と書きしをいみじき手がらのやうに驚ける人、もし、この句を見れば何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語。急ぎ

てもわろし、急がでもわろし、とにかく考へものなり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾をかきしきなり。塙檢校が、「さて／＼、目あきは不由な」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢文に、捨假名、反點の、左右に、うるさく附き纏へるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、「四角な文字に灸をすゑ」といはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て、肝を潰し、臺を見て、胸撫でおろすらんをかきしよ。近來は、中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乗せたる類のこと多し。あながちに、この狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくるゝ旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く泣くもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘に酷なる心地す。しかし、事實なるをいかにせん。かの赤穂の城渡に、お金配分を唱へし小野九太夫は、この露骨なるものか、

かくの如く、川柳點は、尋常茶飯の出來事を捉へて、よく滑稽化するのみならず、又、最も眞面目なるべき故事・傳説・史實等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

戸隠も神樂のあひだ髭をぬき



岩戸の細目に開くまでは用のなき戸隠明神なるを思ふべし。鏝に髭ぬくひま人の所作を神代に附會したる、働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに、名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因なり。天日に焦して、顔だけは黒めたれど、紀行までは、手が届かずやありけん、物に、その沙汰なし。作者のつけ目は此處なり。但、袋草紙に、「一度においては實か。八十島の記を書けり。」とあり。何時も室内旅行家にはあらざりけらし。

忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きとめしは油坊主なるを思ふべし。わざと、聯想の一階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、容易に及び易からず。

その暗さ準太櫻に衝きあたり

盛衰記、頼政、鶴を射る條に、「黒雲とは見たれども、天は實に暗し、いづこを射るべしと、矢所さだかならず。」とあり。乃ち、郎等準太が、左近の櫻に鼻衝きあててまご／＼する一場の喜劇を案内し來れるなり。作者は、いかなるへらきんぞ。

時致は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、遂に、百姓の駄馬を奪ひて、大磯に駆けつくるは、曾我の物語中、出色の快譚なり。これを圖にして、大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、この作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の坂で二度ころび

戸塚の坂は、鎌倉入の一難處。元來、乗力なき源左が瘦馬さぞや越えなづみしならん。さるを、二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風は飛びあがり

淡合の妙を見る。主題の蛙をいはいで、突然に仕立てたるところに、一種の面白味あるなり。

釣れますかなどと文王そばに寄り

流石の聖人文王と、奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには、極めて平凡ならざるを得ず。たゞ、「など」との語、胸に一物ある趣を狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。(落合直文編、中等國語讀本)

2 参考書

川柳の註解書・参考書として次のやうなものがある。

- 柳柳評釋 沼波壇著
- 新撰川柳狂詩集(短評がよい) 武笠山椒選、有朋堂文庫本
- 俳風柳柳通釋 武笠山椒著
- 川柳語彙 廢姓外骨著
- 柳柳全集 國書刊行會本

一一 日本の庭園

龍居松之助

1 解題

龍居松之助著「庭園と日本精神」の第九章、「歐米風庭園の日本化」と日本庭園の再検討時代一を採録したものである。

「庭園と日本精神」は文部省に於て企調した日本精神叢書の一部をなすもので、日本の庭園が千數百年の間に、常に外國からよきものを取り來つて、これを日本化したといふ、日本人の文化に對する寛裕なる態度を明かにせんとしたものである。

昭和十一年、東京、日本文化協會出版部發行。

2 作者

龍居松之助 タツキ マツノスケ。

明治十七年(二五四四)東京に生れた。歴史家であり、殊に庭園・造園の史的的研究に精通してゐる。現に東京高等造園學校長の職に在る。

3 編纂の用意

日本精神の闡明といふことは近年我が國上下の重大關心

事であり、又目下に於ても極めて必要なる事である。併し日本精神といふものは抽象概念として高踏的に遊離してゐるものでなくて、それは何物かに形をとつて顯現してゐるのである。この具體的顯現からして誠實に正確に日本精神を把握することは日本精神究明の最上の方法である。本課はかゝる見地から、古來の造園にあらはれたる日本精神について説述したものであつて、如上の研究態度に一つの模範を示すものとして、生徒の參考となる點が少くないであらう。

4 要旨

明治より大正にかけての我が國公園造營様式及び庭園造營様式の變遷を説明し、そこに看取せられる日本精神の顯現に及んだものである。



### 5 概説

第一節(六五頁—六六頁二行)

明治初年より三十年頃までの歐米文明謳歌時代に於ける建築様式に著るしく歐米風の加味されたこと。それにもかゝらず庭園にはたいした歐米化の行はれなかつたこと。

第二節(六六頁三行—六七頁一行)

明治時代に發達した公園の大部分は在來の日本式庭園の解放されたもので、新に歐米風に造營されたものは日比谷公園であること。

第三節(六七頁一二行—六八頁九行)

その日比谷公園も地割は歐米風であるが、細部に至つては日本風が多いこと。

第四節(六八頁一〇行—六九頁三行)

大正十二年關東震災後に出來た東京市の小公園は日比谷公園に比して歐米風の要素が多くなつたこと。

第五節(六九頁四行—七〇頁)

公園に歐米風の趣が多くなると、それにつれて再び純

第六節(七〇頁五行—終)

日本風の要素が一部に採入れられるやうになり、日本本來のものの再檢討が行はれるやうになつたこと。

一般の庭園についても大體公園と同じで、明治末から大正にかけては立派な歐米風のものが出来たが、必ずしも完全に歐米化したわけではない。しかし材料、手法等は寛裕に歐米のものを取入れて、これを日本庭園の中に織込むことが新しい傾向となつたこと。

### 6 取扱上の注意

□庭園といふ特殊な問題であるけれども、こゝに論ぜられてゐる限りに於ては、特殊な専門的知識を殆ど要せずして理解出来る事柄であるから、通讀的に取扱つて、その説述された内容を把握することを以て足れりとしよう。

■たゞ庭園造營法の變遷に見る、明治以後の歐米化、日本固有のもの保存、日本の再認識といふやうな點は、大體に於て、全文化に互つても同様な變遷を経てゐるのであつて、こゝに庭園といふ物へ日本精神の弛張が顯現してゐるのである。この點をよく理解せしめたい。

### 7 設問

- 1 明治初年に於ける歐米化の事實について既知既習の事をあげて見よ。(教育勅語御渙發の由つて來りし事どもを想起せしむ)
- 2 關東大震災による日本固有文化の消長について何か考へる所があるか。
- 3 こゝにあげられた公園、庭園にあらはれた、歐米化、日本固有のもの勢力の消長と、明治から現代に至る日本精神弛張の關係とを考へて見よ。

### 8 釋義

【鎖國政策】 サコクセイサク。外國との通商・交通を禁ずる政策。政策とは國家が國民民福を圖るためにとる手段方法。政治の方策。

【開國主義】 カイコクシユギ。自國の港を開き、外國と通商貿易を行ひ、且つ外國の文明を採り入れることを利益とする主義。主張。

【文化】 ブンクァ。 (一)威力刑罰を用ひない教化。(二)學問の

進歩。(三)哲學では、與へられた自然を材として人間が一定の目的に従つてその理想を實現しようとする過程の總稱とする。こゝは文明開化の意で、人智が進歩し、百般の事物が完備し、風俗の最もよいことをいふ。

【日に月に】 毎日毎日、毎月毎月。

【輸入】 ユニフ。(一)はこび入れること。(二)外國から貨物を内國へ運び入れること。(三)思想文物を外國から取り入れること。

こゝは(三)の意味である。

【影響】 エイキヤウ。(一)人の姿と聲。

顔延之の詩に、「影響豈不<sub>レ</sub>懷、自<sub>レ</sub>遠每相匹」。

(二)形あれば影あり。聲を出せば響があるやうに、物事が緊密にさしひびき感應し合ふこと。

書經の大禹謨に「惠迪吉、從逆凶、惟<sub>レ</sub>景響」の校勘説に、「今本尙書作「影響」」

こゝは(二)の意味。

【風俗】 フウゾク。(一)世間に古くから馴れ行はれ來たつた世のならばし。(二)その地方に行はれる詩歌。(三)身ぶり。



そぶり、(四)身なり。よそほひ。こゝは(一)の意味。

【謳歌】 オウカ。衆人が聲を揃へてうたふこと。徳風をたへること。

孟子の萬章上に「謳歌者、不謳歌堯之子、而謳歌舜。」

【建築】 ケンチク。土・石・木・金などを使用して居所・橋梁等を作ること。

【生活様式】 セイクツツヤウシキ。生活のしかた。日常生活の型式。

【適應】 テキオウ。(一)かなひあてはまること。(二)人性が外圍の事情に影響されて、その作用傾向を改めること。又その結果。こゝは(一)の意味。

【官公衙】 タンコウガ。役所のこと。

【貴族】 キゾク。社會の上流に位して政治上の特権を享有する階級に屬する人。

晋書の列女傳に「若連姻貴族、將來庶有ニ大益。」

【卓子】 タクシ。机又は食卓。テーブル。こゝはテーブルと讀んでもよい。

【所謂】 イハユル。「言ふ」に助動詞「ゆ」のついて出來たも

の。後に助動詞「ゆ」は亡びたので、「いはゆる」は一語となつた。言はるゝ。世に言はるゝ。常に云ふ。の意。

【舶來物】 ハクライモノ。海外より輸入した物品。舶は舟の意である。

【傾向】 ケイカウ。或る方向に進まうとすること。かたむき。

【馬車廻し】 バシマハシ。車寄(クルマヨセ)と門の間にある前庭の中心に設け、車を廻すために圓形又は楕圓形に作つたものをいふ。

【勾欄】 カウラン。欄干。手すり。

【注目】 チュウモク。目をつけること。注意してみることに。注視と同じ。

晋書の孫惠傳に「天下喁々、四海注目。」

【發達】 ハッタツ。進歩して完全の域に向かふこと。

【境内】 ケイダイ。(一)さかひ、しきりの内。

韓非子の内儲説上に「君雖問境内三人、猶不免於亂也。」

(二)寺・社の敷地内の稱。

【計畫】 ケイクツク。企て。もくろみ。企圖。物事の仕組

を立てること。

史記の陳丞相世家に「誠臣計畫有可采者、願大王用之。」

【上野公園】 ウヘノコウエン。上野恩賜公園。東京市下谷區寛永寺の境内を主とし、約二十五萬三千坪。櫻樹が多い。藤堂侯の邸宅があつて、その領地伊賀上野に因んで上野と稱した。博物館・學士院・科學博物館・美術館・動物園等がある。

【浅草公園】 アサクサコウエン。東京市浅草區にあり、浅草寺觀音堂を中心に六萬四千坪の廣さある公園。雷門から仁王門に至る間を仲見世と稱し、東京第一の繁昌地である。

【芝公園】 シバコウエン。東京市芝區にある。もと増上寺の境内で山内と稱したが明治六年公園とした。増上寺を挾んで南北に徳川二代將軍秀忠をはじめ數代の廟所がある。また東照宮が鎮座してゐる。

【築造】 チクゾウ。きづきつくる。

【日比谷公園】 ヒビヤコウエン。東京市麴町區日比谷にある洋式公園。新舊音樂堂・運動場・兒童遊戯場・築山等

がある。一隅に市公會堂や圖書館がある。

【地割】 チワリ。土地の割當。地面を區劃すること。

【目新しい】 メアタらしい。見る目にあたらしいめづらしい。

【趣】 オモムキ。(一)物事についての感興。風情。趣味。(二)模様。事情。こゝは(二)の意味である。

【平面的に見る】 地圖や平面圖を見るやうに見ること。

【手法】 シュハフ。一般に藝術製作の場合に作者の用ひる仕方・やり方。特殊な技巧などに對していふ。

【模し難い】 モシガたい。まねがたい。

【石組法】 イシグミハフ。石をつみ上げるしかた。

【植栽法】 ショクサイハフ。樹木を植えたり栽培したりする法。

【江戸時代】 エドジダイ。徳川時代、家康が征夷大將軍となつた慶長八年(二二六三)から十五代慶喜が大政奉還をした慶應三年(二五二七)迄をいふ。

【嚴格】 ゲンカク。おごそかにたゞしいこと。

【在來】 サイライ。以前から在るもの。



【四阿】 アヅマヤ。庭園の中に建てておいて四柱で板屋根を四方に葺下しにして、四面に壁がない。

【照明装置】 セウメイサウチ。電燈によつてよい明るさを得ることの出来るやうにしたしかけ。

【就中】 ナカンヅク。中に就きの音便。その中取りわけで。殊に。

【餘裕】 ヨユウ。(一)ゆるやかでこせつかぬこと。

孟子公孫丑下に「則吾進退豈不綽綽然有餘裕哉。」

(二)ありあまつてゆたかなこと。こゝは(二)の意味。

【起伏】 キフキク。高低あること。

【趣味】 シュミ。感興を惹き起すべき状態。おもしろみ。おもむき。あぢはひ。

水心題跋に「怪偉平易之中、趣味在言語之外。」

【景觀】 ケイクワン。(一)景色。風景美。眺望。(二)自然と人文とが種々交錯してゐる現實の態様。

【有栖川宮記念公園】 アリスガハノミヤキネンコウエン。高松宮家御下賜の土地に造営した公園。東京市麻布區にある。

【逍遙】 セウエウ。気まかせにこゝかしこと歩くこと。

【萬能】 バンノウ。すべてに効能があること。

【本來】 ホンライ。(一)もとより。初めより。從來。元來。(二)あたりまへ。通常。こゝは(一)の意である。

【再検討】 サイケンタウ。しらべなほす。研究しなほす。

【理解】 リカイ。道理を解き分けた。のみこみさとると。

宋子の林光朝の傳に「光朝未嘗著書、惟口授學者、使之心通理解。」

【技術者】 ギジュツシヤ。技術にすぐれた人。

【忠實】 チュウジツ。まめやかでまことなること。

史記の李廣傳「余賭李將軍……彼其忠實心、誠信於士大夫也。」

【遜色なし】 ソンシヨクなし。劣つた様子がない。

【優秀】 イウシウ。すぐれ秀でてゐること。

晋書の謝萬傳に「才器優秀、雖器量不若、爲賓客。」

【調和】 テウワ。ととのへやはらげること。

漢書丙吉傳に「三公典調和陰陽。」

有栖川宮記念公園

同公園の一部で、純日本風様式に造られた箇所。

【拒む】 コバむ。

【寛裕】 クワンユウ。心ひろくゆるやかなこと。

韓詩外傳に「孔子曰、德行寛裕者、守之以恭。」

【テラス】 terrass. 屋上庭園。露臺。張出し。

【プール】 Pool. 游泳池。遊泳場。或は堀池。

【彫刻】 テウコク。ほりきざむこと。

【巧に織込み得る】 タクミにオリコミウる。うまく配置することが出来る。

【寧ろ】 ムシロ。どちらかといへば。

【要素】 ヤウソ。(一)事物の成立などに必要な條件。必要な根源。(二)それ以上簡単な形に分析出来ないもの。こゝは(一)の意味である。

9 挿圖

芝公園

芝公園の一部で、東京の日本風を主にした箇所である。

日比谷公園

同公園の一部で、日本風の他に、洋風の噴水の配置されてあるところ。



## 一二 作文趣味

高橋 箒 庵

### 1 解題

「蘇峯先生古稀祝賀知友新稿」の中から、箒庵高橋義雄作の「作文趣味」と題する一文の前半を採録したものである。

「知友新稿」は徳富蘇峯が昭和七年一月二十五日を以て古稀を迎へるのをことほぐために、その門下生が相謀り、蘇峯を繞る現代各方面の知友より、文章・繪畫・詩歌の寄稿を乞ひ、これを一冊子として、纏めて蘇峯に獻じ、且つ一般へも發賣したものである。文章九十八篇、繪畫十八點、詩歌十二章、壽印一、小計百二十七、之に題辭七章を加へて、百三十六家を網羅したものである。

### 2 作者

高橋箒庵 タカハシ サウアン。

名は義雄。文久元年(三三)八月水戸に生れた。明治十五年(四三)慶應義塾を卒業して實業界に投じ、三井銀行に入り、後三井吳服

### 3 編纂の用意

店理事・三井鐵山合資會社理事・王子製紙會社専務・倉谷鐵山會社監査役等に歴任した。又茶道に通じ、斯界の大家を以て目せられ、數多の著書がある。昭和十二年歿、年七十七。

一つには出來上つた文章を正しく鑑賞する爲、一つには文章を成す爲に適當な指導を與へる教材であり、且現代文として極めて豊富な語彙を含んでゐるので、解釋上の種々の作業を豫想し得る教材である。

### 4 要旨

古來の有名な詩人・文章家が、その苦心彫琢の後に名文・名句を得た際に於ける心の歡喜のことを想像して、作文趣味の高雅・深妙なることを論述したものである。一面から見れば文藝上に於ける趣味談として、讀者を快く引きつけるものであり、又他面から見れば、文章詞句の推敲・鍛鍊に於ける鞭撻獎勵ともなり得る。いづれの方面



からするも、國語科に於て讀む文章に對する鑑識力養成への示唆として、又作文に於て作文態度に對する教示として味讀に價する教材である。

### 5 概説

第一節 (七二頁—七四頁五行) 作文趣味は、文藝趣味の中でも他に比類のないほど高雅・深妙なものである旨をいひ、大井廣貞・賈島・都良香等の例話を引いた。以上は序説である。

第二節 (七四頁六行—七六頁四行) 平安朝より鎌倉時代にかけての文藝家の間に於ける作文趣味に關する逸話をあげた。即ち能因・西行・俊成・定家などの詠歌について取材した。

第三節 (七六頁五行—七六頁二行) 徳川時代に及んで、主として芭蕉の句作に關する美談をあげた。

第四節 (七六頁末行—八〇頁二行) 明治時代に入り、作者の師なる小出繁翁の歌がたりと、山縣含雪公の吟詠について記した。

第五節 (八〇頁三行—八一頁三行) 同じく明治時代の例

として、小説家尾崎紅葉の文章經營談を試みて結尾とした。

### 6 取扱上の注意

「作文趣味」といふ題については、本文の冒頭に於て説明がしてあるが、なほ、生徒をして學校で課せられる作文のこととのみ思ひ込ませないやうに、くれぐれも注意しておく必要があらう。少し誇張的ではあるが、文藝創作談とでもいふべき内容であることに、教授者も先づ留意すべきであらう。

「作文といふ語には、とかく、修飾といふやうな意味も聯想されがちである。本課の話も、わるくすると、文でも歌でもとにかくその作品を飾る爲めの苦心談かの如く受取られるかも知れない。もし、さう受取つたならば、話の根本を誤解し、作文道の本末を顛倒したものである。この一課に例示された人々は、必ずしも自己の作をいはゆる必要以上に修飾しようとしたのではない。自己の感情思想を、如何にせば偽りなく發表し得るか、如何にせば遺憾なく表現し得るか、如何にせば會心の作を得るか

と苦心して、それが得られたといふに於ての話である。作文は決して、不必要な、修飾或は内容に勝つた外形を整へる爲に、苦心を求めものではない。これは勿論のことであるが、これがわかつてゐないと、この課の主意を誤解しないとも限らぬので、一言したのである。

「昨今に至つて「文章讀本」の如きものが現れ、一二の文學者が又文章談を試みてゐるやうであるが、一體、現代の文學者は文章に經營の勞を積むことをしない。明治時代の文學者と大いに異なる所である。話言葉で綴るから、文章に苦心經營が不要と思ふならば大變な誤解である。談話そのもの、口語そのものが、なか／＼お互の感情思想をびつたりと表現してはくれない。そのことを思へば、口語體であるからといつて、決して苦心が減するわけのものではない。本課は、作文の課業と結びつけて、かゝる點をも考へさせる材料としたい。

### 7 設問

- 1 次の語句の意味を問ふ。  
イ 會心の文字。

- ロ 愈、窮して而る後に工なり。
- ハ 人には自然の歌口がある。
- ニ 錦心繡腸。
- 2 能因の「白河の關」の歌についての話は賞すべきであらうか。
- 3 俊成の桐火桶の話については、どう思ふか。
- 4 この課の例の外に、これに似た例を知つてゐるか。
- 5 書取練習。
  - イ 逸話。洗煉。推敲。碩學。慘澹。靜坐。枚舉。雅號。
  - ロ 珍寶を弊履の如く棄去る。
  - ハ 前人未發の名句を得んと努力す。

### 8 釋義

【文藝】ブンゲイ。普通に「文學」といふのと差別なくして用ひられる。實際の具體的作物としては、詩歌・文章・小説・戯曲等をいふ。  
近時「文藝學」が學界の問題となるやうになつて、文藝といふものの考察があらためて検討されるやうになつ







は一層簡單になる。すなはち「文藝とは人間の意識の言語による美的表出である。」といふ言葉でつくされるのである。

(石山徹郎——文藝學概説)

【多端】 タタン。(一)事件の数多きこと。(二)仕事のかすの多いこと。多忙なこと。各方面にわたること。

漢書の東方朔傳に「朔恢達多端、不名一行。」

【高雅】 カウガ。高尚で風雅なこと。

【深妙】 シンメウ。奥深くして、すぐれたおもむきに富むこと。

【國風】 コクフウ。その國のはやりうた。その土地の俗語。

詩經に「國風」

古今著聞集、六に「多近方に命じて、國風をうたはせられけり。」

こゝでは漢詩に對して我が國特有の詩形たる和歌をさしてゐる。

【大日本史】 ダイニホンシ。水戸の藩主徳川光圀が着手以來、水戸藩の大事業として代々相傳へて編纂し、明治三十九年に至つて完成した歴史である。神武天皇より後小

松天皇に至る間の本紀及び公武諸臣の列傳、すべて三百九十七卷、目錄六卷より成る。

【編纂】 ヘンサン。諸種の材料を蒐集して書物に編み作ること。「編輯」に同じ。

【鴻儒】 コウジュ。大儒。すぐれたる儒學者。「鴻」は「大」の義。

晉書の儒林傳の序に「主好斯氏、朝多君子、鴻儒碩學無乏於時。」

【碩學】 セキガク。學問の博く且つ深き人。博學の人。大學者。

後漢書の儒林傳論に「夫書理無二、義歸有宗、而碩學之徒、莫之或從、故通人鄙其固焉。」

【翻譯】 ホンヤク。一國の言語・文章を、同じ意義を有する他の國語の言語・文章になほすこと。

【没頭】 ボットウ。その事に熱中すること。その事にのみ精神をつぎこむこと。

【心血を搾る】 シンケツをシボる。精神を傾けつくすこと。非常に熱心にその事にあたること。

【研鑽】 ケンサン。みがききはめること。「鑽」は錐で穴を

あけるやうに、深く極めたづねる意。

樓論の詩に「尙反更從遊、問學加研鑽。」

【討覈】 タウカク。「討」は、たづねる。「覈」は、しらべ

る。熟して、たづねしらべる。調査する。究明する。

【會心】 クワイシン。心ゆくこと。心に満足すること。

世説に「會心處不必在遠。」

【文字】 モンジ。こゝでは文章の意。

浮世床に「ちつとは文字の方へも這入つて見ろ。」

【彰考館】 シヤウカウクワン。大日本史の編纂所。寛文十二年(三三三)水戸侯徳川光圀が、江戸小石川の邸内に設けた。後水戸に移したが明治三十九年(三五五)修史の業が終つたので、その年十二月二十六日に閉鎖した。

「彰考」の名は、左傳の「彰往考來」の語に基くといふ。今彰考館圖書館として藏書は彰考館文庫に所藏せられてある。現在水戸常磐神社の境内にある。

【大井廣貞】 オホキヒロサダ。水戸藩史學の家臣。伊藤仁齋に従學し、堀河學統に屬す。彰考館總裁として修史の

事に與つた。享保八年(二三八三)歿、年五十八。

【肅公】 シュクコウ。水戸家第四代の主、徳川綱條。初め光圀は兄讚岐守頼重の長子綱方を養つて子としたが、夭折したので、弟采女を以て嗣子とした。これが綱條である。享保三年(二三七八)薨。年六十四。諡して肅公といふ。

【先人】 センジン。先祖又は亡父。こゝでは綱條の亡父にあたる光圀をさす。

宜齋野乘に「今人稱先子、先君、先人爲父、然不獨父、祖宗皆可也。」

【伯夷】 ハクイ。伯夷は殷の孤竹君の子。叔齊の兄。兄弟は國を讓りて受けず、遂に共に國を去つた。周の武王が殷を伐たうとした時、夷齊は馬を叩へて諫止したが、終に容れられず、武王は殷を伐つて天下を治めた。その時夷齊は周の粟を食ふ事を恥ぢて首陽山にかくれ、薇(ワラビ)を采りて食ひ、遂に餓死をしたといふ。

【蹶然】 チツゼン。はね起きるさまにいふ語。蹶起するさまにいふ。



禮記に「子貢歘然而起、負篋而立。」

【凜然】 リンゼン。(一)恐れをのゝくさま、烈しく身にしむさまなどにいふ語。

(二)悲壯なるさま、威嚴の鋭いさまにいふ語。

【氣風霜を挟み】 自然に備はる氣韻に犯すことの出来ぬ威嚴と迫力とを有してゐることをいふ。

【老學】 ラウガク。老學者。多年研鑽を積んで、學殖の深い學者。

【安積澹泊】 アサカタンバク。名は覺。水戸藩の史臣。十歳の時、朱舜水に就いて學んだ。爾來勉學を勵み、博學能文であつた。水戸義公は彼を聘して修史を總裁せしめた。新井白石・室鳩巢等と交が深く、大日本史編纂の計略・方針等は彼の意見によるものが少くなかつた。

【瞠若】 ダウジャク。驚いて目を見はるさま、あつけにとられるさまなどにいふ語。

莊子、田子方に「夫子歩亦步、趨亦趨。夫子奔逸絶塵、而回瞠若乎其後。」  
(夫子は孔子。回は顔回)

【駭服】 ガイフク。驚いて敬服すること。

【愈窮して而る後に工なり】 愈、困りはてて、そこを努力して切り抜けて後に、はじめて巧になるといふ意。

古人の言としてあるが、これは歐陽修の梅聖俞詩集序に「愈窮而後工、然則非詩之能窮人、殆窮而後工也。」とあるのを言つたものか。

【道破】 ダウハ。言ひつくす。残りなく言ふ。的にあたつた事をいふ。

【賈島】 カタウ。范陽の人。字は浪仙。唐の詩人。

湘素雜記の劉公嘉話に、「賈島初赴舉京師、一日於驢上得句、云、鳥宿池邊樹、僧敲月下門、始欲著推字、又欲著敲字、煉之未定、遂於驢上吟哦、時々引手作推敲之勢、時韓愈、吏部權京兆、島不覺衝至、第三節、左右擁至、尹前、島具對、所、得詩句、韓立馬良久、謂島曰、作敲字佳矣、遂與並轡而歸」とある。書言故事にも、略、同じことが見え

【慘澹】 サンタン。(一)さま／＼に心をなやますさま、又、甚だしく思考を費すさまにいふ語。

杜甫の詩に「意匠慘澹經營中。」

(二)なげかはしくいたましいさまにいふ語。

杜甫の詩に「踴躍常人情、慘澹苦志士。」

(三)物すごいさま、又、うすぐらいさまにいふ語。

白居易の詩に「雲容陰慘澹。」

こゝでは(一)の意。

【本朝】 ホンテウ。我が國の朝廷、轉じて我が國をいふ。

【異國】 異國に對する語。

砂石集に「當社は本朝の諸神の父母にて」

【都良香】 ミヤコノヨシカ。初の名は言道。京都の左京に生れた。主計頭都貞繼の子である。大内記、文學博士、兼越後權守に至る。

【羅城門】 ラジャウモン。古昔、京都の外郭の正南に設けた門。「羅城」は外郭即ち、城のそとぐるわをいふ。

このことは十訓抄第十に次のやうに見えてゐる。

「同じ人(都良香)羅城門を過ぐとて「氣霧風梳、新柳髮」と詠じたれば、樓上に聲ありて、「水消浪洗、舊苔鬚」とつけたりけり。良香菅丞相の御前にてこの詩を自讀し申

しければ『下の句は鬼の詞なり』とぞ仰せられける。」

【一聯】 イチレン。漢詩文の偶句をいふ。

【氣霧風梳新柳髮 水消浪洗舊苔鬚】「春になると、今迄空を鎖してゐた冬雲も散じて、天氣が晴朗となつた。吹く風は新緑の柳の枝を、恰も髮をくしげづるが如くになびかせ、張りときざしてゐた川の氷はとけて、浪は去年の苔を洗つてゐる」との意。髮と鬚とを對せしめてゐる。

【鬼神】 キシン。神靈。超人間。

古今集の序に「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ。」

【韻士】 キンシ。詩文を弄ぶやうな風流な人。

【嘔血苦心】 オウケツクシン。血をはくほど苦心慘澹すること。

【歌合】 ウタアハセ。一座を左右に分けて和歌をよみ、優劣を判定して遊ぶ歌の會。その起源は分明でない。我が國では平安朝時代になつて現れた。支那の鬪草・鬪歌・戰詩などの影響と考へられるものもあるが、日本の歌合はそれらの模倣でなく、獨自に發展したと思はれる。

【憂心忡々】 イウシンチュウチュウ。心のうれひいたむさ